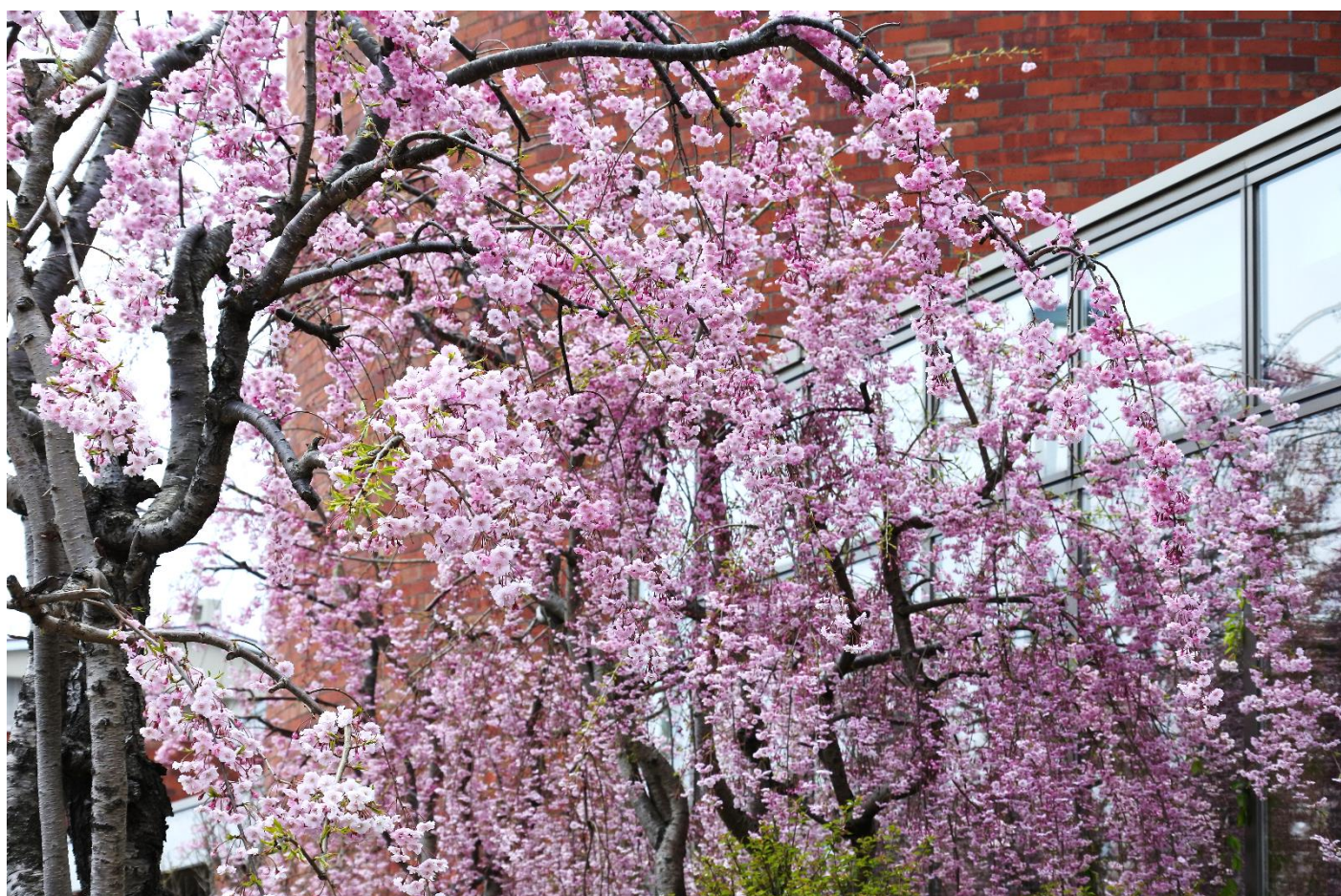


市民文芸

令和2年度

函館市民文芸

第60集



函館市中央図書館

指定管理者 図書館流通センター・

マルエイヘルシーサービス共同事業体

函館市民文芸

第60集

目次

◇随筆（対馬 俊明 選）

【入選】

付録の楽しみ	武田 勉	1
砂浜	畠田 実里	3
揺籃期	山野 みちこ	5
円盤おにぎりの味	水 関 清	7

【佳作】

函館弁の思い出	齋 藤 法	9
コーヒー飲んでいきませんか	佐 藤 健	11

コロナになって気づいた事

【選評】

命を追いかけて	野口 裕子	13
	元 木 いづみ	15
		17

◇小説（安東 璋二 選）

【入選】

揺らぐ	畠田 実里	19
俺の謙信	日 高 光	34

【佳作】

秘湯夫婦旅	佐 藤 憲 明	41
函館ステップ	高 橋 剛 治	58
ワンダフル寝台特急	水 関 清	75

◇文芸評論（安東 璋二 選）

【入選】

啄木の「我を愛する歌」とは何か？

【選評】

	水 関 清	90
		106

◇ノンフィクション（竹中 征機 選）

【入選】

いか釣り船団―山背泊という港町―

．．．．齊藤 満

榎本武揚の言い分．．．．木村 裕 俊

連作短編集「フィフティープル

（50人の人々）」を読む

．．．．菱井 亜 紀

【佳作】

カラオケ・レクイエム・パーティー

（今季亡くなった歌い手達へ

．．．．．高橋 剛 治

ゲルニカ．．．．．菊地 政 義

「谷地学校」物語．．．．小島 栄 樹

【選評】

．．．．．

◇詩（鷺谷 峰雄 選）

【入選】

ほおずきと風鈴．．．．武田 友

【佳作】

季節のバトンタッチ．．．．玉掛 公 恵

夕暮に．．．．．高橋 洋 子

【選評】

．．．．．

◇短歌（山縣 庸美 選）

【入選】

竹田光彦・柴田泰子・水関清．．．．

【佳作】

渡邊陸王・森田裕・菊地利春・三本木萌・

大山利子．．．．．

【選評】

．．．．．

【選者詠】

．．．．．

◇俳句（熊澤 三太郎 選）

【入選】 千葉誠一・斎藤ふじお・富樫進……………

176

【佳作】 石岡繁雄・太田満喜子・住吉紀美子・見春妙子・

小坂節子……………

176

【選評】……………

177

【選者吟】……………

178

◇川柳（中村 宵星 選）

【入選】 白井靖孝・水島悦子・伊藤静子……………

179

【佳作】 本間総子・岩本真穂・鍋倉英諒・大山利子・

加藤由美子……………

179

【選評】……………

180

【選者吟】……………

182

◇審査員紹介・あとがき……………

183



付録の楽しみ

武田 勉

八年ほど前に生涯で味わうことのできる最大級の激痛に見舞われた。心臓を取り巻く三本の冠動脈が詰まっていたらしかった。その冠動脈を三本とも切除し、そこに身体の他の部位の健康な動脈血管を切り出して移植した。あまりの痛さにもう駄目かと覚悟したが幸いにも一命を取り止め、再び心臓は鼓動を打ち始めた。

迎えの使者と行き違ったのかまだ生きているところを見ると、幾分かの猶予の時間が残されているということらしい。病気でなくとも年齢的には鬼籍に接近しつつあるので、年月の経過とともにそれなりに気配を感じてきていた。家族に世話をかけないで自宅で終焉するのを理想としてきたが、健康のままで生きて行けるか怪しくなってきた、再度病院か

老人施設に收容される可能性も否定できない状況になってきた。入院は仕方ないにしても、老人施設に関しては一抹の不安がよぎる。終の住まいとして移り住むと、家族の負担は軽減されるだろうが、強制的に別居させられているような気分になって釈然としない面もある。経済的なことを別にすれば老夫婦ごと転居するなら問題も解消されるかもしれない。どうかで諦めるか切なさや友にするしか方法はないものだろうか。

手術後はその前と比べて元気も多少薄れ、見た目的に危うい歩き方に見えたりするが、自分の中ではまだ足どりはしっかりしていると思っている。

手術した時点で寿命が尽きたと思えば、多少心臓の動脈が詰まったことなど気にすることはない。そう考えると勝手

に気持ちも軽くなる。年齢や病気を跳ね除け、若かったころ出会ったようなこころ弾む出来事が待ち受けてくれていても良さそうな気がたつてくる。

子供のころ雑誌の発売日が待ち遠しかった。いち早く手に入れるためなんども書店に足を運んだ。小遣いで買っていた雑誌の本体より付録の方が数倍うれしかった。カサカサ音を立てるセロファン包装を開封すると、宇宙を旅する探査機や深海を航行する潜水艦だったり、新発明のエネルギーで動くロボットなどが飛び出してきた。厚手の型紙からパーツを切り離し組み立てていくと、そこは青い地球の見える宇宙空間や異形の魚が泳いでいる深い海の底だった。宇宙スーツを着た人間と人工ロボットが共存して暮らしている街並みを背景に、空飛

ぶ自動車を配置すると、そこに未来都市が出現した。子供ながら近い将来の世界は夢と希望に満ち溢れていて、科学の力が明るい新時代をもたらしてくれるだろうと想像していた。毎月添付されてくる付録を夢中になって組み立てていたところが昨日のように甦ってきたりする。年齢なのかそれとも病気をしたことによるのか、新聞の「おくやみ欄」に目が向くようになってきた。特に意識している訳ではないのにそこに記されている年齢が気になりだしてきている。

九月の初旬ころ、新聞に男女七名の方の告知が載っていた。自分より少し年上で七十から九十歳代の方たちだった。年齢が自分より上だとなぜかほっとするし、下だと心臓が圧迫されるようで気分が落ち込んだりする。命の長さは人それぞれだが、すでにその欄に引き寄せられてもおかしくない年齢に達したのかもれない。いつからか視力が低下し老眼鏡なしでは小さな文字は読めなくなってしまった。レンズ越しに残された余緑

の長さを数えてみたりして、ページをめくるときも忘れて拡大鏡を握ったまま座り込んでいることがあったりする。

子供のころには心臓手術をする日が来るとは夢にも思わなかった。死ぬほど痛い目に会わされるなどは以ての外だ。そう遠くない将来、寝たきりになる予感も視野に入れて、筋肉の衰えを防いでくれるかもしれない運動にも励み、心臓の音に耳を傾けながら付録のような生の残りを過ごすより対処の仕方はなさそうだ。内臓に長年溜まった錆を、キリリと冷えた琥珀の泡で洗い流し、暑氣払いてもするとちよつとは寿命が延びてくれるだろうか。

小さいころの輝く瞳に映った新時代や遠い先の理想の姿に出会えなかったとしても、傷だらけの心臓を騙しだまし働かせ、この街を自由に歩きいつまでも見詰めていたい。海峡を渡る潮風に吹かれながらすべてが果てて寝静まるまで、踊る人の輪の中で我を忘れ、時すらも忘れて踊り続けようか。

もしも気の迷いでなければ、付録の包みはまだ開かれたばかりのような気がする。

了

砂浜

畠田 実里

郷里の思い出は、砂浜と共にあった。砂浜は生活の場であり、遊び場であった。夏から秋は、コンブの干し場となり、イカ糞とも呼ばれる、イカの干し場となった。

そのため、遊び場は殆ど無くなったが、コンブやイカの干し場の僅かなすき間を見つけて、相撲や陣取りをして遊んだ。時には、干してあるコンブを踏みつけてしまったり、まだ乾いていないイカを砂に落したりして怒鳴られ、時には棒を振り上げて追われ、散らばることもあった。それでも、懲りることはなかった。雨の降らない日は、朝から暗くなるまで、砂浜で過ごしたと言ってもいいくらいだ。

極めつけは、なんといっても砂浜での運動会だ。学校は狭い谷間にあったから、

運動会をやるような、広場がなかったのである。

それに比べ、砂浜の広いところは、干潮満潮によって多少の違いがあるものの、渚まで九十から百メートルくらいもあった。子供の少ない学校の運動会をやるには、十分の広さと言えた。

走路は、集落の人たちが総出で、杭を打ち、わら縄を張って作った。走りにくいだろうと思うかも知れないが、地面の上でやる運動会を見たことも、やったことも、ないのでから気遣いは無用である。その頃、集落の民家は約八十戸ほどであったと記憶している。走路をつくるにしても住民の手を借りなければ出来なかったのだ、運動会は集落を上げての大イベントだった。

観客は走路を囲むように高床式の小

屋を建て、そこから見物し応援するのだった。小屋は、突風で飛び散る砂からも、突然の雨からも守ってくれた。また、海が荒れて満潮のときなどは、走路まで波が押し寄せてくることもあった。そんなハプニングにも怖がるどころか、水浸しになって競技する姿に爆笑を誘った。

ところが、わたしが小学校六年生のときの秋の台風の高波で砂は流され、運動会をやるだけの広さがなくなってしまった。また、大雨による洪水は一夜にして、学校の近くの畑も川原にしてしまった。

その後、数年ほどで砂浜は元通りになったものの、二度と運動会は行われることはなかった。

翌年、流された畑のあと地に、集落の人達総出で、土を盛りグラウンドをつく

ったのである。

その年わたしは隣村の中学校に通った。驚いたのは、運動会は地面の上で、足袋を履いて走るといふ。心配したのは、転んだり、騎馬戦で落下したら、怪我をしないだろうかと言ふことだった。

世間知らずのわたしは、運動会はどこでも、砂浜でやるものとはかり思つていたことだ。

集落から、東に行くにも西に行くにも海と崖のすき間の曲がりくねった道を、頭上を気にしながら、素掘りのトンネルをいくつも通らなくてはならなかった。

こんなこともあつて、土地から外の世界を見たこともなかったせいも、全くもつて「井の中の蛙」だったのである。いまで言うカルチャーショックは大きかった。これは、恥ずかしくて誰にも言えなかったが、ここで白状したい。

二十年後、墓参りも兼ねて郷里に行つてみた。運動会をやった広い砂浜は、跡形もなく消えていた。

渚だったあたりを、一直線に国道が通っている。その海側に防波堤があり、さらに道路から海が見えないくらいの高さで、波消しブロックが積み上げられていた。

当時は、函館から郷里までバスで二時間半から三時間ほどかかった。いまは、道路も整備され、トンネルもほぼ直線になった。函館から自動車で僅か三十分だ。利便性もよく安全になったことは言うまでもない。恐らく砂浜の砂もトンネルや国道のコンクリートになったのだらう。

しかし、安全で便利になったとは言え、最近では生活道路を通つても、空き家も目につき、人影もあまり見られなくなつてきている。

一段と交通の便も安全性も、高まつているとは言え、人口の減少は寂しい感がある。

消えてしまった砂浜のように、やがてここに人々の暮らしがあつたことも、忘れられないようにと、切に願っている。

揺籃期

山野 みちこ

つい先ごろまで、蟬のことを可哀想な生きものだと思っていた。暗い地中で七年だか八年の幼虫時代を過ごし地上に出て、ようやく成虫になったと思ったら一週間で死んでしまう。なんて儚い運命の持ち主なのだろう――。

でも、ほんとうにそうなのだろうか。地上にいて明るい陽光をあび薫風になでられることが最良だというのは人間の感覚ではないのか。蟬にとっては地中の方が天国なのかもしれない。おだやかな晴天ばかりではない地上。ときには雨風にさらされるだろうし、弱肉強食の世界で捕食の対象にもなるだろう。そんな危険がみちているところにくらべると地下は、羽毛ぶとんにくるまっているように快く、静かにゆっくり微睡んでいられる。蟬は一生のほとんどもを、平安なゆ

りかごで過ごしているといえるのかもれない。

ゆりかごといえば、TVの動物番組で生まれた子どもと母親がいつしよにいる映像を見ると心が和む。小動物はもちろん、熊やライオンなど猛獣といわれるものでも赤ちゃん時代の愛らしさといったらない。見えているのかいないのか分からない瞳で母親をさがし、四肢に精一杯の力をこめて歩こうとする。傍らで見守る母親はいとおしそうに我が子からだを舐めまわし乳をあたえる。だれも侵すことのできない、母子がひとつになった幸せに満ちた光景……。子が一人前になるまで母親はたつぷりと愛情をそそぎながら生きる術を教えていく。食べものの採取のしかた。天敵とのたたかいかた。種の分限を土台にしたそのトレ

ーニングは知恵にあふれ絶妙である。

やがてやってくる、ひとり立ちする日。それまで優しかった母親が豹変する。よそよそしい態度をとり子どもが近づくと牙をむき唸り声をあげる。昨日までと余りにもちがう母親のそぶりに子はおどろき戸惑い、おかあさん、どうしたの？と訝しみながらも受け入れるしかなく……。しだいに母と子のあいだは距離があき、それぞれの道へと踏みだす。ナレーションが「親と別れ、ひとり立ちした子どもが無事おとなになる割合はXYパーセント」と、そのあと大自然の中で生き抜いていく困難を視聴者に告げる。

保育園に通いだしました。安堵した反面、寂しいです――先日、嫁からメール

が入った。

彼女が育児休暇を終え職場復帰しようというとき新型コロナウイルスが日本をおそった。首都東京は『都市封鎖』

するかもしれないといわれ、国は『緊急事態宣言』をだした。感染に直結する

『三密』にならないよう『不要不急』

の外出はつしむこと。一般の会社は可能なかぎりリモートとやりに切り替え、公共施設は閉鎖、学校は休校。とうぜん保育園も休園に。春から始まる筈だった息子一家の新しい生活設計は頓挫した。

得体のしれない凶暴なウイルスはそれから世界中に拡がって収まる気配がない。毎日信じられない数のひとが亡くなっているニュースに息を詰めながら、春をおくり、夏も終わりに近づき……。

どんな要因が作用しているのか専門家も特定できないらしいが、日本は他の国よりウイルスのダメージが小さくすんで、不安ながらも徐々にふつうの生活を取りもどし始めた。四月に二日間だけ

行つて休園していた保育園に、迷いはしたが、九月から通わせることにしたのだそう。

「ホツとしたけれど、寂しい」。嫁のことはが胸にしみる。きつと『ステイ・ホーム』のあいだ濃密な母子の時間を過ごしてきたのだらう。積木で遊んだり、絵本を開いたり、ベランダで水遊びもさせ、人のいないところを選んで散歩にもいった。その間、二歳の誕生日もおとずれた。だが、そんな母子が密着した時間は終わった。職場と保育園、別々の場所で、一日の大半を違う景色を見ながら過ごす日々がはじまった。おやつを食べて『おいしい』と笑つてくれた子の顔は目のまえにない。

子が母親父親の庇護のもと過ごす時間は種によつて長短さまざまだという。生まれてすぐひとり立ちできるのもあれば、生きていくための準備が整うまでかなり長いあいだ親や集団とともに過ごさなければならぬ動物もいる。人間はその最たるものだらう。(もしかして

ヒトは、完全にひとり立ちできない生きものかもしれない……なぜなら個人で衣食住をまかなえないのだから)

思いもしなかったコロナ禍は個と社会の関係を考えさせているが、災厄の有無にかかわらず、地球上の生物として個に与えられた枠は昔からなんら変わっていない。生を受け、終わりの日まで辿る。だから、どんなかたちにせよ、それぞれ『搖籃期』をもつ。まだ世の煩わしさと無縁な、ぬくぬくとした黄金時代！ 今、孫はそこから飛び立つたらしい。散歩でみつけた蟬のぬけがらを見つめている孫の写真が送られてきたことを思い出す。

円盤おにぎりの味

水 関 清

離島診療所の運営を命じられて赴任したのは、働き盛りの三〇代のことであった。船便が運ぶ本土からの物資以外は、自給自足の島の生活。リアス式海岸の囲む海に浮かんだ島の平地は狭く、そこから山の斜面にしがみつくようにして人家が立ち並ぶ。そのようにして斜めに展開する、家並とは言えないような景觀の間をぬつて、人はひとりがすれ違えるような細い道が尾根筋に向かって伸びる。そこには、芋やネギや大根などを植えた畑が作られている。

その上には、ハチマキ農道と呼ばれる道があつて、島の中腹を周回しており、農道から山頂にかけての山肌には、ミカン、伊予柑、甘夏柑などの柑橘類が栽培されていた。秋から初冬の時期にこの柑橘畑を遠望すると、收穫時期の異なる果

実が実をつけるために、ある区画は橙色、隣の区画は緑色、そのまた隣は黄色などと、まるで島がチェックのセーターを着たような、みごとな景觀を見せていた。

島に暮らす人びとの多くは、半農半漁で生計を立てていた。どの家でも男たちは早晩から沖合に出て魚を取り、女たちはわずかな畑を耕しては、自家用の作物を栽培していた。例外は、ミカン農家、農協職員、そして警察官と私たちを含む診療所職員であつた。

半農半漁の暮らしには、物々交換の習慣が組込まれていた。男たちは、その日の漁を終えて陸に上がると、手元に残した規格外の魚と、女たちが畑で丹精して育てた作物とを交換したりするとともに、農作業の合間に作ったおかずを、与えたり貰ったりする日常であつた。ミカ

ン農家や農協職員であつても、親戚づきあいの輪の中に入つてしまえば、物々交換で魚や野菜は手に入り、島では貴重な現金収入は、本土からの物資に変えて提供されていた。

こうした輪の中から外れてしまうのが私たちや警察官であつたが、そこは濃密な島の付き合いのこと、いつの間にかどんなかの物々交換の輪の中に入れていた。だいて、魚屋のない島の暮らしでも、魚に不自由することはなくなつた。それほどばかりかミカン農家の方には、畑に実るミカン、一回に一〇個までなら、所有者に断りなく採つても良いという冗談のような特典までいた。だいて、ミカンも実る枝にぎりぎり届く背丈になつた子供たちを喜ばせてくれた。

離島では、赤ちゃんから高齢者まで、

ほぼすべての年齢の住民と地域社会の中で関わることを前提として、医療が展開される。島の学校の校医も兼ねたので、子どもたちとの関わりは特に濃厚となる。笑って、泣いて、走り回って、くるくるとよく動き、毎日その世界を着実にひろげていく子どもとの間の距離が、とにかく近いのである。

離島勤務九年目の春を迎える頃、本土の診療所への転任が決まった。それを聞きつけた子どもたちがやって来て、思い出作りの遠足をしようということになった。行き先は、桜が見ごろの「はちまき農道」。私は子どもたちに、おにぎり持参を提案した。条件はふたつ。具は何も入れず、塩むすびとすること。必ず二つ以上を、自分の手で握ること。ひとつは自分のために、残りはお友達と交換のために。

当日は快晴。農道の路肩から谷筋の先に広がる海に向けて、降り注ぐように咲く桜は素晴らしく、私の次の任地も、海を隔てて遙か遠くに望むことができた。

農道で桜を見ながら、私の不格好な三角おにぎりと交換して頬張ったのは、S君のおにぎり。三角でも丸でもなく、円盤状だった。一生懸命に握ったのだろう。円盤の周辺部は、お餅のように固まっていた。口の中でほくしながら、所々に混じる塩粒の塊とともに、離島暮らしの日々を噛みしめた。

そんな人心の優しさに馴染みながらの離島勤務を終えて、本土の診療所に転任するために連絡船に乗った時のことは、忘れがたい。

最初のうちは走り回り、はしやぎ通しだった子どもたちが、繰り出されていくテープの長さに反比例しておとなしくなり、ついには泣き顔になって、小さくなっていく船影に手を振る姿を、船上から見つめたのである。埠頭を離れた船が港を画する灯台の間を抜けて海峡に進み入ろうとする頃、聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。

声のした方を探すと、先ほど抜けてきた灯台のたもとの消波ブロックの上に

人影が見える。S君だ。灯台から伸びる堤防は、埠頭に続いており、その上を、校医を務めていた小学校の子どもたちが駆けて来る。なるほど、こうすれば堤防に並行して航行する連絡船に、もう一度近づけるのだ。

呼びかけに応えようとしても、声にならない。手も振れない。涙で曇った視界の中で、少しずつ小さくなっていくS君たちの姿を、ただ見つめ続けるしかなかった。

流れ続ける涙には、円盤おにぎりの味がした。

函館弁の思い出

齋藤 法

もう七十年近くも昔の話になる。

私は、函館生まれの函館育ち、他の土地には縁がなかった。小学生時代は学校から帰ると、日没まで戸外で遊びまくっていた。

小学六年生の三学期寸前、家庭の事情で、四人兄妹の末っ子の私が、急に東京の親戚に預けられることになった。

十二月三十日、祖母に連れられ、連絡船に乗り、汽車で一昼夜、三十一日の夕方世田谷の家に着いた。北海道のようなストーブはなく、コタツに入り家人の帰りを待っていた。思えば不安はなく、むしろいくらかの期待はあった。しかし夕暮れのコタツの中で、母も姉達もいない淋しさからと、旅の疲れに、泣きながら、いつか眠っていた。

翌日は元旦、玄關先に出てみると、遠

くに富士山が見え、家の裏の方から、子供達の楽しそうな声が聞えてきた。行ってみると数人で羽根つきをしていた。私は珍しさと、楽しそうな様子に、「かぜて」と声をかけた。みんなは見馴れない子が、何か訳のわからない事を言っていると、ポカンとしている。私は考えて「入れて」と言うと「まぜてのことらしいよ」と、ようやく仲間に入れてもらった。一週間程して転校手続きをとり、桜ヶ丘小学校の一員になった。担任は梅原信夫先生。優しいようなメガネの先生だった。

ある日掃除当番になり、私が「ゴミ投げてくるから」、と言うと「どこにほおるの？きちんと捨てる場所があるのよ」と言われた。投げるは、ボールなど遠くに投げることでゴミは「すてる」と言うことを知らされる。

又、ある朝三〇四センチ積った雪に、体育の授業と、雪合戦をした。みんなは素手で雪玉を作りぶつけ合った。私は「手袋はかかないとシャツコイショ!!」と言うと「手袋は履かないよ、履くのは靴や靴下、手袋は、はめるって言うのよ」と。そして「シャツコイ、シャツコイ!!」と大笑いした。

クラスの友達に函館弁がおもしろい、といつも私の周りに集まってきて話しかけてくれ楽しい日々だった。何か言わせようと次々と話しかけてくる。「ちがうってば!!なんもだよ、だから言ったつしよ、わからずやだね」など、みんな口まねをするが、アクセントが異なって大笑い。いい加減に疲れて「あゝこわい!!」と言えば「何が恐ろしいの?」など、すっかり伝わらない言葉に戸惑いもした。

男の子は、家の周りに熊はいるの？とか、ヒョウが降るってどんなもの？こわいの、など色が黒くてミッタクナイ私を見て、函館ってどんな山の中かと思つたようだ。私は「街の中はチンチン電車だつて走っているし、デパートだつて二ツもあるんだから!!」と胸を張つた。

近くに松屋さんという日用雑貨の店があり当時、紅梅というキャラメルが置いてあつてそれを買うに行くのが楽しみだつた。当時確か十円だつた記憶がある。私が店先で「こめんください。」と言つと、おばさんが「はいなにかご用ですか」と近寄ってくる。私が「紅梅一ツ下さい。」と言つと、「あゝおかいものね」と。あまり気づいていなかったが、大人も、子供も、買物に来る時は「ちようだいな。」とか「くださいな。」と言つて店に入る。私は何か用事のある人かと思われたようだ。

小学校から少し下がった所に馬事公園があり、時々一人で遊びに行った。函館では、沢山の馬を見てきたが、同じ馬

でも、なんでこんなにスマートで格好がいいのかと、飽きずにながめていた。

ある日世田谷のボロ市も見に行った。この市は夕暮れから出る。うす暗い照りにアセチレンガスの匂いがして、外国人客が多く、見るもの総てが未経験の世界だつた。

時代的には、小田急線にロマンスカーが登場したり、ナイロンの風呂敷が初めて売られるようになった。この風呂敷は肉厚だが柔らかく、きれいな花模様があり、当時の若い女性には、雨やみぞれの時、三角に折り、スカーフのようにかぶつたりして、それがオシャレだつた。確か一枚三百円だつたと思う。私にはとても手に入れることは出来なかったが、店先でナイロン特有の柔らかい感触や匂いを楽しんだ。

どちらかと言つと男性っぽい函館弁の中で育つた私には、滑らかな東京弁は聞いているだけで心地良く、優しくなれる思いだつた。

わずか三ヶ月の東京での生活だつた

が、今も時折懐かしく思い出される甘酸っぱい思い出の一コマである。

コーヒー飲んでいきませんか

佐藤 健

世界中で新型コロナウイルス感染が拡大する今年、その防止策として『三密』すなわち密閉・密集・密接の回避が推奨されています。今では、家の外に出るときのマスクの着用は欠かせません。ソーシャルディスタンスと言って、常に相手との距離を気にしながらの生活スタイルに変わって、『新しい生活様式』として定着しつつあります。

私の出身の岩手県では、日本全国にコロナの感染が拡大する中で、しばらくの間、感染者数がゼロの期間が続きました。それを見て、何の根拠もないのに故郷で一人暮らしをしている八二歳の母は安心であるように思っていました。そんなコロナ禍の中でふと昔のことを思い出します。

私の故郷は、岩手県南部の山間の小さ

な町です。人通りが途絶えた交差点に立っているのは私が小学六年生の時に据え付けられた唯一の信号機です。実家はその町から少し離れた沢沿いの集落にあり、隣の家までは田畑を挟んで一〇〇m以上離れています。子供の頃の回覧板を持って行く手伝いは嫌で仕方ありませんでした。

そんな故郷ですが、私が育った時代は人も多く子供たちの声があたりに響いていました。実家は村のメイン道路に面しており、家の前を人が行き来します。冬には山から切り出した木材を載せた大きなソリを引いて馬も通りました。道の真ん中には湯気が立つ馬の糞の置き土産があったりしたものです。

祖母や母は前を通る人に、あいさつ代わりに話し掛けていました。

「おちやつこ飲んで、休んでいぐえ」
「はい、まだ来つからね、今度ね」
と言って大方の人は通り過ぎますが、中には休んでいく人もいて、お茶を飲みながら自家製の沢庵や白菜 きゅうり、ナスなどの漬物をつまんで世間話をし
て帰って行きます。

大人たちの話は、小学生の私にとってもしろいものではありませんでしたが何となく興味が有り、休みの日などは横でおとなしく聞いていたものです。

世の中は高度経済成長期に入っていました。父親の通勤がオートバイから自家用車になり、冷蔵庫が来てテレビがカラーになりました。そして、いつの間にか食卓の上にはインスタントコーヒーのビンが置かれるようになっていました。食後のお茶がコーヒーになり、祖父

母も妹も普通に飲んでいました。ビンの中にはカレーを食べる時の大さじが突っ込まれていて、隣にはビニール袋を開けたままの上白糖があつて、それに差し込まれた大さじの柄に砂糖の袋の口の部分を巻き付けて輪ゴムで何重にも縛つてあります。それがゆるい中でハエが飛んでいたり、アリが行列をつくることになります。

そして、いつの日からか、

「コーシ飲んでいがにやすか〜」

と言う声掛けに変わったのです。

結婚式の引き出物でいただいた花柄やチューリップの形をしたカップに大さじ一杯のコーヒの粉と大さじ山盛りの砂糖を入れて、これまた花柄の魔法瓶からお湯を注いで、受け皿に載せて出すのです。あの頃の家電は、花柄が多かったように記憶しています。家電だけでなくカーテンや座布団カバーなども同様だったように思います。お茶請けはやっぱ漬物でしたが、甘いコーヒと漬物の塩加減が絶妙でした。カップの底

には溶け切らない茶色くなつた砂糖の塊が残し、そこにお湯を足してカップを勢よく回して溶かしながら飲み干すのがマナーであるかのように思っていました。

テレビドラマによくあつた喫茶店で男女の会話を不思議な思いで見えてました。

「お砂糖は、おいくつ」

「じゃあ、ひとつで」

角砂糖など見たこともなく、我が家で砂糖の量を尋ねる者はいません。仮に、

「二つお願いします」

などと言つたとしたら、二、三回はお湯を足して、その都度カップを回さなければならなかつたでしょう。あの時代にコーヒは各家庭に急速に浸透してお茶に取って代わつたのです。そのうちにテレビで、

「クリープを入れないコーヒなんて」
のコーマシヤルが流れ出すとテーブルのコーヒと砂糖の隣に黄色いラベルのビンも置かれるようになりました。

クリープのビンには小さじがねじ込まれています。砂糖を大さじ山盛りに入れたコーヒにクリープを入れても色が乳白色に変わるだけで味の変化はほとんどわかりませんでした。

あれから半世紀が経とうとしています。令和の時代を目前にした昨年の二月に父親は八十五年の生涯を終えました。

「コーシ飲んでいがにやすか〜」

過疎化が進んだ今は、母が声を掛けようにも家の前を通る人はほとんどいません。

コロナになって気づいた事

野口 裕子

私の所属する合唱団は、毎週木曜日の午後7時から2時間、練習に励んでいます。決して上手いとは言えないレベルですが、お腹の底から声を出して声を合わせるの、何とも気持ちのいい事でした。3月8日に出演が決まっていたコンサートに向けて最後の練習が終わった2月のある日。道南地方でコロナに感染したという情報が。それまで、札幌では出ていたものの、何となくまだ人ごとのように思っていたので、身近に大変な事が起きて来ているのを感じました。出演予定のイベントがコロナで中止すると聞き、これはただ事ではないんだと認識した時に、合唱団の練習も急ぎや中止との連絡が。毎週の楽しみがなくなってしまう、気が抜けた状態になりながらも暖かくなったら収まるんだろうなと信

じ、1、2か月辛抱すれば良いと思っていたのですが、どんどん状況は悪くなるばかり。緊急事態宣言が出て、家から出る事もままならない日々が続きました。その間、転勤などで大切な仲間達が函館を去る事が決まっても、送別会はおろか集まる事も出来ず、歌ってお別れするという、合唱団恒例のお見送りもする事が出来ず、心が痛くて仕方がなかったです。それから数か月経っても、依然として合唱団の活動が出来ないまま日にちばかり過ぎて行きました。時折、合唱団の幹部で集まって相談するも、慎重な意見が多く、活動再開には至りませんでした。歌う事は、仕事ではなく、趣味のひとつに過ぎない。趣味なんだから、少しでも危険ならやるべきではない。と言われ、私もそう思っていました。しかし、7か

月以上もやれない状態が続くと、コロナにはかからなくても、精神状態が不安定になっていくのを感じました。妙に怒りっぽくなっている自分。コロナ以前なら、同じ事を言われても、流せるような事でも、イラっとして反抗してしまう自分の態度に、後からビックリしてしまった事もあります。かと思つと、涙もろくなつてしまい、ささいな事で涙が流れてしまつたり。一体、私の中で何が起きているのだろう？と友人に聞いてみたら、「それもコロナ病だよ。」と言われました。好きな事を仲間と一緒にする事で、心の安定に繋がる。人と接しない生活というのは、どれだけ不安な気持ちが高まるのか。身を持って体験しました。そんな中で、合唱団の再開に向けて、先日話し合いの時に、やっと前向きな

方向に話が進んだのです。みなさん、慎重なだけけど、「もうそろそろ始めてみていいのではないか？」という意見が満場一致でありました。趣味、と言われればそれまでの合唱だけれど、団員の中で、心の支えの部分になっていて、ガマンが限界に達しているんだなと感じました。みんな同じなんだなあと。いきなりの練習再開は無謀なので、まずはお試し練習という事で、10月から合唱用マスクを着けて練習をしてみる事になりました。これは小さいけれど大きな一歩になり、決まった日には、合唱団の仲間と笑顔で喜び合いました。

当り前に出来ていた事が出来なくなるとってこんなに辛い事だったんだなと改めて感じ、普通に出来る事のありがたさを身を持って感じた一瞬でした。10月からの練習が楽しみでなりません。しっかりと感染防止対策を取って臨みたいと思います。

そして、コロナになつて気づいた事それは、本当に大切な仲間や友達が出来

たという、意外にも嬉しい事もありました。私は、夫を亡くし、子供もおりませんので、1人暮らし。コロナの時には家族以外、誰とも会えないので、まさしくひとりぼっち、だったはずですが、でもそんな私の事を心配して、ラインや電話をくれたり、時にはオンライン飲み会もどきの事をしてくれたり。時々野菜や食べ物も届けてくれたりと、淋しさを感じる事もなく過ごす事が出来ました。こういう非常時に声を掛けてくれたり、気遣いをしてくれる人が、真の友達や仲間なんだなと気づかされる事が多々ありました。それまでは特に親しくなく仲間の一人に過ぎなかった人と、ラインで沢山話をして意気投合して、すっかり親友のようになってしまった人もいます。これは本当に嬉しい事でした。

そして最後にもう1つ。私の周りの男性の音楽仲間は口々にこう言っています。

「コロナになったら、周りの女性が美人になったんだよね。」って。そうかなあ？

と思つたら、どうやら、マスクをして顔を半分隠しているから、らしいのです。失礼ね！って思いついながらも、鏡を見ると確かにそうかも！って納得して笑つてしまう自分がいます。女性にとつては化粧品も減らないし、悪い事ばかりではないようですしね！さまざまな気づきをもらえたコロナですが、早く、本当の意味での日常が戻つて、笑い話を増やしたいと思つている今日この頃です。

命を追いかけて

元木 いづみ

黒の天鷲^{ビロード}を纏った天使は、旅立った。名前は、ナチュラ。黒目がちなラブラドル・レトリバーの雌である。

二〇〇三年八月に千葉で生まれ、四十日程経って飛行機で函館にやって来た。小さい頃は、遊びをせがんで、時にはやんちゃもしたが、人間好きの優しい犬種である。しつけ後は、「いい子だねえ。」「お利口だね。」を口癖のようにして育てた。

すっかり家族の一員、二女となった。十一歳を過ぎたあたりから、たまに足腰が立たないことや下痢で体重が減ったり、肉球の腫れ、しつぽの抜け毛などを通院することも増えてきた。

一昨年の秋に、下痢便に血や粘液も混じり診察を受けた。腎臓癌で、余命半年位と宣告された。肝臓の数値も高かった。

宣告された日より一日でも永く一緒にいたいと願ひ、胃腸の負担にならないように鶏ササミ肉や豆腐やサツマイモなどを加えた食事にした。元々、食いしん坊なので食欲が落ちることは滅多になかった。

今年の年明け間もない一月七日、夜中二時頃、『ギヤギヤーン!』とこれまで聞いたことのない鳴き声に飛び起き、ナチュラの寝ている居間に駆け下りた。

その頃は、夜中の排泄も増えていたので、オシッコかと思ひ、夫が抱いて玄關まで来た時にジャーと排尿した。そして、体が硬直を起こし、眼にも異変が見られ何が起こっているのかも判断がつかない初めての事だった。

体を横たえ、思わず大声を出して、名

前を呼び体をさすった。くそういう時は、さすったりしてはいけないことを後で知った。
何分位経ったのだろうか。体は、元に戻りホツと息をついた。

早朝、かかりつけの医院に走った。

先生は、

「いよいよ、来ましたね…。」

と話され、注射の処置をしてくださった。家族として出来ることは、言葉の話せないナチュラが少しでも心地よいと感じることをするだけだった。

殆ど寝たきりになってしまったけれど、元気な時と変わらず、ブラッシングやマッサージを続けた。特に、散歩と外の風が大好きだったので、瘦せたとは言え、十八キロの体を抱いて庭で囲いを作り、外気浴させた。

二月六日。その日は、朝六時半頃、けたたましいサイレンの音が近くで鳴り響いた。急いで外に出た。一軒先のお宅の二階から火の手が上がっていた。

幸い風は無く、手際よい消火活動により、延焼は免れた。第一陣は、九時頃引き揚げた。

我が家では、ナチュラの介護の日々の中、排尿間隔が長くなり、水分補給に気を遣っていた。夜中から朝方にかけて、体をのけぞらせ、唸るような吠えるような声を出し、発作が起こり苦しそうだった。

合間合間にさすったり、体位を変えたりして看病していた。お昼近くに、尿と黒っぽい便も出た。午後からも、弱い発作が見られた。

朝にきな粉水などを少し口にしたただだったので、脱脂綿に水を含ませ口元に近づけた。発作で食いしばり、唇が血で滲んでいたのでジェルを塗った。

その時、右眼からポツ、左眼からも

ポツと涙がこぼれ落ちた……。

その後、私は台所に立った。ほんの僅かな時間なのに何をしていたか思い出せない。

ふうっと静かな風が起こったような気配にナチュラの方を振り向いた。何だろう。首がうな垂れているように見え駆け寄った。舌が横に出ていた。眼が動いていない。心臓は止まっていた。瞬間、名前を呼び続けていた。

その夜、お花を供え、最期の添い寝をした。

天鵝絨の天使の耳は、何事もなかったように、以前と変わらず、すべすべしていた。

私は眼を瞑り、心も体も撫で続けた……。

「ナチュラ、笑ったね！」

いつもハーブの練習の終わり頃に、「ワン」と鳴いたけれど、その日に限って何回も「ワンワン」。そうか一緒に歌っていたの？じゃあ、歌ってごらん、と言ったら、即座に、よだれを垂らしただけだったよね！

「寄り添ってくれたね。」

母が終末期を迎え、「もう、いい……」と食べたがらなかった日。施設から帰宅し、哀しくて横たわっていると、いつの間にか傍に来て静かにお座りしていたね……。

十六年と五ヶ月余り、我が家に残してくれた記憶は日常に深く染み込み、時には嗚咽に襲われる。一緒に遊んだ緑の庭は、今年は沈黙している。ただ、弔いのマリーゴールドは願いを受け、今も光を浴びて咲いている。

選 評

対馬 俊明

今年の新型コロナ流行による社会的な閉塞が市民の日常にどのような影響をもたらすか危惧していたが、随筆作品の応募数は十六編と漸減程度で収まった。作品の題材について、外出や会合が制限されたためか、新たな自然や人との出会いを語る作品は少なかった。そのような中でも独自の視点と表現力で話題を提供してくれた作品四編を入選とし、それに次ぐ作品四編を佳作とした。選評については入選・佳作作品だけについて記す。

入選「付録の楽しみ」

武田 勉

はじめに、八年ほど前に、冠動脈を三本とも切除する手術を受け、動脈移植手術をして一命を取り留めた厳しい体験が語られる。その後の「猶予の時」をいかにして過ごすか、子供のころ、雑誌の付録を組み立てながら夢想した未来社

会を思い出し、傷ついた心臓をだましだまし働かせ、この街をいつまでも見つけていたいと結んでいる。最後の一節「もしも気の迷いでなければ、付録の包みはまだ開かれたばかりのような気がする」に、生きることへの強い意欲が感じられ胸を打つ。

入選「砂浜」

畠田 実里

砂浜が、生活の場であり、遊び場であった函館近郊の郷里の思い出。年に一度の集落を挙げての一大イベントの運動会。子供たちのがんばり、親たちの熱狂を語る文章に胸が躍る。その後の国道の整備で、砂浜が消え去った後に得られた安全性と利便性、そして人口減。開発がもたらす図式的な構図であるが、作者が込めた失われた砂浜への思いは、確かに伝わってくる。

入選「揺籃期」

山野 みちこ

はじめに、蟬の地中での長い幼虫時代についての記述があり、ついで生き物一

般の外敵から守られて過ごす揺籃期のことと語られる。身近な話題として、嫁から、新型コロナウィルスの流行で一時休園になっていた保育園が再開し、孫が通い始めたことが告げられ、「寂しいです」のメールが届く。子供との蜜月の時間を奪われた母親の気持ちも含めて、揺籃期を終えて、コロナ災害という試練の現実には飛び出て行く孫への励ましの思いが伝わってくる作品である。

入選「田盤おにぎりの味」

水関 清

離島診療所の運営のために赴任した島の自然と人々の生活が描かれる。農道から山頂にかけて栽培されている柑橘畑の色彩豊かな景観。半農半漁の生活の中で交換される魚と野菜。離島ならではの、すべての年齢の住民と関わって展開される医療活動。そして最後の子供たちとの別れの場面。北海道とは全く違った風土の中での、出会いと別れのドラマをカラー映像として読ませてくれた作者の文章力に感動した。

佳作「函館弁の思い出」 齋藤 法

「七十年近くも昔」とあるから昭和二十年代のことか。家庭の事情で四人兄妹の末っ子の私が東京の親戚の家に預けられることになって、学校の友達と「函館弁」で会話を交わす話。東京のことばと函館弁の違いの例として挙げられた言葉の対比がいちいち的確で、「私」の方も、函館弁にも東京の街にも劣等感を抱いていないところがとてもいい。

佳作「コーヒー飲んでいきませんか」

佐藤 健

世界中でコロナ感染が広がっていることを出だしに書いて、故郷岩手県の間部での、時代と共に変化した近所付き合いの様子を描いている。「おじやっこ飲んで」が、「コーシー飲んで」に変わるところがおもしろい。そして過疎化が、さらに人との接触を遠ざけ、コロナを近づけない皮肉を描いた作品。

佳作「コロナになって気づいた事」

野口 裕子

2月に道南地方でコロナ感染者がでたという情報で、所属する合唱団の活動ができない状態が続き、精神状態が不安定になっていく一人暮らしの「私」を合唱団の仲間が、ラインや電話で話をしてくれたり、助けてくれたことが書かれている。現代の社会では、年齢に関係なくいつでもどこでも孤立状態はおきてしまう。そのときどうするか、卑近な例として仲間の大切さをナイーブに語った一文である。最後にある、女性は、マスクをつけたらみな美人というジョークも素敵です。

佳作「命を追いかけて」 元木 いづみ

愛犬ナチュラ。ラブドール・レトリバーの死に至るまでの状況と追悼の思いを心を込めて描いている。命絶えるとき「ふうつと静かな風が起こったような気配」という描写に惹きつけられた。

揺らぐ

畠田 実里

幼い頃、ババは「母さん」と呼ばないだけで、「ババ」という名の母親だった。思い込みは、疑うということを知らない。

「母さんは、おめが生まれだときに、死んだんだ」

こう父に言われた時、初めてババの外に母親がいることを知って、わたしの心は揺らぎ始めた。

早く気づくべきだった。

小学校の入学式。

友達の場合は、父母と一緒にだった。従弟のアキオも父母と一緒に。わたしはババだけ……。

家に帰って、着替えをしてるときだった。

「おらの母さんは？」

「おめが生まれだとき、死んだって父さんも言ってたべ」

ババは途端に機嫌が悪くなったかと思うと、台所の方に行ってしまった。待ってても暫く戻って来なかった。何か訊いてはならないことだったのだろうか。着替えたものを片付けて、泣きたいのを我慢して、じっとしていた。

そう言えば、幼稚園に入った時も、同じようなことがあつ

たような気がする。ババは滅多に怒ることはないのに、記憶にあるのだろう。

学校で嫌なことは、母の目に「お母さんの絵」を描かせられることだ。いつも肝心の顔だけは空白のまま、ぼんやりしている。だって、母の顔を見ることがないのだから。

「陽介、おまえはばっちゃん顔、描いていいよ」

先生に言われて、ようやく顔が描けた。でも、入りたい目鼻じゃない。

出来上がったも、その後がもつと嫌だ。見た途端、みんなは元気になる。

「陽、おめーのババ、そんなに若くねーべや。シワもちゃんと描いたら」

「ババのアダマ、白髪だべ。それに口の周りの縦じわ入れたら、オメのババらしくなるで」

どつと、教室中に笑いが起きる。みんなに嬉しい日が、こうして最も嫌な時になる。

父もババも「母は死んだ」と言えば、余計なことを考えさ

せたり、悩ませることがないと思つたのだろうか。わたしが生きる代わりに、母が死んだなんて……。

これまで、母の写真も見したことない。好きだった物、身に着けていた物、どんな声を出すのかなども知らない。

テレビの刑事ものなら、母が死んだという「物的証拠」は、なにもない。ただ父とババの「母は死んだ」という証言だけ。なにも知らないまま生きるのは辛い。父もババも、そんなことを考えたことがあるのだろうか。

伯母（アキオの母親）が母のことを言ってるのも耳にしたこともない。母のことを訊いたとしても、父やババと同じことを言うだろう。

父もババも、本当に母のことを知らないとしたら……。

わたしは、貰い子なのかも知れない。例えば、赤ん坊の時、病院や養護施設とか。これなら、母親を知らないということがあるかも知れない。

また、母が父の妻として、この家で暮らしていたのなら、なにか手掛かりになるような物が有りそうなものだ。でも、母を感じさせる物はない。それとも、死んだ時母を思わせるものを全て、処分してしまったのだろうか。でも、これは考え過ぎだ。

母はこの家で暮らしていたのなら、余程知らせたくない、何かがあると考えてしまう。知らせたくないことが、なによりも知りたいことなのに……。

どうしても、隠しておきたいというのなら、母はなにか、とんでもない悪いこと、悪事・犯罪でも犯したのか。それとも、ほかに男をつくって家から出て行つたということだつてあるかも知れない。

ここまで考えて、わたしはテレビドラマの見過ぎのような気がしてきて考えるのを止めた。

ところが、これまでの想像を覆すような、「もしかしたら」が、起きた。

夏休み中のことだった。

部活の野球練習があつた。始まって間もなく、急な土砂降りで練習が中止になり、激しい雨の中自転車で帰つた。

そしたら、奥の部屋だけが明かりがついていて、ババが仏壇の前で、何かやっていた。

急いでシャワーを終えて、側に行つた。

「ばっちゃん、なにやってるの」

「あれっ、帰つてたのがい」

「お盆が来るから、少しきれいにしておこうと思つてな、仏壇の掃除してんだ」

畳の上に広げた新聞紙の上に、位牌が三つ並んでいる。ババはそのひとつを手にとって、丁寧に布で拭き始めた。

「それ、誰の？」

「これは、おめのジジ。時化のどぎ、海で亡くなったんだ」

「こっちは？」

指さした。

「それは、父さんの兄さん。おめの伯父さんだえ」

残りのひとつは、母のに決まってる。

「そっちは？」

「これは、おめの父さんの妹。まだ小さいとき、風邪ひいで肺炎で亡くなったんだ」

ババの意外な言葉で、

「えっ！」

と、声を立てていた。その声をきっかけにババは、なにかに気づいたように急に立ち上がって、台所の方に足早に行ってしまった。

悪いことでも訊いてしまったのだろうか。

ババはわたしの声で、慌てたような気がする。

なかなか戻って来ない。トイレにでも行ったのだろうか。

いつも、立ち上がるときは「ヨッコラシヨット」と、声掛けをしてゆっくり立ち上がるのに……。いつもの動きと、明らかに違っていた。小さい時、「おらの母さんは」と、訊いた時の動きに似てるような気がする……。

二階に上がって、ベッドに横になった。

練習の疲れを感じていたが、位牌のことが気になって、頭が冴えてきて眠れそうにない。

死んだと言われてきた、母の位牌がないということは、ど

ういうことだ……。

位牌と言うのは、家の人が死んだら、必ず作るものではないのか。それなのにない……。

と、言うことは、母はこの家の人ではなかった、と言うことになる。

それとも、死んで実家に戻されたのか。

そういうことはないだろう。わたしという子供までいるのに……。

位牌が無い。この家の人と言う「物的証拠」も、無いということになる。

それとも、もともと母はこの家の人ではない、ということなのか。わたしがいるのに、この家の人として認められなかった、と言うことなのか。

益々混乱してくる。

学校に行く途中、アキオに訊いた。

「位牌って、家の人が死んだら必ず作るものがな」

「それって、何よ？」

「仏壇の中に置いてある、小さい墓のようなやつ。おめ、知らねーの」

「おらに聞いたってダメダメ。第一、おらの家に仏壇でも、ねーもんな」

「ああ、悪い悪い」

話はこれでお終い。アキオに聞いたのは迂闊だった。

頭から位牌のことが離れない。担任の先生に聞こうと思つたけど、まだ大学を出て何年もたつてないので、聞いてもわからないだろうと止めた。

休み時間、廊下で屯してたら、前の担任だった山口先生が職員室から出てきた。もう定年近い先生だ。

「おれ、訊きたいこと思ひ出したから」

先生は教室に入りそうなので、走った。

「先生」、教えてもらいたいことがあるんですけど。今、いいですか」

先生は、ふり向いてにこつとした。

「位牌のことなんです」

「位牌……？」

怪訝そうな目で顔を見た。

「なんで、位牌なんか。仏壇に置かれているものだろう？」

戸惑っているようだ。

「はい、位牌つて、家の人が死んだら、必ず作るものですか」

「そうだな……。たいていは、作るものだと思うけど。詳しく知りたいなら、お寺さんに訊いてやるけど……」

「そこまでわかればいいんです」

「なにか、気になることもあるのかい」

「いいえ。有難うございました」

これで家の人が死んだら、作るものだということははつき

りした。

授業中も勉強は上の空。位牌、母、位牌、母。頭はそればかり。

「陽介、なにぼんやりしてる！」

先生に注意された。教室に笑いが起きた。

学校帰り、駐輪場に行ったらアキオが自転車を跨いで、待っていた。

「おめー、山口先生にも位牌のこと訊いたんだつて？」

「廊下にいたら、ちょうど山口先生来たから。年寄りだし、わがると思つて……」

「おめに、なんが有ったのがつて、わざわざおらのどこまで来たんだぜ。なに気にしてんのよ。本当のこと言つたらいいべや」

「確かなこと、わがねんだ。はつきりしたら教えるから。今はまだ……」

「一人で悩んでねで、言つたらいいべや」

「分がつたつて……」

ペダルを漕ぎながら、先生に訊かなければよかったと思つたけど、お陰で位牌のことがはつきりしたことも確かだ。

いずれ、位牌のことに拘っていることが、アキオの母さんにも伝わってしまうだろう。そしたら、父やババにも知れることになる。時間の問題だ。

母はこの家の人ではなかった。

それなのに、父もババも「母は死んだ」と言ってきた。これは矛盾してる。

益々、わからなくなってしまう。父もババも母親をわかっているとしても、教えたくないという事情があるとしたら「死んだ」ことにしておくのがいいと考えた。これなら、母の写真もないことだってある。それなら、父もババも、わたしとは血の繋がりはならないことになる。

どんどん暗い方に頭が向いて行く。普段の父もババも、優しい血の繋がりが無いとは、とても思えない。

ベッドに入ってからまた、考えた。父もババも、母のことをなにも話してくれない、その理由はなんだ。

位牌がないことから考えられることと言ったら、次の三つくらいだ。

「この家の人ではなかったので、死んで実家に帰された」。「罪を犯して、家から出された」。「ほかに男ができて、家から出て行った」。

「二つ目」は、父と母は正式に結婚していなかった。それなのに、子供ができてしまった。あり得ることだ。それで、死んで実家に帰された。これは、どうしても隠しておかなくてはならないことなのだろうか。

「二つ目」「三つ目」。こんなことなら、子供に知らせたくない、と考えることがあるかも知れない。犯罪にしても不倫にしても、ありそうなことだ。

また「おまえはテレビドラマの見過ぎだ」。そんな声が聞こえてきそうだ。

ここまできて、気づいたことがある。それは、この「三つ」の、どの考えをとっても「母は生きている」ということになる。

自分のことだから少しでも、都合のいいように考えているのかも知れない……。

母が父の本当の妻なら、母の位牌がないだけで、「生きている」と考えていい。

それなのに、わたしに知らせたくない。「おまえが生まれた時死んだ」と、言わなくてはならない、事情があるはずだ。

その「事情」とは、なんだ？

こう考えたら、「生きている」と思うようなことが、いくつもあったような気がしてきた。

小学校に入って、運動会や学芸会には伯母のところに、よく女の人が来ていた。

その人はいつも帽子を深々と被っていた。いま思うと、日焼け防止の為というよりも、顔を見られないようにする為ではなかったのか。なんだか、必要以上に深く被っていたよう

な気がしてきた。

その人は、何度も見ているのに、顔をはっきり見たことがない。ババが側にいない時は、伯母の隣りにいて、話をしてるような顔も見えた。

アキオは「あの人は、母さんの友達だ」と言っていた。来ていると、あの人に見られているような気がして、落ち着かなくなった。近くに、来ることがあっても、声をかけられるわけでもないのに、どうしてか気になるのだった。

高学年になったところから、その人を見ることは無くなったけど、どうしてか、その人を探している自分がいたことに気付いていた。

また、小学校三、四年生くらいまでは、時々下着や靴下、ジャージ等を伯母から貰っていた。

「伯母さんが、持って行けって」

父もババも、喜ぶと思っていたのに、どういうわけか、二人ともいつも迷惑そうな顔をした。

父もババも伯母が来ても、貰った物のお礼を言っているところを見たこともない。いま思うと、アキオの家も、衣類を買ってくれる程、余裕があるように思えなかったの、不思議だった。次第に、伯母から貰っても、複雑な気持ちになった。それから、見せずに、部屋の押し入れに押し込んでいた。

衣類を貰った時は、必ずアキオも同じものを手にしていたし、身に着けていたように思う。

伯母がある時言った。

「あんただちは、二人とも同じような体つきしてるから、楽だって……」

この言葉尻が、しばらく気になってたことがあった。いま思うと、何か意味がありそうに思えてくる。

衣類は伯母が用意していたのではなくて、伯母以外の人が呉れたのではないかと思うのは、考え過ぎだろうか。

どうしてか、伯母の言った「……楽だって」は、誰かの言葉を、伯母が代弁するようにとれないこともない。下着や靴、靴下まで心配してくれるとしたら、父やババを除けば、死んだという母しか考えられないような気がしてくる。

そう言えば、伯母が時々わたしやアキオの身長や肩幅、腕の長さ、股下などを測ってメモしていた。あのメモも、母に渡っていたのだろうか。衣類は、いつも体にぴったりだったのは、あのメモがあったからではないのか。

考えれば考えるほど、気になって眠れなくなった。

そのうちに、ふっと頭に浮かんだことがある。衣類の入っている紙袋の色や模様が、同じような気がしてきた。袋が残っていればいいが、使ったりゴミに出したりして、ほとんど無くなってしまっている。しかも、三、四年生の頃までだから、七、八年もたっている。

どこかに残っていないだろうか。机と壁のすき間に、押し込んだことを思い出して、ベッドから出て探した。見当たら

ない。

今度は机をずらしてみた。幸運にも袋が二枚、埃まみれになつて出て来た。湿気で色変わりはしているものの、確かにあの袋だつた。二枚とも同じもので、『函館大門』『衣類のともえ』と印刷されている。

この店には行ったことはない。でも、この店に何か手掛かりが有りそうな気がして来た。

母がこの店に何度も、買い物に行ったのだろうか。もしかしたら、そこで働いているかも知れない。

同じ袋を使い続けることで、母は「わたしはここにいる」と言う、メッセージを発信していたのかも知れない。

近いうちに、行つてみようと思う。

決行する日をいつにするか。父が家にいない時がいいとか。学校はどうするかなど、結局窓が白々するまで、少しも眠ることができなかった。

数日が過ぎた。

風が出て海も時化模様になった。チャンス到来。これなら、海が濁つてコンブ採りもしばらく休みになる。それにイカ漁にも出られない。父は、こんな日には、滞っている用事を一気に済ませる。漁のある日は、手伝いで何処にも行くことができないので、実行するには好都合だ。

車に乗せて貰つて、なんども函館に行つたことはあるけど、

自転車で行つたことはない。駅前まで約三十キロくらいの道のりだ。父が一日中家にいなければチャンスだ。気付かれないうちに、行つて戻つて来れるだろう。

その日が、意外にも早く来た。父は漁協の会議が、急に決まつて隣の集落に行くという。これも時化のお陰だ。会議はいつも朝から夕方ぐらいまでかかる。その後はいつも飲み会になる。そうなれば父の帰りは、暗くなつてからだ。願つてもないことだ。

この日を置いてない。学校は一日ぐらい仮病を使つて、休むことだつて出来る。

学校帰り、アキオと並んで自転車を走らせていた。駐輪場を出る時から、言おうか、どうしようかと思ひながら、切り出せないでいた。

役場前の赤信号待ちで、ようやく口を開いた。

「おら、明日、学校休むから」

「なんか、用事でもあるのが」

アキオは顔を見ている。

「まあな。どうしても行つてみたいけど、あるさ」

「休みなら、おれもいっしょに行きてーんだけど。先生になんて言えばいい」

「下痢して、腹が痛いと言っても言つてで。頼む」

片手を上げて、揉むような恰好をした。

「練習も、サボルことになるな」

「監督にうまぐ言つてで……」

「それはいいけど。ポジション狙つてるやづ、いるのわがつてるだろ。そうなくても知らねーがらな」

「なつたら、なつたで仕方ねーべ」

「行きたいどごつて、そんなに大事などい」が」

「おらにとつてはな……」

「おめ、この頃どうがしてるぞ。なに悩んでるんだ。位牌とかいうやづの続きが……」

ずぼしだった。なんにも言えなかったけど、焦っていた。

父やババに知れるのも、時間の問題だ。気になることは、一日でも早く実行しなくては……。

父やババには、朝練の特訓があるからと言って、いつもより一時間早く家を出た。方角は学校と反対だ。心が痛んだけど、この日よりないと、ペダルに力を入れた。

汐首岬を曲がると、霞んだ函館山が海の向こうに見えてきた。一度も自転車で行ったことがない、一時間で七、八キロ走るとして、片道四〜五時間ぐらいはかかるだろう。

汐留川の橋を渡るには、少し海岸から離れるので、函館山が視界から消えた。山を目印にして走っていたので、ちよつぱり不安になったが、今度目に入るときは、函館山はぐんと近くなっているはずだと思うと、ペダルに力が入った。

海側に見えるのは、下北半島の大間あたりだ。自動車に乗

せて貰つて、見慣れている景色だけど、これから母に会いに行くとすると、父やババへの裏切りになるような気がして心が痛い。

予想が当たつて、母だったら全くの初対面になる。どんなふうに接したらよいのかと思つたら、不安になつてきた。でも、ここまで来たら行くしかない。今日よりないんだ。こう思つて不安を振り切る。

函館山がぐんと近くに見え出した。戸惑いが起きて、道路脇に停まつて、前の籠から、ペットボトルをとつて一口、水を飲んで心を落ち着かせた。

目当ての店の前に立つた時は、自分にも聞こえるくらい動悸がしている。二、三度店の前を行ったり来たりしながら、中の様子を窺つた。店が開いているようなのに、人がいるようには見えない。四度目かに思い切つてドアを開けると、ドアの上の呼び鈴が、カランカラン音を立てた。

すると、奥の方のカウンターにいた婆さんが、顔を上げて老眼鏡の枠の上から、こつちを見ている。続いて左手の方から、やはり年寄りらしい男の「いらつしやい」という声がした。子どもと見たのか、寄つて来ない。これ幸いと店の中を見回してから、運動着らしいコーナーを見つけて、近づいて行った。

ジャージを見ていると、後ろで「いらつしやい」。おばさんらしい声がした。チラッと見て、ドキンとした。見たことが

ある人だと思った瞬間、

「陽介じゃないの。そうでしょ……」

驚きに似た声がして、言い終わらないうちに、足は入り口に向かつて動き出していた。走ってドアを押した。呼び鈴が、忙しく音を立てている。外にとび出すと、後ろから声が追ってきた。

「ヨースケ、ヨースケ、待って、待ちなさい！」

やみくもに走って、小路をたて続けにいくつも曲がった。通りの人が振り返っている。

気がついたら、声が聞こえなくなっていて、スピードを落とした。

歩きながら、ひと息入れた。やつぱり、伯母さんのところに来ていた、帽子を深くかぶった人は、あの人だった。一度も顔を見たことがなかったけど、やせ形で小柄な体つきは間違いないあの人だ。

呼び方は、間違いなく母親だ。生まれて初めて大声で呼ばれたのだ。死んだという母は、生きていた。生きていたんだ。

……気がつくと、いま、どこを歩いているのか、わからない。店の横に置いた自転車が気になった。

見上げると左手に、デパートの屋上が目に入ってきた。その後方に函館山の頂上が見える。ようやく足が駅の方に向かっていることが分かった。

行く当てもないことに気付いたけど、駅の方に向かった。

すぐ、電車通りに出た。電車が音を立てて通った。その後を、走って横切った。左手に駅前の広場が見える。

駅舎中に入って行つた。空いてる椅子にでも座って、気持ちを落ち着かせよう。

観光客のような人が数人、電光掲示板を見上げてなにか話している。椅子を見つけて腰を下ろした。まだ動悸がしている。

あれ程会いたいと思っていたのに、声をかけられて、逃げてしまった。

父もババも「母は死んだ」と言う母に、自分から会いに行つたことに、後ろめたい気持ちがあるのは確かだ。

それにしても、どうしてわたしだと、分かったのだろう。十七年間も、顔も見えないのに……。

そう言えば伯母が、よく写真を撮ってくれた。アキオと一緒にの時間が多かったけど、たまにはわたしのだけのこともあったような気もする。

あれは、母にやる写真だったのかも知れない。そうでなければ、初めて会ったというのに、直ぐに分かったし、名前も大声で呼ばれた。初めて聞く声だけど、一緒に暮していたら、小さいころからあの声で呼ばれていたのだろう。

帰ろうとしたら、あの店の小路に放置した自転車が気になつてきた。

店に入った時より人通りが多くなっていた。置いたところに自転車はあつてほつとした。

海岸通りに出ると、海風が強くなっていた。雲の動きも速い。雨でも振り出したらと、ペダルに力を入れた。

長い間の謎が解けて安心したのか、疲れが出てきた。

遠くに海に突き出た、汐首岬が見えて来た。あの岬を越えなくてはならないと思うと、疲れが増してきたし、股が擦れてヒリヒリし出した。行きは、気持ちが高ぶつていて、疲れを感じなかったけど、母の声を聞いて、今までの思いが、報いられたように感じた。

ようやく汐首岬を曲がると、喉も渇いて、どこかジュースの自動販売機がないかと思ひながら、ペダルを踏んでいた。

左手に小さな店が目に入った。前に自動販売機があつた。誰もいないので、自転車で跨つたままでお金を入れ、コーラのボタンを押すと、ゴトンという音がした。

ボトルを籠に入れて、しばらく走った。磯舟の揚げ場を見つて、自転車のまま下りて行つた。風があつたので磯舟の陰に腰を下ろした。ふたを開けて喉に流し込んだ。

ひと息つくと、眠気がしてきた。まだ、家まで約二分の一くらいの道のりだろう。こんなところで眠つてなんかいられない。まだ先は長い。

家が近くなつてくると、帰ったら父やババに感づかれはし

ないだろうか。どんな顔をしていたらいいのか、新たな心配が出て来た。今日のことは隠し続けるよりない。

父のコンブ揃えの手伝いをしていた。

無断で母に会いに行つたからか、まともに顔を合わせるこ
とができない。

「おめ、なにが、悩みごとでもあるのが……」

ドキンとした。

「どうして？」

「アキオの母さんがら、陽一、なんが悩み事でもあるようだと聞いたけど。おめ、学校の先生に位牌のごと聞いたとが……」

……

「ああ、あれ、特別意味ないんだ」

平静を装つて、心にもないことを言つて、胡麻化した。

「そうだなー、おめが中学生になつたところから、話そうかと迷つてただけど、ながなが話せないできた。母さんのごとは、死んだと教えてきたけど……。おめ、位牌がないごとき気がついたんだべ」

なんにも言うことがない。いつとき気まずい空気が流れた。ただ、乾いたコンブの擦れる音だけがしている。

父が膝の塩を、両手で払いながら立ち上がった。緊張したら、窓を開けただけだった。ほつとした。

「どんな人だったの、母さんて」

ようやく訊けた。小さい声だった。

父は手を止めて、顔を見ている。

「いま、なんて言った？」

「……母さんのこと……」

父は少しの間、考えているようだった。コンブを揃える手をゆっくり動かしながら、父の出方を待った。

顔を上げられない。

「ホントは死んでなんかいないんだ。ちゃんと生きてる」

父は、はっきりと言った。顔を上げて父を見た。今まで見たこともない、緊張した顔をしている。

「……ちゃんと生きてる」

また、同じことを繰り返した。

「……言えね、わけ、あったんだ。それを話したら、シヨックだと思っけど、それでもいいが？」

すぐに返事ができない。ホントは怖かった。父は立ち上がって、壁に掛けてあるシャツのポケットから、タバコとライターを取り出して座り直した。タバコを咥えて、火をつけた。

そして、二、三度吸った。いい話でないようだ。父は、煙たそうな目をして、思いを整理するような顔をした。

それから、ゆっくりと話し始めた。

「難産だった……。ながなが生まれねで……。近くには医者もいねし、このままなら、母さんも危ないと言われたんだ。今なら、救急車で直ぐにも函館の病院に連れて行くこともで

きたろうに。そうしてうちに電話が鳴り出した。こっちは生きるが死ぬがて言うどぎ……。少し間をおいで、鳴ったり、切れだりしてだ。ようやく産婆が取り上げたどぎは、おめも泣き声も出せねがったし、陽子の意識もなくなつてしまつて、二人とも死んだんじゃないがって……。産婆がいろいろやってくれで、おめがようやく細い声で泣いだ。だんだん泣き声大きくなつたけ、陽子の意識も戻つて、ほつとした。ところが、まだ電話、鳴り出した。おめも陽子も大丈夫と思つて、電話のどこさ行つて、受話器を取つたけ、電話は切れた。また来るだろうと、ちよつと待つたけど、それっきり鳴らながつた。戻ると、ババが産婆となにが話してで、それを聞いた。産婆の言うには、

『生まれるまで、あんまり時間がかかり過ぎて、助かつてその後遺症が残つて、普通の人にはなれないこともある』と、いうことだ。びっくりして、おらもババも姉も口を開けね。父の話がここで途切れた。

わたしは、ようやく口を開いた。

「……普通の人にはなれねって、どういう……」
これだけ言うのが、やつとだった。

「長い時間、かがつたということは、おめが息のどぎね時間が長くて、いつとき死んだ状態だった。それが原因で、障害が残るということ。例えば、脳に障害が残れば、頭もおがし

くなるべし、体も不自由などが出てくることもあるべし。普通に歩けねとが、しゃべることができねとが……」

話すのが辛そうだ。父の言っていることが、自分のことではないような気がした。

「産婆は、必ずなるとは限らね、とも言ってくれたものの、おらもババも姉も、それが一番の気がかりなことだ。昔からここに、『蓋をする』という言葉があった。それは、望まねワラシが生まれたら、『蓋をする』つまり、殺してしまう。という意味……。生がしておいたら、本人も家族も辛い思いをするべ……と。それなら、いつそのごと、生まれだ時と言わね……。ほんとうにあったがどうかは、おらはわからねけど、『はなし』としてあるだけだと思つてだ。今そのことに直面させられでると……。ババも姉も、『可愛そうだけど、その方がいい……』つて……」

間が開いた。

そうしてると、父は「けど、けど……」と、勢いをつけるようにしてから言い出した。

「おらは反対したんだ。……したことはしたけど……。正直に言えは、おらの心の隅にも、そういう気持ちがあったことは確かだ」

父はここまで言つて、また黙ってしまった。

想像もしていなかったことで、頭が混乱していた。

「せつぐ生まれできたのに、死なせるわけにいがね……」

父の頬を涙が伝っている。その頬をタバコの煙が撫でている。

「どうしても許せなかつた。ババと姉は、『陽子も賛成した』と言つた。それを聞いて、カーツと頭にきてしまった。そんなやぶど一緒に暮らせねーつて言つて、陽子もババも家から叩き出してやつた。若がつたからな……」

「陽子は床離れしてから、離婚届にハンコ押して……」

終わりの方は、消え入るような小さい声だった。息苦しくなつていた。その場から出ていきたいのに、体が動かない。

「家から出したつて。離婚したということ……?」

「陽子、離婚届ば、がんとして受け取らながつたんだ。それでも、無理やりバッグに押し込んだ……。だども、あれから十七年もたつてるといふのに、まだ籍は抜けてねんだ。届は出してないみたいだ……」

また、話が途切れた。

「父さんは、おらに障害が残るとは思わながつたの?」

「それが一番の心配だった……。障害が残るとが、残らねとがでねべ。おらは難しいごとはわがね。けど生まれだら育でる。これ、あたり目だべ。陽子も、家を無理やり出されても気がかりだつたと思うよ。おめがどんな子供に育つが……」
こう言つて父は、目をつぶつて、なにか思い出してるようだ。

「おめに、どんなおがしなどが出で来るが。出でこねように、毎日毎日祈るような気持ちで、育てて来た。これは、ババも姉もおんなじ気持ちだったと思うよ……。だがら、『蓋』のごと、許してやってけれ」

また、沈黙の時が流れた。

わたしは、父が反対してくれたお陰で、こうして生きている。

「おらも、『蓋』のごと聞いだどぎ、頭に血が上ってしまつて……。いま考えたら、陽子だつて自分が死ぬが生きるがつてどぎに、ちゃんと考えることがでざる状態にながつたと思う。そんなこと、すぐわがりそうなことだのにな。それと思うと、おらはとんでもねー乱暴なことしてしまつた。取返しのできねごととしてしまつたと、今でも悔やんでる」

重い空気が流れた。それでも、父の話から母の名前は「陽子」ということを、初めて聞いたし、母のことを教えてくれない理由もわかつた。

「母さん、いまどこにいるの？」

「前は大門の『ともえ』という、着る物とが売つてるところで働いてるごは、わがつてだけど、今はどこにいるがわがね」

わたしは、わかつていたけど、父の口から聞きたかつた。

「前は、アキオの家になん回も来ているみたいだし、おめが小さいどぎ着る物、貰つてだから。アキオの母さんに聞けば

居所、教えてくれるべよ。おらが『聞け』と言つてだつて言えばいい」

「母さんに、戻つてこいとは、言わながつたの」

「言えながつたんだ。おめが小学校に入るとき、ババにも姉にもさんざん言われださ。そのどぎケンカになつてしまつた。だども、おめには悪いと思つたけど、すんなり言えなくて……。おら、頑固者だがら。十七年も、そのまんまになつてしまつたんだ」

しばらくテレビの音のないような、時が流れた。わたしは腰を上げようか、どうしようか迷つていた。

「ババも、陽子もいなくなつてからが、大変だつた。ミルクつぐるのもオシメやるにも……。おらは、やつたことねべ。なんもできね。それよりも、漁に出るとき、赤ん坊のおめを、ババや姉にも頼めね『蓋をする』という人だちに、預けることできね。殺されるような気がしたからな。なにがなんでも、おらの手で育ててやるつて……。おらが頑固なために、おめにも苦労かげでしまつた。あのころは、保育所も乳飲み子は預がつてくれねし、漁に乗つてだ船も、赤ん坊連れなら船がら下りでくれと断られるし、稼がねば食つていげねし。困つてしまつて、陸に上がつて近所のチャッカー（小型船）借りで、おめを籠に入れて船にのせ、一人で漁に出んだ。ババにも姉にも、近所の人たちにも、狂つてしまつたつて言われで……。こんなこととして、二、三日たつた晩、本家のジ

ジとババが、血相変えて怒鳴り込んで来た。あのどぎは、なに「ど」起ぎだかと思つたな―」

ここで父が、ようやく顔が崩れた。

「玄関の戸ば開けで、いぎなり『おめーは、狂つてしまったのがー。嫁もババも出してやつたと言うんでねが。近所の笑ひ者になつてゐること、わがんねのが。おめは生まれだばがりの赤子連れで、漁に出でるそうでねが。そつたら馬鹿げなこと、するもんでねー。おめのオヤジに代わつて、おらが許さね！嫁のごとは、おめら夫婦のごただがら、おらは口出ししね。けど、ババのごとは黙つていらね。先行ぎ短け者は、家がら出してやるなんて、普通の人間のするこつてねー。こつぱじかしくねのが。今からオラが行つて、ババば連れで来るから、文句言うんでねど。わがつたが！』おめは、本家のジジの怒鳴り声で、びつくりこいで、火ついだみたぐ泣き出した。慌てだババは、おめば抱き上げて『可哀そうに、可哀そうに。坊ーのばつちゃん、すぐ来るからネー』つて、あやしてくれだんだ。おらも、本家のジジに怒られでは、どうしようもねもんな。直ぐにジジは、ババば連れで来た。そのどぎは、おらはババや陽子ば叩き出してやつた元氣ば、すつかりなぐしてしまつてで……。このどぎは正直、有難がつたんだ……」

混乱した頭がますますゆらいでいた。それなのに、涙が止めどなく湧いてきて、氣がついたら、膝の上の昆布を黒く濡

らしていた。

「それでもおめが、こうして、ちゃんと元氣に育っていることが、おらはなにより嬉しんだ。確かに、おめを死なせながつたのは、おらがも知らねけど、おめがら母親ば取り上げてしまつたのも、このおれだ。許してくれ……」

こう言つて、父は涙でぐしゃぐしゃになつた顔中を、拳で拭つた。

何も言うことがなかった。ことばの端々に父は、母ばかりか、ババや伯母も許していると感じたし、母もわたしを死なせていいと言つたとは、とても思えない。

わたしは知らないうちに腰を上げていた。そして、氣がついたら居間のソファ―に転がつていた。ショックだった。しばらく、ぼんやり天井を眺めていた。

父はイカつけやコンプ採りの時期以外は、出稼ぎで家にいなかったこともあつて、わたしは小学校二年まで、ババと同じ布団で寝ていた。

その後も、同じ部屋で寝ていたけど、寂しくなったり、学校で意地悪された時は、ババの布団にもぐり込んで眠つたこともある。

ババは優しかった。自分が食わなくても、ものをくれたし、なにも不自由はなかった。

そのババが、母のことを訊いただけで不機嫌になり、一時

でもいなくなる気持ちはわかるような気がする。

推測すると、「蓋」をしようとしたこと。そのことが原因で母を家から出してやることにつながったと、ババが考えているのではないだろうか。だから、わたしに対しても母に対しても負い目を感じているのだろう。

わたしは、父の話を聞いても、ババや母、伯母にも、憎しみの気持ちが少しも湧いてこない。むしろ、父との間にそんなことがあったというのに、ババにも伯母にも、優しく大事にしてもらったと思っている。

夕方、作業場に明かりがついているので、戸を開けると、父が天井の櫓や樫などを上げてあるところから、なにか引つ張り出していた。

見ると古い大きな竹籠だった。これはイカ漁が盛んだった頃に使ったものらしい。

「なにやってるの、手伝う」

「もう終わったから、いいんだ」

父は籠の塵を箒ではらっている。

「この籠、なんかに使うの」

「いや。これタガラモノ」

父はこう言って顔を崩した。

「これはな、赤子のおめば入れで、漁に出だどぎの籠だ。部屋さ持つて行つて、中のものば見てみる」

言い方が前と違つて、心なしか明るく感じられた。

部屋に行つて開けてみると、数冊のアルバムと、ひもで縛つた写真の束があった。アルバムを開いても、あちこちに空白があつて、母らしい女の人の写真は一枚もない。

それで、写真の束の紐を解いてみると、どの写真も女の人があつて、やっぱり、店で会つた人だ。中には、父と母が並んで車のそばに立っているのや、焼肉らしいものを頬張っているもの、いつしよに磯舟でコンブを採っている姿など、どれを見ても幸せそうに見えるものばかりだ。

写真の一枚には、父の下手くそな右肩上がりの字で「陽子といつしよに」なんて書いているものもある。

この写真は、母がいなくなつてから、アルバムから剥ぎ取つたのだろう。当時の父の覚悟が感じられる。こうして残してあつたということは、いつかは、わたしに見せようと考えていたのだろう。

世の中には、わたしが生まれた時のようなことは、少なからずあつただろう。過ぎてしまったことは、変えることはできないが、悩んだことは無駄にしない。そこからどれだけ意味を擲んで、生きていくかが、何よりも大事なことと思う。

これから、父と母、それにババや伯母が、わだかまりもなく、元通りになれたらいい。

写真を見ていると、そんな気がしてくる。

俺の謙信

日 高 光

一〇二五年

えーと、武田信玄が病気で死んでな、その後な、子供の勝頼つてのが出てくんの、騎馬部隊で。それを織田信長が、やつつけるんだ、この戦い知ってるか？

「長篠の合戦！」

「おっ、佐藤、よく知ってるな。その通り」

須藤健吉は二九歳の若手日本史教師だ。今日もノーテンキな生徒相手に歴史を語る。残念ながら二単位もので時間が足りず詳しい描写ができないのが悔しい。でも、ここは大好きな戦国時代だ。何故だろう、昔から大好きで、英雄たちが繰り広げる人間ドラマがたまらなく魅力的だった。信長、秀吉、家康、勝家、光秀、信玄、道三、義元、謙信、政宗、早雲、義景、元就、元親。出てくる出てくる、英雄たちがいつも健吉の頭の中で暴れていて、もうすぐにはみ出しそうだった。特に彼のお気に入りには正義感のかたまり上杉謙信だ。四九才で非業の死を遂げた謙信は、人気者だが彼にとって小さい頃から『神』だったのだ。

長篠という漢字がちよっと面倒くさい。篠という字から、

「篠突く雨」というフレーズを思い出した。細い竹を篠といい、それが突くような激しい雨脚を言うが、長篠という地名はきつとその篠が長くおがっていたのではないだろうか。

そういう想像をしながら、藤吉郎（秀吉）たちが長い馬防柵を設える絵が浮かんできた。武田の騎馬部隊が近づいてくる。その頃は現在の競馬馬と違って不格好な背の低い馬のはずだが、彼の頭の中では黒光りしたサラブレッドの軍団が数百頭、草原の草を舞わせている。兜も鎧も真っ赤に統一された赤軍団が地響きを立てて迫ってくる。

ダン、ダン。ダ、ダン。

頭の右から左へ火縄銃の音が鳴り響き、屈強な武田の豪傑どもが織田の足軽の鉄砲に斃れていく。太いうめき声。草原に巨体が落ちていく音。男たちを乗せた名馬たちのいななき。大混乱が起った。これは一種の革命なのだ。十人力の侍大将がひ弱な足軽の餌食となっていく。中世をぶち壊す革命児の誕生だ。

い、いかん。時間がないのにどうしてこういう余計な描写を喋ってしまうのだろう。だから授業がなかなか進まないん

だ。まったくう。

でも生徒の食いつきは良い。真剣に聞いてくれている。これが莊園の説明なんぞしようものなら、三十秒で撃沈だ。最高の睡眠薬になってしまふのだ。やはり戦国時代は生徒も興味があるらしい。とにかくでも、先に行こう。

安土城を建設。樂市樂座。

リズムカルなチョークの音が鳴る。慌てて生徒もノートをとり出す。

地下一階、地上六階の天守閣をもったすごい城が造られてな、その城下町で商売を自由にしたらな、全国からわんさかあきんどが集まって来てな、賑わったんだと。それが樂市樂座だ。

手取川の合戦。上杉謙信、上洛開始

あんなあ、そしていよいよ上杉謙信が出てくんだけど、まず手取川つてとこで、織田方の柴田勝家らを破ったんだ。手取川でたくさん溺死したそうで、あまりに完璧な勝利だった。そして謙信は自分の居城がある越後春日山城、今の上越市なんだけどそこに戻って、大動員令を発したのさ。関東と北陸に渡る十万と言われる諸将に対して、関東管領様が上洛して足利將軍家を補佐して天下を平定するからついてこい、というものだった。信長はビビったらしいよ。

そしてな、便所に入ったんだ。

生徒はみな一様にきよとした表情をつくる。なんとも

壺にはまった感ありだ。な、なんと便所で踏ん張ってな、血管ぶつつんと切れて倒れたんだ。脳溢血だ。そして一週間後、あの世行きき。四九才だぞ。若い死だなあ。洋式だったらな、おそらく踏ん張らなくて済んだからな、残念だな、和式に殺されたんだなあ。

爆笑だ。

まあ、酒の飲みすぎなんだな。大酒呑みでなあ、戦に行く馬上でも飲んでたっていうからなあ。とにかく、信長はラッキーだったんだな。信玄、謙信。最強と謳われた二人が相次いで病死したんだものなあ。

健吉は、謙信病死と書いて、はい、次は石山本願寺と書くうとして間違って前の字を消してしまった。消えてしまったのは『謙信病死』だった。

「殿。いよいよござる。胸が躍りもうす。ようやく殿の時代でござる」

直江景綱は、胡坐をかけた右膝を何回もはたいて喜びをあらわしていた。

「そうじゃ。いよいよ我ら越後衆が天下を動かす時が来たのじゃ。しかしあの信玄入道が身罷ったとはいう。わしは入道には絶対に勝てないと思うとった。あの懐の深さは尋常ではない」

上杉謙信が、盃を傾けながら、しみじみと述懐していた。

「いやいや、殿も負けておりませぬ。信玄とは五回戦つて全部引き分けじや。四回目は実に惜しかった」

側女がつぐ盃を乾しながら、景綱が嘆息すると蠟燭の炎が大きく揺れて、影が動いた。

「勝家はやはり強いのお。負けても堂々としておった。次はやられるやもしれん。」

上杉に逢うては織田も手取川はねる謙信 逃げる信長とは、上手い歌をつくつたものよ」

「織田は数が多いが、ばらばらでござる。羽柴などは勝家と喧嘩して帰つてござる」

「羽柴な。あ奴は良い武将じや。ただ信長の気性に耐えられるかどうか」

「信長は、危険でござる。延暦寺や長島の一向衆の殺し方は常軌を逸してござる。あ奴が天下を取つたら、国はすぐ乱れましようぞ。隋の煬帝を思わせまする」

「さて、どうやって戦うか」

「殿に、意見がござる。ひとつ聞いていただきとうござる」

「なんじや。言うてみい」

訝しげに謙信は眉をひそめた。

「拙者が齡七〇を超えても殿のお側に仕えることができるは、ひとえに体が丈夫だったからでござる。深酒を禁じ、武道の修行を続け、家来と共に歩くことで若い者にも負けない体を

つくつてござる。殿のお体は自分ひとりのものではありませんまい。北陸、関東合わせれば十万の諸將の頭になるお体。よつて殿のお好きな酒を断つていただきたいのじや」

謙信の表情が凍りついた。無類の酒好きだった。それを断てと。

景綱が平伏していた。失礼なことを進言したという意味である。この老人は額をしつかりと板の床に摺り付け、頭を上げようとしないう。

「景綱、頭を上げよ。頼む、上げてくれ」

「拙者、御父上為景公より仕えし者なれど、殿の暴飲は目に余り、誰も諫言できないと思ひ、命を賭して意見申し上げまする」

「なにを大仰な。景綱、爺、爺、やめてくれ、そのようなふるまいは」

景綱はあくまで頭を上げようとしないう。あくまで断酒宣言を聞くまで額を擦りつけるつもりだった。

沈黙がこの春日山城本丸の奥の間を蔽つていた。主従二人と側女二人の間に、重たい空氣がどつぷりと漂つて動かない。「わかった。わかったから面を上げい。そちの思ひは充分わかった。これからは体を大事にする」

ゆつくりと顔を上げる景綱の眼からは涙が滂沱として流れて頬を洗つていた。

謙信は、おちよこに残つていたどぶろくをぐいつと臓腑に

流し込むと、

「これでやめた。爺の涙は見たくない。なあ」

景綱は泣き噓い、側女の二人ももらい泣きしていた。

翌日、謙信は上洛と天下統一を祈願して酒を断つと家来全員に伝えると、将兵の士気は高揚し、最高潮に達した。

―打倒！ 織田信長！ 天下統一！ えいえいおー！

春日山城から関東、北陸の諸将八〇将に対して動員令が出され、そこには参加した者には、それぞれ大いなる褒美が下されると記されてあった。関東には、謙信の名代として景勝が派遣され、真冬の三国峠を越え、十日ほどで厩橋（前橋）に到着した。厩橋城には謙信の家臣、鎌倉幕府の重鎮大江広元の血をもつ北条（きたじょう）高広が出迎える。

「若。ようこそ、厩橋に。もうすでにたくさん集まってござる。上野、下野はほとんど集まりもつした」

厩橋がたくさんの人馬で埋め尽くされ、万余の旗指物で彩られていることは、言われなくても通ってきたことでわかつていた。

「高広殿、よろしくお願いもうす。拙者、関東のことは何一つわからず、このたびの派遣にとまどつておる次第でござる」

子の無い謙信は姉の子、つまり甥を養子にして後継ぎとしていた。その景勝は父謙信を心の底から尊敬し、謙信の素振りをまねることで少しでも近づこうとしてきた。父謙信は冷静沈着、戦場では決して動揺を見せない。まるで毘沙門天の

生まれ変わりのように鬼神のごとく全軍を指揮し、掌握する不敗の大將だ。生涯七〇戦負けなし。これほどの大將がこの戦国時代に存在したであろうか。負けない大將などありうるのか。

いつも景勝は父を見つめていた。

春日山城には北陸方面の諸将が雲霞のごとく参集してきた。関東管領上杉謙信の威光はすでに織田信長を越え、侍たちの顔には天下平定後に任じられる大名としての顔しか見られない。旗指物が紅葉で燃えさかる秋の山のように、紅、藍、山吹、黒、海老茶とさんざめいている。ここそこで、男たちの雄叫びが空気を揺らし、馬の猛々しいいななきもそれに色を添えている。

謙信は、本丸の格子窓から下を俯瞰しながら、恐い、と思つた。風が、吹いていた。その風は、ここに集まつた数万人たちの背負つた人生が動かししている重厚な空気だつた。

法螺貝が出発を促す。数町先まで届くその重々しい音色に侍たちは緊揮一番、命より名こそ残せと気を引き締めるのだ。

先鋒は柿崎景家。千丁の鉄砲隊を持ち、上杉の先陣を承つてすでに長い。川中島では妻女山を一気に走り降り、信玄の本陣を攻めたてている。それに続くは色部勝長。謙信が最も頼りにした武將であり、勇猛果敢に敵をつく。三將は長尾政景。謙信次将と言われるほどの重鎮で、謙信の従兄である。貫禄ある風体で、馬上で肩を揺らしながら遠くの未来を見つ

めている。四将は本庄実乃。謙信の側近で、景虎時代から謙信に尽くしてきた。五将は斎藤朝信、越後の鍾馗様と恐れられた猛将だ。

次々と行列が続いていく。

その長さは数十町。黙々と踏み締める足音と、静かな馬のいななきが、端に雪のまだ残る田舎道を飾っている。北陸勢が天下を取るぞお。上杉幕府の誕生だ。武者たちを見送る人びとの顔にも希望が満ち溢れ、いまにも踊り出しそうだ。

謙信も馬に揺られていくが、その右手にいつもの瓢箪はない。断酒宣言はしっかりと守っているのだ。謙信の視線の先には、途切れない武者列があつて、それは山のはるか向こうまで続いていた。昨夜毘沙門堂にこもって作戦は充分に練つた。こう来たら、こう行く。来なかったら、こちらからこの順に攻めたてる。彼の頭はまるで将棋盤のようにたくさんの絵を描いては消していく。

(いくさは楽しい)

負けない男謙信にとつて戦はもはや喜びであり、その近い将来の勝敗が手に取るように見える境地に達していたのだつた。

そんな男と戦う信長は生きた心地がしなかった。神懸かつた総大将とそれを心酔する将兵六万余、関東の景勝に従う兵五万余、計十万を超すとてつもない兵が信長と家康を挟撃しようとしていた。

歴史は大きく変わっていった。謙信の断酒宣言が信長という稀代の英雄の死を早めることになったのだ。

いくさ場は琵琶湖のほとりの賤ヶ岳。信長が集めた五万の軍勢の心には、『恐怖』という二文字が書かれていたようだ。その字は血で書かれていて、男たちの決心を鈍らせた。

謙信は、強い。

手取川の大敗は織田軍の勇気を怯懦に変えていた。その戦場心理を見透かすように謙信は攻めに攻めたてた。車懸りの戦法だ。先鋒が体力を考えないでひたすら押して押しまくる。当然へばってしまうが、すると後ろに控えていた次将と交代する。次将がへばると三将が交代する。こんな戦法で織田軍は先鋒の柴田勝家が総崩れにされ、その動揺が全軍に波のように伝わっていった。

信長は、落ちることを決断した。

が、それはできなかった。謙信腹心の騎馬部隊による別動隊が山中を駆け巡り、逃げた信長をとらえ、首を奪った。本能寺の変の四年前になる。織田軍は壊滅した。生き残つたのは、逃げ足が速かつた羽柴秀吉くらいしかいなかったのだ。

大勝利の勝鬨を上げた謙信軍は、その勢いで安土城に迫り、説得の上、開城させた。無用な殺傷はしなくなつたからだ。

豪壮な天守閣の最上階で、謙信は勝利の宴を開いた。上座の謙信の横には、信長の生首が置かれ、なぜここで屍を晒しているのか未だ理解できないような表情で一同を眺めまわし

ていた。

(俺はあんたに殺される予定じゃないんだが)

そう言っている目つきだ。

「殿、おめでとうござる。いよいよ上洛、新しき国をつくりましようぞ」

景綱は、家臣の最上席から頭を床に擦りつけると、二十を超える重臣、客将たちがそれに倣った。

「わしは信長を討つて、初めて天下統一を意識している。それほど此奴は大きな壁じゃった。みな気がついていたか。信長は天才じゃ。こんな男はいない」

「その天才に勝った殿はなんと呼んだらよろしいのじゃ」

柿崎がちゃちゃを入れる。色部も楽しそうだ。

「景勝殿の方も順調そうござる。駿河で徳川を破ったとの知らせが今届いたでござる」

めでたい、めでたい。その勢いで合流すれば、天下無敵じゃ。

勝ち馬にはたくさん乗っかってくるものだ。景勝軍がその数を増やして安土に到着したのはその一週間後のことであつた。

「あ、いけねえ。書き忘れた」

健吉は、慌てて消した部分を書き直した。

『謙信病死』

その文字が白いチョークではつきりと書かれた時、何かが動いた感じがした。いや、健吉の脳が動いただけなのかもしれないなかった。

「景勝。ようやくた。北条はどうなった？」

「氏政は降参しました。家康は追い詰めましたが、取り逃がしました」

「そうか。まあ、もう織田家も全滅じゃ。徳川もちりちりばらばらじゃろう」

「祝杯を上げとうございます。父上」

「わしが断酒したのを知らぬのか。まあ、今日ぐらいいは一杯付き合おうぞ」

三日月のきれいな晩だった。親子の久しぶりの対面に用意された酒肴を二人は大事そうに口に運んでいた。久しぶりの酒は、謙信の舌をとろかせ、臓腑に強い刺激を与えていた。うつつうつつ。

突然、謙信は持っていた盃を落とし、前につんのめってそのまま動かなくなつた。歴史は慌てて大きく揺り戻そうとして人々を動かしたに違いない。生き残っていた秀吉は織田家を結集して上杉勢に挑み、総大将亡き上杉を見事破った。家康も態勢を立て直し、小牧長久手で秀吉軍と対決し歴史のずれを修正した。

「面白いな。今な、先生が間違つて黒板消したらな、歴史がちよつと變つたんだ。本当だよ」

「またあ、先生、冗談ばかり言つて」

「いや、本当だって。俺には分かる。信長が謙信に殺されたんだ。謙信があの時脳溢血で死ななくて、そうしたら信長と戦つてやつつけたんだ。だけど、先生が謙信病死つて書いたら、死んじゃったんだ」

生徒たちはまた、冗談言つて、という顔をしてにやにやしている。

その時だった。

教室のドアが乱暴に開けられて、黒い背広をまとい、カラスのように漆黒のサングラスをかけた屈強な男たちが四人、ずかずかと入り込んできた。

あつけにとられる須藤健吉と生徒たち。

『須藤健吉、脱走容疑で逮捕する』

男たちが健吉の青いワイシャツの腕をがっちり掴むと、抵抗しようとする健吉を四方から抑え込み、教室から引きずり出した。悲鳴を上げる女生徒。その騒動に、他の教室からも教員たちが首を出す、止める勇気がある人間はいなかった。

廊下に、健吉の喚き声が響く。

「俺は知らない。脱走つてなんだ、なんで逮捕なんだ」

――二〇四〇年

電子黒板に電子チョークが流れるように字を描いていた。

『二〇二五年 集団的自衛権の行使決定から自衛隊員は大幅に減少。時の政府はついに二〇代の男子に徴兵制度を復活するかどうかを審議』

わかったかい？ 十五年も前の話だけだな。

日本史教師勝谷啓太は、現代史を語っていた。一九九〇年のバブル、そして崩壊。暗黒の二〇年。小泉政権の人氣。民主党政権の到来、東日本大震災。自民党政府の復活。集団的自衛権の是認。口角泡を飛ばして、勝谷は喋りまくり、自分の肘が電子黒板に強く擦れているのに気がつかなかった。

そしてその黒板にはこういう文が残っていた。

『二〇二五年 集団的自衛権の行使決定から自衛隊員は大幅に減少。時の政府はついに二〇代の男子に徴兵制度を復活する』

了

秘湯夫婦旅

佐藤 憲明

テレビを観ながらの夕食とき、

「温泉旅行でもしたいわね」

と女房の芙佐子と言った。

「昨年、金婚式を迎えたが、子どもや孫を呼んでの食事会や思い出旅行などと、これといったことはしなかった。

義雄夫婦が結婚した当時の適齢期は、男性が二十一、三歳から二十五歳、女性は二十歳から二十三歳くらいだった。

男が二十五歳を超えて二十六、七歳を過ぎると「あいつは」となんの根拠もなしにあらぬ噂が立った。さらに三十歳を超えると、機械がダメなのだろうとの烙印が押された。

義雄は二十七歳だった歳に、父の知り合いのお世話で見合をした。変な噂の立ちそうなすれすれの歳だった。それ以来、見合い相手が五十五年後のいまもまだ我が家にいる。

就職して以来、給料袋に手を付けずにそっくり母親に渡した。それは兄を見習っただけだ。その最初の給料日、母親は給料袋を仏壇に供えた。そして父が帰り、みんなで丸いちゃぶ台を囲む。母親が仏壇から下げてきた給料袋を父に見せた。

父は「ウン」とだけうなずいて食事がはじまる。

母親は、手取り五千八百円の給料の中から、五百円の小遣いをくれた。その頃の義雄は酒も煙草もやらなかった。使うのは四十円の床屋賃だけだった。それからというもの、一銭残らず貯めていた。

新婚旅行に行くとき、母親が作ってくれた腹帯に全額を入れて出かけた。

その当時の概ねの先輩や同僚は、一泊の新婚旅行だった。

北海道人にとって、連絡船で本州に渡ることが唯一の憧れだ。

その昔、北海道には松前藩があったが、米を作れない不毛の地でしかなかった。明治二年に札幌の地に開拓使を置いて、北海道の開拓がはじまった。それゆえ、北海道は外地、本州は内地という位置づけだった。

そんなわけで、義雄の会社の多くは新婚旅行は憧れの本州に渡り、浅虫温泉か古牧温泉と決まっていた。結婚式と披露宴を昼から開き、夕方早くの青函連絡船に乗った。

やがて出帆をしらせる銅鑼が甲板を走り、見送りのみんなが五色のテープを投げてくれ、蜩の光の曲が鳴り、連絡船がゆつくりと岸壁を離れる。

もの悲しさで、旅先の楽しみが複雑に混在する見送り風景だった。

「頑張つてこーい」

と見送つたものだ。義雄が結婚前、なんで「頑張つてこーい」なのか不思議でならなかった。

義雄は連絡船でしよっぱい川を渡り、青森から夜行列車「寝台特急ゆうづる」で七泊八日の新婚旅行に出た。

義雄夫婦も同じように、職場の仲間やら親戚に連絡船で見送りをしてもらえた。

翌朝、上野駅十八番線ホームに着き、地下の食堂でアジの干物と麩だけの味噌汁、半切れのタクワンで朝食を食べた。

そして開業して二年目の新幹線に乗って京都へ向かった。

京都で遊んで奈良で思い出の一夜を迎えた。それから和歌山、湊八丁、お伊勢さん、二見浦、名古屋、熱海と当時としては贅沢な新婚旅行を楽しんだ。

義雄の人生で後にも先にも、最も贅沢な旅だった。上野駅で帰りの寝台車に乗って、素焼き土瓶の茶を飲みながら、

「退職したならまた記念旅行をしよう」

との約束をした思い出があった。

義雄にとつての五十数年の人生は、決して穏やかとはいえ

なかった。親、兄弟の病氣、そして死別。おまけに会社の倒産、義雄の何度かの病氣、癌まで患った。気持の重い日々の連続だった。そんな生活の中で、芙佐子のいつも底抜けに明るい性格に助けられ、子どもたちも真つ直ぐに育ちそれぞれに独立した。六十五歳を最後に年金生活にはいった。

芙佐子が「旅行でも……」

と言つたとき、義雄は不意に新婚旅行帰りの約束を思いだしたのだ。

だが、「五十数年前の約束があつたわよね」と芙佐子は言わなかった。

食後の茶を飲みながら、新婚旅行を思い出してみた。安い給料で庶民の唯一の娯楽だった映画も見ず、タバコもやらずに一心に金を貯め、全額を懐に入れて出掛けた新婚旅行だった。いまは、安い厚生年金生活で蓄えなんてあろうはずがない。父に習い、結婚以来、給料袋に手を付けずに芙佐子に渡してきた。それからというもの、貯金の額を一度も聞いたことがない。

「貯金、どのくらいある？」

義雄は他意もなく訊いた。

「え！貯金？」

七十歳を超した芙佐子は、よっこいしょと大儀そうに重い腰を上げて「今更なんなのさ」といわんばかりに、茶箆筒か

ら通帳を取り出してきて、義雄の目の前に差し出した。

小学生のころ「子ども銀行」というのがあった。戦後間もなくのことだ。生徒が五円、十円と学校に持ち寄り郵便貯金をした。

生徒が局員となり貯金を集めた。貯蓄意欲を育てる国民教育の一環だったのだろう。そのころの貯金通帳は今も脳裏に焼き付いている。それは縦書き通帳であつた。

当然、貧しいものは貯金ができない。小遣いなんてもの、貧しい我が家では童話の世界だけのことだった。子どもながらも差別を感じた苦い思い出がある。

ある日、母親が五円玉を持たせてくれた。その日の登校は足が軽かった。自分の名前が書いてある真新しい通帳をもらった。走って帰り勇んで母親に見せた。

「やっと仲間に入れたのね」

陽気な母はカラカラと笑った。そして、額面五円の通帳が義雄の唯一の宝ものになった記念すべき日になった。

以来、二度とその預金通帳を手にした記憶はない。思い起こせば、あれは詐欺だったのだろうか。

義雄はあれ以来、通帳というものを見たことがない。芙佐子から受け取った通帳を開いてびっくりした。なんと通帳が横書きだった。「子ども銀行」のときは縦書きだったなと思

だしながら、中身を見て二度びっくりした。年金の振り込み日に万単位の金がそっくり引き出されている。残金、六千三百五十三円だった。溜息はついたが、もう声も出ない。温泉の「お」の字が、霞のごとくにフワーツと夢の彼方に舞い上がっていった。

「なにを知りたいのよ。どうしたのよ？」

芙佐子は、気の抜けた義雄に気が付いたと見えて訊き返した。

「いや、もういいよ」

義雄は、続きを言う気力が失せていた。

「変ねー」

と言いながら芙佐子が台所に立った。

後片付けを終えた芙佐子が茶を淹れ直し、

「なにを考えてんのよ」

とまたも訊き返した。

両親を送り、子どもたちも独立した。以来、二人つきりになって夕ご飯を黙って食べながら、耳はテレビ、口でパクパクと食べるだけだ。日に三度、同じような繰り返しで特別な会話のタネもありっこない。預金通帳を見てから、義雄はとつくに気持ちが萎えている。

芙佐子が話の後追いをした。

「どうかしたの？」

義雄は返事も大儀になつていた。

それでも、

「温泉旅行でもしたいねって言つたらう」
とようやく口を開いた。

「あー、さっきのテレビの話ね」

芙佐子はどうも忘れていた。昔は女が夢の中で暮らし、男が現実の中で仕事に、生活に闘つてきた。現在、立場が逆転して芙佐子が現実と向き合つて生きている。

「それで……」

執拗に芙佐子が続ける。

「もっいいんだ」

義雄は、うさくさい返事になった。

「そんな言い方はないでしょ。なにを思い付いたのよ。まさかボケてきたの？やーねー」

今度は、芙佐子が呆れている。

「温泉でも行きたいなーと思つてさ」
とようやく言つた。

「あら、いいじゃない」

芙佐子が息を吹き返した。

「もっいいよ。通帳見たからね……」

義雄はそれがやつとだった。

「話だけなら、お金なんていらなないでしょ」

上手いことを言うと思つた。これを義雄が言つたなら、

「馬鹿かい。やっぱりボケたのね」

と言われるに決まっている。

「秘湯にでも行つてみたいね」
とりあえず言つてみた。

「それ、それよ。その調子よ」

芙佐子が、調子を合わせてくれた。

義雄は、パソコンでいろいろ探してみた。

北海道からしょっぱい川を渡り、津軽に絞つてみた。浅虫温泉や古牧温泉は廃れている。

「ランプの宿つてどうだい、ここは一泊だね。でないと、ランプの夜の気分が分らないからね」

パソコンの内容を読んだので、ランプに興味が出た。

「青荷温泉よ。テレビで見たことあるわよ」

どうやら、芙佐子のほうが詳しいようだ。

「ランプの生活したことあつたのかい」

「いいや……、でもテレビで何となくあるわよ。それであんたは？」

「空襲警報のときさ。それと、婆さんの里がランプ生活だったんだ」

義雄の母親は、大正のはじめ、四国の愛媛から北海道の西興部村に入植した。以来、夢が実らずみんな離村したが、ついに電氣が入らないほどの山奥の暮らしだった。

国策で募集した開拓移住だった。母親の産まれた愛媛の本

家は稲作農家だった。代々続くうちに子孫が増える度に土地を分筆しては分家してきた。だが、一家が食べていく最低の広さしか残らなくなると、次男以下は婿養子に出されるか、他の仕事を身につけるため奉公に出された。年頃になった母親は、宮大工の時光と結婚した。

そんなとき、北海道の開拓団の話聞き、一族の六家族で北の地に夢をかけた。紹介された常呂（現・北見市）に着いてみると、先に移住していた人たちがいて、新しい土地はすでになかった。何度か札幌の開拓使に掛け合い、ようやくオホーツク海の興部村の奥の西興部村に許可が出た。五年で開墾した土地を無償で引き渡すというものだ。移住した翌年春四月、父親がスペイン風邪で死んだ。

残されたのは身重の母親、それに小学四年生になったばかりの義雄の母親と、妹と弟。

一緒に渡った親族に支えられながらも、土に這いつくばって生き延びた。その地は興部川の支流の山間部で、耕作地を多くは持てない地であり、十五軒と一緒に入植したが、一軒二軒と離れていき、遂に全員が離農した。当然、電気の恩典も届かないうちだったので、ランプでの生活だった。

「乳頭温泉てのもあるな」

義雄は、乳頭という名称にすこしばかり、興味がわいた。

「初めて聞くわね」

「おっぱい山の麓の温泉らしいよ」

そう言つて、心の内のいやらしさが見透かされないように素知らぬふりをした。

「いい歳してからに、混浴でよその人のおっぱいでも見たいの？」

やっぱり心の内をずばりと言われた。

「うるさいこと言うなよ。ここに書いてあるだけだよ」

まさか、スルメのしなびたような英佐子のおっぱいよりは言えなかった。

「行こうよ。話だけならもったいないわよ」

どうやら、英佐子がその気になったようだ。

「お金をどうするんだい」

義雄はさっきの預金通帳を思いだした。

「ほら、娘が作ってくれたクレジットカードがあるわよ……」
確か十年以上前になるが、英佐子は使っていたかも知れないが、義雄自身どんなものなのか、いまだに手にしたこともなく知識も全くない。

「カードを出すとね、何にでも使えるのよ」

「それだつて、いつかは払うんだろ」

それくらいは知っていた。

「考えるからなんにもできないのよ。使つてしまえば、こっちのものよ」

英佐子の脳天気押し切られて、ついに車で出掛けること

になった。

一番目の目的地は楽しみにしたランプの宿に相談がまとまった。

気分の変わらないうちに発とうということで、翌々日早朝六時に家を出た。フェリーは七時の乗船だった。朝の一番便だったからトラックが多く、一般客は少なかった。早速、夕べのうちに作っておいたお握りを食べる。腹がくちくになると早起きをしたので眠気が出た。そのまま寝そべり、しばし微睡んだ。

青森港到着を報せるアナウンスが流れて目を覚ます。準備をして車に戻る。間もなく着船だと思うと気持ちが引き締まる。係の甲板員が車止めを外して回る。それに合わせるようにエンジン掛けた。どうしたことかピクリともしない。再度キーを始動位置に回すもなんの手応えもない。

一瞬、義雄の血の気が引いてしまった。船が岸壁に着いたのか、かすかに動揺して汽笛が「ボーン」と鳴った。着船だ。可動橋が動き出しはじめた。暗かった車両甲板に陽が差し込んできた。

義雄はクラクションを触ってみた。「ボワッ」と蚊の鳴くようなかすかな音しか鳴らない。

義雄の車は右側の先頭から三番目だ。これでは後ろの車に迷惑が掛かる。

ちようどそのとき、甲板員が側を通ったので声を掛けた。

「すみません、バッテリーがあがっているようですが……」
甲板員の人はすぐに理解してくれた。

「隣から車を出しますから、少し待っていて下さい。応援の車を持ってきます」

と言って車の誘導をはじめた。義雄はトランクの荷物を出して、底に仕舞ってある接続コードを取り出して待った。

半分ほど車が出たころ、義雄の前の車も出て行った。そのとき、入れ代わりに車が義雄の前に来た。義雄はすでにボンネットを開けて待っていた。

車を持ってきてくれた人はすぐさまコードを接続してくれ、エンジンを少しふかし、

「掛けてみて下さい」

と合図した。義雄は無事掛かりますようにと祈りながらキーを回した。エンジンは勢いよく見事に掛かった。やはりバッテリーだけの原因だけだったようだ。

係の人は手早くコードを外して、車を移動してくれた。義雄もコードと荷物を片付けて合図を待っていた。人覚えの悪い義雄は、最初に声を掛けた人、車を持って助けに来てくれた人の記憶が残っていない。車を出しなさいの合図を受け、目に入るみなさんに誰かまわず頭を下げながら車を出した。

船から車が出ると、横の美佐子がほっとして言った。

「これで二度目よね。それもこんなときにさ。いつも準備は大丈夫かと、あんたはハッパをかけたくせに」

憎たらしい言いぐさだ。家族で出かけるときに限ってなにかを忘れる。その度に、義雄は『忘れ物はないか、戸締まりは』とやたらとうるさかった。楽しいはずの出鼻を挫いてしまったのは、確かに義雄の前点検が悪かったためだ。ここはグツとこらえて甘んじて芙佐子の言いぐさを受け止めた。

ナビは青荷温泉に設定してある。港を出て最初の交差点が赤だった。何となく交差点の周囲を眺めた。右手先の角が車屋だった。義雄は考えることなく、車屋に飛び込み勢い込んでさっきのいきさつを話す。係の人は直ぐさま計器を持って来て、電池の能力を確かめてくれて手をクロスにした。義雄は助言にしたがい同じ電池があるか確かめた。オーケーと言って、すぐさま電池を取り替えてくれた。ここまで十分と掛からなかった。無事にカードで支払えた。

車をカーナビに合わせて、ほつとして運転に集中した。一度あることは二度ある。そんなことがこの先義雄に降りかかったなら、と氣を引き締めた。しばらくすると、『この先酸ヶ湯温泉方面』の標識を見つけた。義雄は、酸ヶ湯に寄ることによって二度目の不幸の帳消しにしようと思い、芙佐子に言った。

「さっきの標識を見たかい。酸ヶ湯のさ」

「そうね、そんなようだったわね」

芙佐子には記憶が確かではないようだ。それとも、青荷方向と酸ヶ湯の位置関係が呑み込めていないのかも知れない。

「少しは寄り道にはなるけどね、ほぼ同じ方向なのさ。時間の余裕もあるし、寄ってみようや」

青荷温泉を調べたときに地図上で記憶に残っていた。

「時間が間に合うのならいいわよ」

ナビの設定を直した。十二時前にはゆっくり到着できると知ったので安心して走った。

酸ヶ湯温泉に到着して高度計を見ると、八百九十メートルだった。函館山の三倍近い標高だ。道理でクネクネと上り勾配が続いたわけだと納得した。

受付に行くよ、

「きょうはあいにく満室でございます」

と言われたので立ち寄り湯だと告げると、入ったときに気が付かなかった券売機を教えてくれた。

ロビーは広かった。「ヒバ千人風呂」の標識を見つけてまっすぐ向かった。脱衣場は左が男、右が女の別だった。そこから来て、中は混浴だよと初めて芙佐子に言って聞かせた。イヤだというかと思ったら「知ってるわよ」とさりげなく言われた。いつ頃から知っていたのだろうか。とりあえず心配が消えた。

脱衣場で説明書きを読んだ。

「千人風呂」は総ヒバ造り、約百六十畳の湯船は現代の日本では珍しい混浴だ。「熱の湯」、「冷の湯」、「四分六分の湯」、「湯滝」など五つの浴槽がある。それぞれ温度が違う。

混浴の「千人風呂」とは別に、「玉の湯」という浴場もあり、男女別の小浴場だ。「千人風呂」には洗い場がない、「玉の湯」には洗い場があり、「千人風呂」は温泉を楽しむためのだけのだうだ。

さらに「酸ヶ湯」の由来もあつた。発見されたのは三百年前、鹿が湯治をしていたのを発見した。そこで「鹿ノ湯」と名付けられたが、現在は「酸ヶ湯」と呼ばれている。建物は築百年とある。冬場の積雪は五メートルにもなるらしい。

浴室に入ると早い時間のせいか混んではいなかった。湯けむりで全体を見渡せない。冷の湯で掛け流しをして大風呂に入る。これが自慢の「千人風呂」らしい。見事に大きな風呂だ。百六十畳に千人かと考えながら大げさだと思った。温まりながら考えた。銭湯に比較してみたなら、やはりオーバーな人数ではないかと思ひ直した。

湯けむりの中をよく観ると、大風呂の中央に仕切りがあるようだ。傍まで行つてみた。間違ひなく仕切りだった。ということは、左が男湯、右が女湯か。その周囲にはなんの印もない。湯船を上げれば、左右とも仕切り線もなく自由に歩くことができる。そう思っていると、右側に何人か入っている中の一人の女性が湯の中に体を沈めたまま近づいてくる。まともに見れば爺さんの変態の覗きと思われかねない。なんとなく観るとそれは芙佐子だった。やつぱり、湯けむりの中から義雄を探していたらしい。

仕切りを挟んで湯船の縁に座つた。

「本当に大きいわね」

と芙佐子が男の出入り口方向を覗く。

ときおり、若い男の二人連れが前を通りかかるが、爺婆と知ると、ちら覗き程度で離れて行く。ここには露天風呂がないらしい。

何度か温まり直していたら、女も男も混んできた。概ねは年寄りだ。バスの団体客が数台来たのだらう。千人風呂が婆さんたちに乗つ取られた。前も隠さず、スルメをなびかせ、あつちへ行つたりこつちへ行つたり、ワイワイガヤガヤ、色気なんてももの、とうの昔にどこかへ置き忘れたらしい。

千人風呂を堪能してから昼食にすることにした。レストラン鬼面庵に行くと行列が出来ていた。名物だというおでんと蕎麦を食べた。

「名物にうまいものなして、これね」

と芙佐子にあつさり一蹴された。

一時半をゆつくり過ぎていた。ナビを青荷温泉に設定し直した。

酸ヶ湯での気分もあり、久しぶりのドライブに芙佐子が鼻歌を歌っている。青荷温泉に近づいたころ、県道から山道に入ると人家がなくなり、不安になった。それでも、カーナビはその先を指している。心配ながらもナビのお陰で無事に宿にたどり着き、ほつとした。

どんな山奥でも人家があるかぎり電柱はあるが、人家が切れてからは電柱はなかった。

ふと見ると、芙佐子が足元をキョロキョロとなにかを探してゐるふうだ。

「アッ、靴を忘れてきたわ」

素つ頓狂な声を出した。

履いているのは庭履きサンダルだ。地元にいるときは、芙佐子はいつもサンダル履きで車に乗る。だから装いの習慣がまったくない。いまのいままで全く気が付いてはいなかったのだ。いまさらとなつては諦めるしかない。

着いたところは南八甲田の自然に囲まれた素朴な雰囲気の黒石温泉郷の一つ、青荷溪谷の奥深い山の中の一軒家、ほっこりとした感じの宿だった。車の高度計を観ると、酸ヶ湯温泉の半分以下の四百メートルだった。高いところかと思つていたが、思ったより低いとわかった。古めかしい戸をそつと開けると、建物は古いがピカピカに磨かれた廊下と、昔ながらの帳場があつた。日帰りもあると知つたが、一泊を予約してきた。

山奥にあるため、昔は夏季のみの営業だったがいまは通年で営業している。秋には紅葉、冬には白銀の世界などと四季折々の景色とともに温泉を楽しむことができる。

ここは現金だった。クレジットカードを手に握つた芙佐子の手が微かに震えた。わずかしか用意してこなかった現金か

ら、二万円が宙に舞い飛んだ。

受付を終えてみると、帳場前の壁一杯に地元絵師が描いたと思われる襖絵やねふた絵が飾られていた。

部屋への案内がなく、渡された案内書に従つて自分たちで部屋を探す。宿は幾棟かに別れている。宿泊人数は総勢百人で、本館、水車館、離れが三棟で全室和室だ。それらの建物に石畳の小径で繋がっていた。指定の十方堂は吊り橋を渡り左手の奥だった。中に入ると中廊下があり左右に二部屋ずつの襖仕切りだ。部屋は和室の十畳と広かった。まだ明るいから、ランプは下がってはいなかった。お茶を一杯飲んで、早速、露天風呂に行く。

四つある湯のうち、混浴の一番大きい露天風呂はレディース・タイムが五時から六時だった。時間が早かったので誰もいなかったのを幸いに二人で入った。更衣室は男女別になつていたので、他人と出会つても着替えには困らない。露天風呂は溪流沿いにあり、大岩に囲まれていて大屋根が掛かつていた。泉質はやわらかく、無色透明で無臭だ。湯に浸かりながらの周囲の風情は、野趣に富み格別で、貸し切り状態でゆつたりと満喫した。

「こんな静かな雰囲気、はじめてね」

芙佐子が酸ヶ湯との違いを口にした。

夜はほの暗いランプの明かりだけで、混浴でもそんなに気にならないだろう。若いカップルには絶好の雰囲気だ。

隣で木の葉のような何かが二枚、湯にひらめいていたが周囲を気にする必要がなかった。電気がないからドライヤーもなかった。

汗を冷ましてから、あちこちと周囲を散歩して宿の全体の方を理解した。ランプ小屋を見つけた。ここでランプの手入れをするのだろう。部屋へ帰ると係の人がランプを掛けに來た。話を訊くと、廊下や街灯を含めて、二百個だと聞いてそのご苦労に感心した。

ランプの大変なことは、何といつても火屋の手入れだ。火屋は薄いガラスで出来ている。一晩で油の点った煤で火屋が汚れる。それを一個いっこ、毎日二百個も磨かねばならないのだ。やがて油を足して、建物を繋ぐ小径、建物の入り口、そして廊下や各部屋と掛けて歩く。たくさん持つて運べないので、四個くらいずつ運びながら火を点けて歩く。一人や二人で出来る数ではない。こういう陰のご苦労を知ったただで、ある種の感激が湧いた。

六時からの夕食は本館の大部屋だった。すでに満席近い客が席に着いていた。義雄たち夫婦は窓を背にした席だった。人をかき分けて席に座った。

宿の支配人自ら、津軽弁を交えて歓迎の挨拶と料理の説明をしてくれるが、ところどころ津軽なまりで分からない。飲み物は仲居さんが運んでくる酒やビールを、現金売りする。ビールを一本頼んだ。

和やかな食事はじまった。生活に馴染んで暮らす洋式の椅子席と違い、座布団で向き合う食事は、忘れかけていた日本人のDNAを目覚ましてくれた。

ランプの灯りに目が慣れると、お膳も客の顔もちゃんと見えてくる。長テーブルに相席で、たくさんのご馳走が並んでいた。その数、十品以上だ。山菜料理、イワナの塩加減や焼き加減が絶妙で、骨や頭まで全部食べられた。

隣の夫婦は仙台から來た客だと分かった。ほぼ同じような歳ころと見える。気の合った人だと話が弾む。こういう触れ合いは旅先で知る楽しみのひとつだ。

ほろ酔いかげんになったころ、芸人が中央の隙間に座を占めて、三味線の弦の音調をとった。やがて津軽三味線特有のバチを弦に叩きつけるようにして演奏し、力一杯声を張り上げてじよんがら節をうなった。三味線の合間に、ときおり津軽なまりでおしやべりする。ところどころわからない。力強い三味線の音色に聞き惚れてしまった。じよんがら節を生で聞いたのは、後にも先にもこのときがはじめての経験だった。

芸人の話に大笑いしているとき、芸人の前を通ったかなり太った女性に大袈裟に体を仰け反らし、

『どんず（尻）でつけっきやの』

とワツと三味線をかばうようにひっくり返った。あきらかに笑いをとった芸のうちだ。そうだと知りながらも、義雄た

ちも芸人のあまりの上手な動作と一緒に笑いこけた。

芸人のことを仲居さんに訊いたら、近くの街から毎晩車で通ってきてくれると教えてくれた。幾らの収入になるのかは知れないが、県道から入って来た道のりを思い浮かべると、大変なことだと思つた。

部屋に帰る途中、空はとつぷりと暮れていた。電球や蛍光灯とは違つた、ほのかに目に優しいランプに照らされた小径が、幻想的な光に美しく包まれている。新月の夜空を見上げると満天に輝く星が降るようだ。手が届きそうなほどの近さに感じる。周囲に電気の明かりがまったくない。空気が底抜けに透き通っている。その星空を心ゆくまで眺めることができただけでも、ここに来た価値がある。

当然のごとくテレビもラジオもない。むろん、携帯もだめだろう。部屋には電気のコンセントもない。

その夜は風もなく、露天風呂で聞こえていた沢の溪流の音も、遠くにかすかに聞こえるのみだ。十方堂の四室の客は、ほのかなランプに宿る精霊に、物音も立てずにそれぞれに静けさを堪能していることであろう。

周囲はシーンとした静けさと、外は漆黒の闇だ。これが「ランプの宿」としての売りだと納得して、ランプを絞って布団に潜つた。

私にはここにも寂霊が宿つてると感じた。

日常生活はさまざまな家電に囲まれ、朝から寝るまでテ

レビの虜だ。外は車の騒音、夜になると外には街灯、近所の窓も深夜まで明る。電気のありがたさを感じもせず、当然のように電気の恩典に満たされ、部屋もいつまでも煌々と明るい。そんな人工の明るさと、騒音のなかの生活に慣れきっているせいか、家を出たときと、この宿の環境の差があきらかに異なる。

電気のありがたみをなんとも思わずに生活している自分たちには、昔の人たちは不便だけとはいえない。天然の闇の中の静けさは、本当に贅沢だったと改めて感慨に耽つた。

あまりの静けさと闇の魅力に心を奪われ、会話もせずに静寂を心静かに味わっているうちに、意識を吸い取られ寝付いてしまった。

早朝、さわやかに目を覚まし、広い庭の散歩をした。清々しいなんてものではない。小鳥の鳴き声が耳をくすぐったいくらいに撫でてくれる。足元の秋の草花が「おはよう」と微笑んでくれる。空の雲がゆったり少しずつ形を変えながら流れる。あたかも手を振ってくれているようだ。この青荷でしか経験できない雰囲気は酔いしれる。朝湯に入った。贅沢の上ない。

朝食の味噌の卵とじは、ご飯との相性が抜群で、お代わりをしたいほどの美味しさだった。

朝食を終え、爽快な一晚の思い出を頭の奥に畳み込み、心置きなく宿をあとにした。

来るときは人家も人氣ひんぎもなく心配だったこの山道がたった一晚で、不思議なことに遠い昔から知っていたような錯覚を覚える。第二の故郷が出来たなと思った。

きよの目的地は乳頭温泉だ。その距離はおおよそ160キロ。そこも温泉宿だが立ち寄り湯にした。義雄は急ぐ目的のないときは高速道を使わずに、一般道を走る。思いがけない景色や名所に出逢えるからだ。

途中、十和田湖の西側を走った。やがて鹿角市を通り、スキー場とゴルフで有名な安比高原を眺めながら早い紅葉を楽しんだ。

曲がりくねった道を進み、やがて目的の乳頭温泉に辿り着いた。

乳頭温泉は、近くにある乳頭山に由来する。標高1,478メートルと高い。秋田県仙北市と岩手県岩手郡雫石町にまたがる山だ。

十和田八幡平国立公園の中に位置し、秋田県側から見ると乳房を伏せたような形に見えるので「乳頭山」と名付けられた。

岩手県側からは烏帽子子のように見え、「烏帽子岳」や「烏帽子山」と呼ばれる。公式文書では「乳首嶽」と記されている。

七軒ある温泉宿の一番奥の混浴の露天風呂に入った。温泉ベストテンにしては平日のせいやや空いていた。脱衣場が

男女別に分かれてはいるが、大きい露天風呂は間違いなく混浴だった。浴槽はそんなに深くはない。女性は脱衣場を出ると胸にタオルを当て、お湯に身を沈めながらしゃがんだまま、露天風呂の中央に出てくる。

左が通路に面している。露天風呂を覗きがてら人が通る。乳白色の硫黄泉だが臭いはきつくない。温度もちょうどよい。女性も安心して通る人たちを眺め返して、互いに笑いあっている。見られるより、通る人のほうが恥ずかしそうにみえるから不思議だ。

入っているのはほとんどが夫婦者か、グループ者で独り者はいない。なぜか、男同士の集団はいなかった。なんと長閑のびやかなことだろう。昨日に続いて天気がよく、湯から体を出してもさほど寒さを感じない。

義雄夫婦は露天のほぼ中央の、道路を背にして並んで湯に浸かっていた。義雄はタオルを頭に載せて、口元いっぱいまで体を湯に浸かっていた。向かいの壁に中年の女性の二人組が来て、体の向きをやや斜めにして温まっていた。その距離五メートルそこそこだ。街場の銭湯での五メートルは結構な距離だが、大きな露天ではすぐ近くに感じる。

道路の通行人がきたとき、向かいの女性が前も隠さずスツクと立って、更に左手奥の方に移動した。義雄は一瞬、開けていた目をおもむろに瞑目状態にした。自分が動く和不審に思い見返すかもしれない。そのとき、男だと気が付いたな

らどうなるか。瞑目しながらじつと体を動かさないように硬直した。横にいた芙佐子が咄嗟に義雄の顔をそれとなくのぞいた。目を瞑っている様子を安心したらしく、また自然に正面に向きなおした。

立つて移動した女性には、義雄たち夫婦を女連れと誤っていに違いない。目を半眼に瞑っている義雄は、女性のふくやかな胸、股間の見事に黒々とした部分から、したたり落ちる湯の雫が、目の奥に焼き付いてしまった。

人出が増えだしたので風呂を上がり、近くの食堂で遅い昼食にした。

昼時で食堂は混んでいた。注文の品を待つ間に、地元らしい義雄たちよりは少し若い隣りの夫婦連れの旦那に、乳頭山がどこに見えるか訊いてみた。

「帰り道の左の方に、真ん中が乳首のようにポコンと飛び出た山が見えますのよ」

と旦那ではなく、奥さんがニコニコ顔で丁寧に教えてくれた。心の底が覗かれたようで気恥ずかしかった。

しばらく走ってから振り返ると連山が見えた。車を降りてそれらしき山を確かめた。一緒に降りた芙佐子が、

「あそこでないの」

と右手の山を指した。見ると確かに山の上に乳首に似た小山が見えた。

「あー、あれだね」

想像したような乳房には見えなかったが、多分、角度のいいところなら評判どおりの乳頭山が見えたことだろう。

次に目指す温泉は、日本海に出て黄金崎不老死温泉だ。海岸にある露天風呂が有名などころだ。

走る道路のいたるところにコスモスの花が時期真つ盛りと咲いていた。畑は大豆畑の刈り入れ前のような。遠くにリンゴ畑も見えた。

その日の泊まりは横手市のビジネスホテルが取れた。早い夕方だったが、当日宿泊ということで、格安で泊めてくれた。空き部屋を安くても塞ぎたいのだろう。ビジネスホテルは朝食のみで夕食はない。近くのスーパーに行ってお惣菜を選び、白飯を買った。カップのスープとリンゴを買ってきて夕食にした。

ベッドの上で、向かい合って食べた。

「なんか、こんなの初体験よね」

芙佐子が風呂上がりの部屋着の前を開けて汗を静め、缶ビールを飲みながら食べる。

パンフレットで稲庭うどんの名産地だと知った。稲庭うどんは、日本三大うどんのひとつだ。ひやむぎより太く、やや黄色味かった色。普通のうどんよりそうめんに近い。打ち粉としてデンプンを使う点や、平べったい形状が特徴だ。ひねりながら練るといった独特の製法により、麺は気泡により中空になっている。そのため滑らかな食感が得られるとあった。

一般的に流通しているのは乾麺だが、地元や県内では半生麺も入手できるらしい。

翌日ホテルを出て、名物の稲庭うどん店を覗いた。乾麺の束を手にとって眺めた。脇に置いてある段ボールをのぞいた。そこにはU字型の同じようなうどんがあった。さらによく観ると、十センチ足らずの切りくずらしきものも入っていた。切り口の反対側は、指で摘まんだように平べったい。それに気が付いた店員が説明してくれた。

乾麺にするため、丸棒の棹に下げて乾燥させる。U字型のものは棒に当たったところの切りくずであり、短いのは先を棒にからめるときにつまんだ指跡だと教えてくれた。味も全く変わらず、地元の人達の人気だそうである。目方を比較すると約四分の一の値段だ。

「こつちにするわね」

女の買物物は旅先でもせこい。これを選んだ。

その後、ホテルのフロントで教えて貰った蔵町散策をした。道の両側に、二十軒を超える蔵が並んでいる。その中の「佐藤養助商店漆蔵資料館」を見学した。建物は昔風の白壁と、黒塗りの柱のコントラストが歴史を感じさせる。

古来より山里のいたるところで名水と呼ばれるきれいな水が湧いていた。苔むした岩の間から流れ落ちる岩清水。清らかに澄んだ水を使い、一子相伝の製法でつくられる佐藤養助の稲庭うどんの発祥地と知った。いまでも、万延元年より百

五十有余年受け継がれた技と心のこもった伝統の味を守り続けている。

情緒豊かな旅にぴったりの蔵の街、増田町。厳かに佇む漆蔵資料館は、稲庭うどんの味わいとともに、佐藤養助の歴史に触れられる貴重な場所だった。

ゆるやかな時間が流れる空間で、旅人を歴史浪漫の世界に誘ってくれること、間違いなかった。

その資料館の中に無料の喫茶店があった。勧められるままにコーヒーを戴く。そこにおばあちゃんの一行がいた。話を聞いていると、ご近所の常連とわかる。

「どちらから？」

「どうやら、旅人に話しかけることも楽しみのうちらしい。」

「函館です」

と芙佐子が返事を返した。

「あら、北海道の函館？……」

一番歳上らしい綺麗な白髪のお婆さんが訊いてくれた。昔、知り合いがいたとのことだ。

旅先で故郷の話が出ることは珍しい。その会話がもとで、あれやこれやと話に花が咲いた。年寄りたちは他愛もない話に、若い娘のように笑い転げる。いつしか義雄夫婦も輪の中にとけ込んだ。

皺くちゃの手で御菓子をくれた。

「ごちそうさま」

美佐子がニツコリ顔で貰う。

みんなの前を見ると、いろんな御菓子がある。こうやって、たがいに持ち寄り、一日を楽しんでいるのだろう。立派な観光大使だ。

蔵町散策をおえて、最終目的地の不老ふ死の黄金崎温泉に向かう。ナビの示す距離は210キロだ。もう一泊したいところだが、懐具合が宜しくない。高速道路に乗った。

予定の旅の最後となる黄金崎温泉に着いたのは、午後三時半を少し過ぎていた。

フロントで内湯と露天風呂の場所について丁寧な説明を聞いた。

「フロントの前の廊下を進んで下さい。T字路になっています。左に曲がるとすぐ右に露天風呂に出る廊下があります。出口には脱衣籠がありますので、それを持ってお風呂場に行つて下さい」

懇切丁寧な説明で充分に理解ができた。露天風呂への出口まで行くと、確かに引き戸の前に脱衣籠が積んであった。そそくさと裸になって籠に衣服を入れたまま持つて、舗装された道を夫婦で歩きながら露天に急いだ。

幸い風もなく肌寒さは感じなかった。やや急ぎ足で三分とかからずに着いた。

露天風呂に着くと入り口は男女別だった。脱衣籠がひとつ

あった。先客がいるとわかった。天井のない石組みの造りだ。脱衣籠を置いて、引き戸を引いて風呂場に出る。

浴場も石組みの壁で、男女別の仕切りが海の中まで延びていた。

先客はゆったりと海を眺めていた。

「お邪魔します」

背中から軽い挨拶をした。相手も、

「いい眺めですよ」

と後ろ向きのまま挨拶を返してくれた。温泉は熱めと思つたが、入つてみると肌感が実に気持ちがいい温度だ。

日本海が真ん前だ。というより日本海全体が露天風呂だと勘違いするほどに景色がひとつに溶け込んでいる。

混浴でないのがもったいない。

やがて空に薄墨が流れだすと、太陽は烈火を吹き上げ、海のかなたに沈むだろう。

ロマンチックなんでもない。

海が荒れると、間違ひなく湯船もろとも洗われるであろう。それも見物だなと思った。

「どちらから」

と無難な言葉をかけた。

「はい、旭川です」

「わー、これは奇遇ですな。私は函館です」

「そうでしたか。北海道同士がこんなところで出会えるのも

めずらしいですね」

「ほんとですよ。お泊まりで……」

「いえ、ここには泊まらず、新潟方向へ南下するつもりです」

「宜しいですね、後ろから紅葉も追ってきてますからね」

「お宅は……」

「ええ、ここが最後に函館に帰ります」

「ここへ来る途中、城ヶ倉大橋の溪谷の壁一杯の素晴らしい紅葉を見てきましたよ。帰り道だと思います。是非観ていって下さい。一景の価値がありましたよ」

城ヶ倉大橋は、十和田八幡平国立公園に位置し、青森県一の紅葉の名所スポットだ。全長360メートルの日本一の上路式アーチ橋だ。橋の上からの眺めは圧巻の一言、ベスト・ドライビングルートだと教えてもらった。

「そうでしたか。でもこれからの時間ですから、私を通るころはもう暗いでしょう。青森の最終便のフェリーに乗る予定です」

「それは残念ですね。暗くなると景色は見えませんものね」

そんな会話を交わした。

「それではお先に」

「道中、お気をつけて」

先客が女湯に声を掛けて上がっていった。

義雄はしばらく景色を堪能した。

心から満足して隣の芙佐子に声を掛けた。タオルで体を拭

いて、筆を持って芙佐子と帰り道を歩いた。長湯だったのでのぼせ気味の体が爽やかな海風にさらされ、戸口に着いた頃にはちようどよい肌感になった。

着衣して喫茶室でお茶をもらう。汗を掻いたせいかお茶の喉ごしがいい。

「ワカメソーメンはいかがですか。ここでしか食べられませんのよ」

若い女性店員の勧めで一杯分だけ貰って、二人で分けあって食べた。

箸で麺をつまみ上げてみた。ワカメを乾燥して粉にしてソーメンを作ったのだらう。発想が素晴らしいと感心した。完成させるまで、相当の試行錯誤があっただらう。ほればれとする見上げた仕上りの完成品だった。

「ワー、きれい。スープも絶品よね」

芙佐子が一口飲んで歓声を上げた。

透き通るような青色で見事に細くできていて、さっぱりした汁と絶妙にマッチする。喉ごしと、ほんのりと磯の香りがよかった。

お茶とワカメソーメンを堪能しているうちに、露天風呂の湯冷めも治まった。

泊まり客らしい車がなん台か続き、家族連れで急に館内に賑わいが出てきた。

気分爽快になって車に戻った。後ろを振り返ると、左手に

さつき入ったばかりの露天風呂が見える。なんんか^んが楽しそうにおしゃべりをしながら籠^{かご}を持つて歩いて行く。

「あらッ！」

と芙佐子^{ふさこ}が小さく声を上げた。

歩いているみんなは、なぜか着衣のままだ。義雄^{ぎゆう}と芙佐子^{ふさこ}はとたんに顔を見合わせた。

義雄^{ぎゆう}は後ろを振り返りもせず、猛スピードで車を発進させた。

後ろから「ワッハッハ、ワッハッハ」と大きな笑い声が頭の上から覆い被さるように、どこまでも、どこまでも追いついてきた。

小説 佳作

函館ステップ

高橋 剛治

1 ホップ

物語は五十年以上前から始まる。

追憶の中では大体の物が、優しげなセピア色に染まって見えるが、実際にその中に居た時はどうであつただろう。もつと生々しい濃い原色の世界を生きていた気もするが、年月は色を薄めるのかもしれない。実際、私の記憶は見た物の多くを忘れ、体験を風化させて来た。けれど今は、その議論については横に置き、この「函館ステップ」を巡る物語に足を踏み出して行きたい。とりあえずは、小さく右足でホップしたと思うのである。

昭和四十年代の初め、私は函館の十字街界隈で暮らしていた。父母と私の三人家族。その夏の夕暮は、少し蒸し暑かつた気がする。

「行こかあ大門」

戻ろかあ銀座」

それは調子の良い時に、父が口遊ぶ鼻歌の一節なのだが、

発声されるのはいつもその部分だけで、まるで呪文の様に、しかし明るくリピートされた。十歳位であつた私は、その全体がどのような物なのか知らなかったが、特にそれには関心もなく、

「ただいま」

と小声で言い、台所の父の背後を猫の様にすり抜けた。その時、少しだけ見えたのは大きな魚を捌いている様子だったが、後で勤めから帰った母に聞くと、入舟町の鳴海さんから戴いた魚で、大き過ぎるので、すぐに降参し、父に任せたのだと答えた。母は当時では珍しかった職業婦人だった。

私は自分の部屋に帰り、手にした袋から五十枚程の「パッチ」を取出し、増減を数え、

「しばらく御飯のおかずは、あの魚になるのかなあ、煮魚、やだなあ」

そう思ったが、その魚がブリだったのか、ババガレイだったか、まるで記憶は無い。小学生の私は煮魚が嫌いだった。

その頃の私は、近所の子供達と、ただ「パッチ」を取ったり取られたりの修羅の毎日を送っていた。勿論、修羅は大袈

裳ではあるのだが、それが仕事でもあるかの様に、勉強も宿題も放り出し、夏休みの暑い日々の大半を「パッチ」三昧で過ごしていた。その負い目から、こっそり家に戻ったのだった。

ところで遙か後になって、この「パッチ」と言う呼称が、函館の、この辺りの訛りで、正式にはメンコと言うのだと知った。今、つまり二〇二〇年の始めであるのだが、パソコンのウィキペディアを閲覧すると、メンコは次のように記載されている。

『メンコ（面子）とは、日本の子供の遊びで使われる玩具の一つ。その語源は（小さな面）、つまり面子の意味である。メンコは日本の昭和三十年代に於ては、めんち、ばんす、ぱっちゃん、とも呼ばれていた。』

当時のあの辺りでは、ぱっちゃん、がより訛り「パッチ」になつていたのだろう。無論意識はしていなかったが、確かにこの時、私は時代の流行の中にいたのだ、と確認できる。昭和四十年前後のセピア色の世界では、子供は屋内遊具で遊ぶ事より野外で遊び、「パッチ」が飽きられてからも、缶蹴、ゴム飛、後には野球等、屋外遊戯が主流だった。

さて、話を戻すと、鳴海さんは父の妹の嫁ぎ先で、その頃、今の入舟町で漁師さんをしていた。けれどどこかの時点で家業であるそれを止めて、鳴海の叔父さんは魚の加工の仕事に転じていたはずだ。時代の流れの中で、函館のあの辺りの個

人の漁師さんと言う存在が、潮風のしたその界限から減少してゆく経緯の記憶は私には薄い。今更だが今度従兄の虎雄^{とらお}さんに会ったら、聞いてみたいと思う。虎雄さんは最初から企業勤め人だったが、子供の頃には家の手伝いで漁具の整理を遣らされた、と話していた。

この時代、経済は高度成長期の中、漁業に限らず、商店も個人のそれからスーパーマーケット、更に大きなチェーンストアにと変わって行つたが、思い返すと様々な物は流れる風景の様にホップしていた。私の家も、この頃には閉めていたが、五年程の一時期に十字街のその場所で、乾物店を開いていた事があった。長い間、私はそれらを思い返す事も稀であり、関心も薄かった。若い時には前しか向いていなかったと言うよりは、周囲を見る余裕が無かったと言うのが本当で、今になってこうして回想するのは、閑になったからだとも思う。それは個人的趣味でしかないが、そこに何らかの意義がある、と思いたい。

実はこの末広町は、少し前に恵比須町から改称されていた。何故町名が変わるのか、子供の私には良く分からなかった。ある日、自分の木製ソリに記載された住所部分を、マジックで父が書き直すのを見た記憶がある。

「町名が、末広町に変わる」

何故変わるのかを問うたのか、どんな答えを返されたのか、後の会話は覚えていない。その事に対して関心は無かったの

かもしれないが、後年（恵比須町は大黒町に合わせて町名が決定された）と書かれた記録文を見て、少し感慨深かった。

そう言うのも、出雲神話が後の大学の時の私の研究テーマであったからだ。これは結局の所、中途半端に終わってしまったのだが、最近、独学で古代出雲を再勉強し、東京の古代史研究誌に投稿したコラムが掲載された。そんな事もあり、出雲神話の大国主とその子の事代主が、後に仏教との習合で大黒と恵比須の七福神の二柱に託され、その名が町名に使われていた事に不思議な感じがした。あの場所は事代主の町だったのだ、と言う思いなのだが、まるで国譲り神話の様に、その町名は変更されていた。

歴史が好きだったのは、失われた物、人の営みと言う物が、ある感慨で心を覆う性癖によるものだが、それは子供の頃、積木を積み上げ壊すのが好きな子だった、との母の証言で頷ける。しかし幼児の時にそれを繰り返していたのは、あるいは母が誤解した様にヤンチャだったからではない。ただ崩された積木を茫然と見ている時間が長かった。過ぎ去った物に対する哀切感と思い入れが強く、後に出会う（天孫族に征服された古代出雲国）の歴史伝承も、その一つだった。

そんな理由で、かつて暮らしていた恵比須町と、やはり大町と変わる親戚の暮らしていた大黒町の名の由来に感慨を覚えたのだが、あの頃のセピア色の思い出の中に（洗濯ばあさん）の記憶が強く残っている。

家の前を南に百メートル程先から、坂道が函館山に向かって伸びていて、車の少ない時代だったから、冬はソリ遊びに興じていた。

そして坂の手前の道の方、つまり移転前の丸井デパートの方から、通称で（洗濯ばあさん）と言われた人が歩いて来た。彼女は浮浪者らしかったが、切れ切れの布（ボロ？）を纏っていたのだが、その布地の色模様は、ひどく鮮やかで、妙に清潔な感じがした。風呂敷包みを背に抱えて、異邦人を見る様な私の眼の先を、いつも柔和な顔で歩いていた。個人的な洗濯を生業にする、と言う噂もあったが、謎の人だった。ただ一番衝撃的だったのは、夏の函館湾を見事な抜き手を切って泳いでいる姿を見たからだだった。今の赤レンガ倉庫の西側の湾岸、遊泳する場所ではなかったのだが、一人で悠々と抜き手を切り、坊主頭で泳いでいた。水面から呼吸の為に出した顔に、にこやかな笑みを浮かべた姿に、

「すげええ」

と数人の子供が皆、絶句、驚嘆した。

「せんとく、ばばあ。くそばあさん」

年長の悪童の中に、囃し立てる者もいたのだが、私達は茫然とただ遠巻きに見ていた。

実際には幾つ位の方だったのだろう。今の私より若いのだろうと思う。冬はどうしていたのだろうと今になって心配に思うのだが、あの夏の快泳とニコニコ顔で着ぶくれして歩く

春秋の姿しか、セピア色の記憶にはない。

ところで最初に父の口遊んでいた鼻歌については、後に詳細を知るが、歌との認識も無く、関心も薄かった。そのフレーズだけが耳に残っていて、その説明だけは聞いていた。

それは、その頃は廃れていたが、家の近所にあるかつての繁華街、銀座通りで遊ぶか、もう一つの新興の繁華街、大門へ行こうか、と迷う文句なのだと言う。当時、まだ丸井デパートや映画館があり、今よりは賑やかな界限で、月の幾日かに夜店が出て賑わっていた銀座通りだが、子供の私には、デパートや食事の店も多く、賑やかであった全盛の大門に比べ、寂れているとしか意識されなかった。

「銀座通り、何もないよ」

そう言っと、父は昔の唄さ、と言った。

「昔って、いつ？戦前の話なの」

「全盛は、大火前なのだよなあ」

と答えた。大火の事は小学校二年の担任だったF先生の話が今も記憶にある。

F先生が小学校高学年位の頃で、家が宝来町だったそうだが、谷地頭方面からの火で、近隣の人達は大森町や大門方面（つまり北の方角）へ避難したが、風向きは西から東に変わるから、むしろ西の方へ行くのが良いと言われ、一家で迷いながら大町方面へ逃げ、助かったとの体験談だった。火は銀

座通りから十字街を焼き、風で東へ進路を変えた。

父に、その女性教師の話をすると、

「俺らは鱸淵に住んで居たからな、最初、火が向かっていた時は、もし火が来たら、皆で海に逃げるべや、と喋っていた」

父も六歳位で、その言葉以外の事は、あまり覚えていない様だった。鱸淵は今の入舟町辺の旧名だ。

この昭和九年の年代については、長い間、私の年月的な意識が薄く、戦前のある時としか思っていなかった。最近少し文献を読み、時代を認識したが、十歳位で大火を経験したF先生は、あの時父母より少し上の四十代初め位の方だったのだなあ、と改めて思った。

2 ジャンプ

物語の時代は三段跳びの左足ホップから、いきなり右足でジャンプする様に三十年以上飛ぶ。昭和を過ぎ平成も半分辺り、今から十六年程前だった。トリノ・オリンピックが開催され、フィギュア・スケートでの荒川静香の金メダルを喜んだ後だったと思う。

私は四十代半ばで、仕事では責任ばかりが重くのしかかり、もがく様に目を過ごしていた気がする。色にすると灰色だったろうか。現実には黒その物だったかもしれないが、歳月が、それを薄めている。いい性格だと自分でも思うが、反動で私

生活では、やけくそ気味に飲み歩いてた頃だった。

「青い海 函館のおお」

港お あけえばあゝ

出船の汽笛♪

こんな節の歌を知らないですか。「函館ステップ」と言うタイトルのいいのだが」

横浜のカラオケスナックで会った少し年上の男性客から、こう尋ねられた。

広いフロアで、老若のグループが二組、中年のペアが三組とカウンターの一人客が四人、合わせて二十人程で盛況な店内の煌びやかなホールステージで、同じ会社のSが「ハウエヴァー」を熱唱していたのだが、歌い終わってから、「グレイは北海道の函館の出身なんですよ」

義理で拍手する周囲に語り、続けて、

「こいつ同郷なんですよ。続けて、演歌とかの函館の歌を歌いますよ」

接待しているMさんに向かい、余計な振りをした。Mさんに、グレイは無いだろう。演歌だよなあ、と私は思いながら、瀬川瑛子の「函館の雨はリラ色」を歌った。Mさんがいつもの「旅客三人男」を歌い、一巡位した後で他のグループの年配客が、北島三郎の「函館の女」を歌った。そこでSが、意味のない再度の函館コールをするので、小野由紀子の「函館

ブルース」を歌ったのだが、

「珍しい歌、知っているねえ」

と、その男性は声を掛けてきた。歌った二曲は共に母が持ち歌にしていた物で、私にとつては珍しい曲ではなかったが、意外と知られていないのかなと思った。

弘前出身だと言う、その人の語る所では、その「函館ステップ」は五十年程昔の、昭和四十年頃に函館へ行った修学旅行のバスガイドさんが歌ってくれたのだと言う。函館のご当地ソングだと言っていたが、聞いたのはその時だけで誰が歌ったのかも不明だと言う。確かにカラオケ目録には入っていないかった。

ご当地ソングはタイトルや歌詞に都市や地方名、その地の風習や文化、地形に関する事柄などを取入れた歌の事だが、地方色や郷愁などを前面に打ち出した楽曲が函館は多いかも知れない。先に挙げた曲の他にも「港町ブルース」とか「北の旅人」「函館本線」等の演歌系のヒット曲にも地名が入っている。

実の所その頃の私は、そんなにカラオケ好きではなく、カラオケ好きの母に、帰省の度に両親常連のカラオケスナックに付合わされる位だった。ただ東京では仕事上の接待や、仕事に絡むのか、ただの遊興なのだから交際の酒席で、酔って歌っていた。アルコールが入らないと歌えないよ、と言う感じだったが、カラオケには馴染んでいた。

その夜は久々に痛飲はしたが、最終電車では帰った。結局その歌は分からなかったが、何故か、その曲名だけは記憶に残った。

それで、何日かしてパソコンで何気なく、「函館ステップ」と入力すると、知識検索サービスの（知恵袋）に次の質問があった。

『修学旅行で函館に行ったときに聞いた歌なのですが、「青い海、函館の、港・・・」こんな歌をバスガイドさんが歌っていたのが記憶にあるのですが、歌詞を知っている方いますか？

メロディはわかるのですが・・・』

これに対する回答が二件あり、ベスト・アンサー、として、『小・中学生が修学旅行で函館を訪れた時にのみ聞く事ができるバスガイドさんが歌ってくれる歌「函館ステップ」です。たった一度しか聞いていない筈なのに、しかも数十年経っているにもかかわらず皆さんよく覚えておいで、最近よく「あの歌知ってる？」と聞かれます。それほど印象深い歌なのでしょう。函館に修学旅行で来た方しか聞く事が出来ませんので、地元の人には聞いた事がない、という人が殆どです。』

と、あった。もう一つの回答は、

『バスガイドさんの、オリジナルだと思います。』
だった。質問は二〇〇四年（平成十六年）五月とあり、回

答もほぼ同時にされていた。

「二年程前の書込みかあ。やっぱり、修学旅行の観光バスが出所なのだろうな」

呟きながら、ふと、もう一つの回答にあった、一人のガイドさんのオリジナルな企画だったら、すごいなあ、と私は思った。

それからもバタバタと仕事に明け暮れて、この事も忘れて数年が過ぎた。東京も通算四十年を過ごしているうちに、元氣だった母が白血病で亡くなった。八十三歳だったが、長生きの家系なので、少なくとも二歳上の父より先に、とは本人も思っていないかった。

「父さんボケたら、どうしようかねえ、私一人で面倒見切れないから、二人で、どこか良い施設にでも入れてもらおうか。父さん、大人しく居てくれるかねえ」

等と私に言っていたのだが、人生は想定通りにはならない。母の死後一人暮らしになった父は、束縛を嫌い、介護ヘルパーさんの補助で、ボケもせず自宅で暮らしていたが、二年後に高熱で入院する。診断は肺癌だった。

「俺も八十七歳だって、おかしいな、少し前まで、仕事を辞めたばかりで六十五歳位だったのに、いつの間にか、二十年も過ぎた」

その時、入院した父がばやいたのだが、その前の年月は、生活の為に働き、日々の暮らしや馬鹿な息子を育てるのに忙

しく、人生の進行スピードはそうでもなかったのかもしれない。けれども仕事も退いてからの二十年余は父には早かった様だ。町内会の雑務を手伝っている位で、先に仕事を退職していた母と二人で楽しく暮らす余生だったのだろう。

そう言えば父母の若い時の話など、きちんと聞いてはいなかった。筋道立てての一代記などは無理だろうけれど、もう少し色々な話を聞いておけば良かったとは思う。

無論、幾つかのセピア色的なエピソードは聞いた事がある。例えば、戦争中は横浜方面の造船所で働いていた事。終戦の年、横浜の造船工場にいた十七歳の父は、終戦の意味もわからず、玉音放送の後で、同世代の仲間たち数人と、降服反対、まだまだ戦えろと街を練り歩き、警察に補導されたのだとか・・・。

玉音放送で日本中が消沈している雰囲気の中で、今から見れば甚だしくKYな、子供の私にすら、無茶な話と思われたが、今から思うと、時代の悲劇と解放された混沌の中のレアな話だと思う。ただ灰色の八月十五日でイメージされる時に、無軌道な若者の無茶でアホなリアル感が、それはそれで生々しく伝わる。灰色の中にも様々な色は含まれる。勿論より深刻な暗黒もあったであろう。

壊滅的空襲で東京での仕事も無しになり、どこかの時点で彼は戦後の函館に戻ったらしいのだが、家を出た時は健在だった彼の父も兄も、敗戦の前に病死していた。明治年間の祖

父の代に函館へ移住し、大工の棟梁だったと言う大家族の彼は、母の病気の治療費もあり、戦前には既に没落傾向で、戦後戻った函館では妹と二人になっていた。

そこから高度成長期の社会を駆け抜けた父にとって、定年からの二十年程が、一番楽しい時期だったのではないか、そう言うのは残された写真からも伺える。様々な観光旅行の写真があるからで、心配の種は東京でブラブラ働いている一人息子の事位で、共働きだったから二人とも年金があつて、趣味生活を送れている。しかし楽しい時の流れは早い。

入院していた父が他界し、色々な事が白紙に戻った私も、取合えず定年までは勤め、その先どうした物か、惑う事になる。

この頃のある日、ふと思い出して、パソコンのユーチューブ検索で何気なく「函館ステッブ」と入力すると、歌が二つ検索された。その一つを選ぶと、曲が流れた。

初めてフルで聞く「函館ステッブ」は、あの歌だった。ああ、これだったのか、それは父が口遊んでいた呪文を含んでいた。しかし曲は、やはり私には聞き覚えがなかった。

それらは、ここ二年位の間にアップされた様で、共にSP版（シングルレコード）から採録とあつた。コメント欄に、

「昔、修学旅行のバスで聞いた」

と、あり、曲は函館出身の歌手である瀬川伸が歌った、とあつた。

瀬川伸は勿論、知っている。さすがに古い歌手で、レアではテレビでも歌を聞いていない。カラオケにも曲が入っていないが、古い歌オタクとなっていた私は知っていた。瀬川瑛子の父で、略歴は次に記載の通りである。

『瀬川伸は大正五年、函館の蓬萊町（現宝来町）の（蘭亭）という中華料理店の次男として生まれる。昭和十一年函館商業学校卒業。翌年の八月、函館日日新聞社主催の（歌謡新人コンクール）に出場し、一位入賞。審査員を務めた江口夜詩、高橋掬太郎に認められ、流行歌手になることを志し、上京して江口夜詩門下となった。当時、流行歌手を育成する学校を主宰していた江口夜詩は、瀬川をコロムビアレコードに紹介し、デビューさせているが、ヒットに恵まれず、戦後、キングレコードに移籍。更にタイヘイレコードに再移籍後の翌年、デビューから十年以上が経過した昭和二十六年に発売した同名の映画主題歌（上州鴉）が初ヒットとなった。その後は時代劇を題材にした股旅歌謡の他にマドロス物もヒットさせ、紅白歌合戦にも出場するほどの人気歌手となった。』

しかしどの略歴にも「函館ステップ」の記事は無い。つまり全国的なヒット曲ではなかったのではないかと私は思った。

作詞は高橋掬太郎。（酒は涙か溜息か）が有名で、他にも（啼くな小鳩よ）はじめ数多くのヒット曲がある。函館で新聞記

者をしていた人で、（酒は涙か溜息か）も函館の銀座通りが舞台なのと言う。現在、宝来町にその歌碑がある。作曲は飯田三郎、高橋とのコンビで（ここに幸あり）等のヒット曲があり、共に根室の出身である。

レトロモダンな良い歌だが、函館のバスガイドさんは何故これを歌い継いだのだろうか。

3 スキップ

物語は平成から令和と年号の変わった時代に移る。この間、個人的には色々あって、記憶では前半が黒色、後半が薄緑色だろうか。年月がもっと過ぎれば、都合の良い記憶装置は、灰色と白色位にはなるのかもしれない。

その前年の定年を機に、私は函館に戻っていた。帰る動機を失い、迷いながら、結局は妻を連れ、帰郷する。今はバラ色とは言わないが、現段階で記憶は白くスキップしているから、よし、としたいのだが、どうだろう。

「呼ぶな かもめよ」

名残の 胸に♪

切れたあ テープが♪

すすり泣く♪

弥生町の病院からの見舞い帰りだったが、雨上がりの七月の空は晴れ上がり、天空には見事な虹が掛かっていた。その

おかげで歩調が軽く、何気なく「函館ステップ」の歌詞がこぼれてきた。しかし、お見舞いなのだ、気分は軽いわけではなかった。

務さんが転倒し、足骨折で入院した。務さんは母方の伯父で、父方の親世代が全滅している私には、親世代の最後の人になる。

病院では車椅子に乗っていたが、左官屋さんをやって来た務さんは、職人さんらしく、いなせな老人で、元氣そうに看護師さんと会話をしていた。認知症が入り、前回、前々回と同じに、私の顔には見覚えはある様なのだが、名を告げてでも、誰なのかは分からなかった。それでも人懐っこい笑顔で、

「兄貴は、どうしている」

と、しきりに聞く。これも前回と同じ問だったが、兄は、自分の兄である勲いさむさんの事だった。務さんより六歳上で数年前に亡くなっている。私の両親や自分の妻については、既に故人であることは理解している様だが、何故かその兄についてだけは、まだ生存していて、自分と同じ様に病床にいらしい、と思い、気遣っている様だった。

私の両親は、何とか認知症にはならなかったが、最後の入院から復帰はできなかった。今になって思えば、両親の為に亡くなる前に、もっと早めに函館へ戻るべきだったのかとも思うのだが、定年まで勤めなければ、自分の生活がままならず、父の入院時は、東京から毎月見舞いに帰省した。早期

退職も考えたが、やはり叶わなかった。

「函館、過疎っていて、仕事ないよ」

地元の知り合いに言われたが、それでもまあ、定年後ならば、三年程空き家にしていた古い家もある。多少リホームして妻とのブー太郎な生活を送る事を選択できた。仕事の精神的な負担さえなければ楽だろう。BGMには、あの「函館ステップ」だと楽天的に思ってたが、帰郷するなり、もう一つ耳に残るメロディが聞こえた。四十年振りに聞いた「函館賛歌」である。どこから聞こえてくるのだろうと思えば、ゴミ収集車からで、懐かしい曲だった。

元々音楽を聴く事は好きだったが、この何年前のパソコンでのユーチューブの普及もあって、楽曲の検索が容易になり、音楽CDを購入しなくても色々な歌を容易に聞くことができるようになった。母親が病没した後に残ったCDや残したカラオケ手帳に興味をひかれ、いつのまにかカラオケにも嵌っていた。

それもあり、あの後も「函館ステップ」についても少し調べていた。その後も新規で幾つかの映像や歌のカバーがユーチューブにアップされていて、そのコメント欄には、

「昔、修学旅行のバスで聞いた」

と言う内容の書き込みが散見された。ネットには昭和三十八年の発売 とある物や、ずずらんバス、の美人ガイドさんが歌ってくれた、と書かれた物もあった。

たが、年代もバス会社名も裏がとれず、不明だった。

一般に地方の観光バスのガイドさんは、ご当地ソングを披露してくれるもので、代表的なのは青森での（リンゴの唄）だし、長崎で聞いた（長崎の女）は、ガイドさんが若く、美人だったので印象深い。ガイドさんの手引書の様なもの、それらは記載されている様だった。もしかしたら、当時の函館観光の（バスガイド歌の参考手引書）の様な物に、〔函館ステップ〕は搭載されていたのかもしれない等と想像できた。

しかし、元歌が私にはまるで覚えのない曲だった。昔にヒットして忘れられた曲なのかとも思うが、カラオケに入っていない事もあるが、資料的痕跡がまるでなかった。

その事情としては、瀬川伸の歌った楽曲の殆どが、古いレコード盤しか残っておらず、CD化されていないかららしい。私が歌える彼の最大のヒット曲である（上州鴉）が、唯一カラオケ配信されているが、これも別の歌手のカバー版で、瀬川伸の名はカラオケリストに無いのである。

新しい書込みとして、

「この歌は地元・函館でも知らない人が居たりするみたいで、まして世に知られずに、今でもバスガイドさんが、よそ者相手だけに唄っている歌なんでしょうか？」

「函館市民には馴染みが薄いのか、この歌を知らない人が多い云々」

とのコメント記事があった。昭和三、四十年代、私が（パ

ッチ）に熱中していた頃、函館の観光バスで流行していたのだが、どうもその後、忘れ去られた様だった。

平成の二十三年頃、地元出身の池田さなえさん、と言うシンガーに、この歌はカバーされている。ライブ動画の一部もアップされているが、本人のオリジナル曲である（函館夜景）のカップリング曲の為、カラオケにはそちらだけが入っている。

帰り道に久し振りに弥生町から元町界限の教会辺りを歩く。海風が涼しくて、この季節が一番良いなあ、と思った。実は幼稚園は、このS園に通った。当時はバス送迎等ない時代だから、十字街の方からは、遠いし坂道で、子供には通園は結構大変だった。それでも少しは記憶が残っているのだが、レイモンハウスの所で、あれっ、と思った。新しく記念館になっているせいなのか、その辺がまるで記憶に無いのだ。向かいの東本願寺には、境内の草むらで虫取りや花摘みをした鮮明な記憶があるのだが、向い側は製麺工場の様な物があつた様な薄い記憶しかない。

レイモンさんの散歩していた姿の記憶はあるが、コウ夫人の記憶は無い。後に書物で、夫妻の波乱万丈の生涯を知ったが、その頃はドイツの方としか印象が無く、遠くからた見ていた。

「レイモンハムは、十字街のJ屋で週一回販売されるが、すぐ売り切れるし、高いから、うちでは買えないよ」

そんな事を父が言っていたのを覚えていたが、どうだろう、何度かは、これがそうだと食べさせられた気もするが、記憶は無い。帰郷した最近、五稜郭の丸井にある専従売り場であつて来て食べてみたが、美味しくて感慨はあつたが、やはり記憶はなかつた。

元町から広い坂道が見える。二十間坂と呼ばれるその坂の東側で、昭和九年の猛火は劇的に止まつたとF先生は語つた。それは小学生の私の記憶にはつきり残る。坂道が広がつたからか風向きの急な変更だつたのか、運命の分岐が意識に刻まれる。歴史を見る時に特に思つてしまう、人の努力は虚しい事はかりなのではないかと。けれど、そうであっても私たちは同じ様にしか生きられない。精一杯足掻き、努力するしかないのだからと思う。

元町から坂を下る。南部坂の東側の短い坂には名前が無い。降りきつた通りの右側、電車道路に出る手前に昔の私の家があつたのだが、今はホテルが建つていて、すっかり変わつてはいる。けれど区画が変わつていないので記憶はたどり易い。ここに小学校を卒業するまで居住し、五稜郭方面に引越した。そこで高校まで過ごし、進学で東京に出た。長い旅の後でこの街に戻る事は、あまり意識してはいなかつた。

地形以外の全ては変わつてはいるが、改めて街を見るのは懐かしい。その場所で個人商店を始めた父は、五年位で閉めた時、

「諸々の借金や税金、仕入れ代金を支払い終わつて、店に残つた在庫品は儲けなんだ」

得たように自慢気に話していたのが印象に残っているが、今思うと何が得だつたのか良く分からない。赤字で閉めるのでは無い、と言う部分かなとは思ふ。母が公務員で、父がすぐ勤めに出たので、暮らしに困る事はなく、私の手元にはしばらくはガムとか飴等の（儲け）の分け前は確かにあつた。

十字街交差点、丸井デパート、映画館の映劇、小池カレー店、廉売、銭湯、書店、天ぷら屋さん、八百屋さん。彼方に霞む記憶だ。

「一人っ子で、かぎつ子だつたよなあ」

思い返すと、当時では少ない共働きの家だつた。母は公務員、民営化前の郵便局の保険課で、敗戦後から早期定年退職で辞めるまでの四十年以上を函館本局と北局に勤めた。

母は、大正の初めに山形から来た若い夫婦の末娘だつたが、戦前に父が病死し、上の兄三人が出征していた。母子だけの家庭では、上の教育などは望むべくも無く、義務教育終了後に郵便局の採用試験を受け、合格して研修所に入った、と聞いた事がある。

兄の中では、長男が戦死したが、次男の勲と、三男の務は復員できた。

母のこの時のエピソードとして（缶詰工場からの脱走）が語られている。勲さんの息子で、同年の従弟である真秋（まあき）に聞

かされた。

「好子叔母さんたら、卒業したら、光代^{みつよ}婆さん（つまり好子の母親）が口利きした缶詰工場で働く予定だったけど嫌で、ドタキャンで逃げて郵政の試験受けに行ったんだってさ」

と笑った。聞いた私も同じく笑ったのは、単純労働の作業場で母の光代と同じ様に働く未来から脱走する、若いワンコか兎の焦りっぷりを想像したからだ。好子は母の名だが、普段鷹揚にしている母だったから、その慌て方と機敏な動きを想像するとおかしかった。

「新卒の若い娘に、缶詰工場はないな」

真秋は、自分の娘の事を連想したのか。そうも言ったが、時代が時代だからなあ、と私は思った。この話の真偽は分からないが、敗戦後に訪れた民主的新時代が、女子の事務公務員の募集と言う、スキップする様な、ささやかな幸運を母にもたらしたのだろう、と私は思う。

4 ステップ

コロナ感染症で大揺れになっている令和二年だが、それとは無関係に二月半ば、務伯父さんは九十四歳で亡くなった。脾臓に欠陥が見られ、転院の一年弱だったが、年明けに花園町の病院に見舞いに行った時には、重症化して寝たきりになっていた。意識も混濁していて、掛ける言葉も無かったが、

その後、回復しないで逝かれた。これで、私の親世代の親戚は全て旅立った事になる。

雪は二日降り続いてしたが、明け方には止んでいた。その為道路脇にこそ雪山を見せていたが、斎場への午後の道は、タクシーをスムーズに進ませていた。寺町通りから右手に見る函館湾口は白く輝いている。そこは父が子供の頃住んでいた場所で、母もまた隣接する大黒町（現在の太町）で暮らしていたので、共に昭和九年の大火の難を逃れていた。

その大火の記憶で（鱈瀬に火が来た時は皆で海に逃げる予定だった）の話は、後に私が文献で大火の事を読んだ時、発生が冬季の夜間であつた点で、実際には無理だったのではないかと推測された。

実際に、当初の風向きから安全と思われた市域東側の大森浜へ避難した人々が、炎と激浪の挟み撃ちになって逃げ場を失い、焼死者の他に多くの溺死者や凍死者を出した点からも状況は同じだと思われた。東西の湾岸での環境の違いから、舟があればとも思うが、人力では冬季の海には逃げられなかったのではないかと思う。つまり風向きが変わった、と言う運命が、六歳の父や西部地区の人々を救ったのだと思われた。「私達は、一繋がりの時間の中にいる」

そんな事を考えているうちに、タクシーは斎場に着いた。雪道を考えて、早めに出た事もあり、一番の到着になった。

二月の火葬場は雪に覆われ、そこから見る山と湾口の景観

は白く装飾されていた。

『夢の街 函館のお』

街はあ 楽しい♪

柳が なびくう♪

「函館ステップ」については、昨秋に大体の事が判明していた。

帰郷してから行き付けになったカラオケ喫茶で、年配の方に、片っ端からこの歌を口遊んで尋ねると、概ね六十五以上の方、つまり昭和二十八年位より前に生まれた函館在住の方は、聞いた事がある。知っている、という答えだった。その中のYさんが、

「この歌だけ港祭りで、昭和二十五年に発表されてから三十四年位まで使われてたんだが、三十五年から使わなくなっただわ」

どこからか調べて教えてくれた。私の知っている港祭りの歌は「港祭り唄」と北島三郎の歌う「函館音頭」だったが、それは「函館音頭」の前に使われていた曲なのだという。

「その「函館音頭」の後が、この曲だべさ」

横に居たKさんが「いいんでないかい」函館港唄」を歌ってくれた。いい歌だが、この頃は既に函館を離れていた時で、これは聞いていなかった。ただ歌い手の佐々木基晴さんは良く知っていた。民謡の歌い手として、地元での名士だったからだが、営業の父とは部署違いだったが、父が後半生で勤め

た資材会社での同僚だったからだ。家に基晴さんの民謡のLPレコードもあった。この歌と「函館音頭」、今の港祭りの歌である「いか踊り」の三曲は現在のカラオケ配信に入っている。

YさんもKさんも七十歳過ぎの方々だが、昼カラオケの常連で、共に元氣だ。そしてその後でKさんにIさんと言う元バスガイドだと言う女性を紹介された。年齢は非公表との事で、草笛光子に似ている。

「ガイドではなく、ガールね」

Iさんが言う。ガイドは観光バス等の乗務員で、ガールは車掌なのだとか。車掌の仕事はワンマンバスになった時に消滅していた。

「久しぶりに東京のバスガール、歌ってや」

Kさんの言葉にIさんは、後でね、と嫣然と答えた。それは昭和三十三年の初代コロンビア・ローズのヒット曲だったが、この歌のバスガールは東京の鳩バスの様で、バスガイドとバスガールの区別は曖昧に思える。

Iさんは、次の話をしてくれた。

「函館ステップ」は、昭和三十年頃に函館市の観光協会がまとめた「函館のうた」と言う小冊子に二番までの歌詞で収録されていたので、多くのバスガイドが歌い、歌が昭和三十五年から港祭りで使用されなくなってからも、観光バスでは歌われ続けただわ」

結果として修学旅行で函館に来た若い世代に知られ、函館の若い世代には知られていない、と言う不思議なねじれ現象を発生させたのだったが、その若い世代だった人達も、六十歳位になり、この話とともに忘れ去られ様としているのだろう、と私は思った。

「こんな歌があるんだから、せめて今の函館の人にも、改めて覚えてもらいたいね」

Iさんの言葉に私は、せめてカラオケで配信されていればなあ、と思った。

瀬川瑛子さんが、(父瀬川伸を歌う) と言うような、瀬川伸のヒット曲をリメイク収録した企画CDアルバムでも出してくれば、現在カラオケで配信の無い「函館ステップ」や「上州鴉」(港神戸のマドロスさん)等が蘇るのではないか、と思ったが、配信で歌う人が多くいないと駄目か、と思い、「まず、カバリーバイバルで発売された「函館ステップ」、港祭りで復活させて、少し流せばいいのにね」

と言うと、Yさんが、

「港祭りは、函館大火からの復興が始まりなんだから、その辺を取り上げ、野外劇なんかでも、身近な話に「函館ステップ」とか「函館音頭」みたいな、ワン・コーラスでも取り入れればいいのにな」

と言った。それが去年の秋の事だったが、ずらんバスについては分らなかった。

斎場のロビーで椅子に座り、そんな物思いに浸っていた私に、妻が言う。

「由紀ちゃんや真秋さんたち、到着したよ」

親戚たちが着いたみたいだ。

「喪主と御遺体はまだだね」

「ええ、でもあれかな」

妻が指す道の向うに黒い車が見える。その先には巴形をした函館湾が広がっている。私たちは親たちの着地した、もう少し先まではステップしなければならぬのだろう。

この物語は、当初構想では、この辺で終わるはずだったが、だが、広げた伏線の回収が、まだ必要で、斎場の私の物語に繰り込めず、以下の二つを、エピローグとして記したい。蛇足の感もあるが、半端な物語が、話として少しでも立ち上がってくれればと思う。

エピローグ*

「函館ステップ」の後日談として、従兄の虎雄さんの家にお邪魔した折り、この歌知っています、と「函館ステップ」を口遊ぶ。

「行こかあ大門」

戻ろかあ銀座

招くネオンのお 赤と青

すると、虎雄さんが、

「ああ、聞いたことがあるよ、その歌」

と言う。虎雄さんは私より六歳上なので、子供の頃の港祭りで、この歌を聞いたギリギリの世代だと思ったが、やはりそうだった。

リズムを取っていた奥さんの麻衣^{まい}さんが、

「それ見せて」

と、私の渡す歌詞を書いた紙を手に。

「フーン、歌えるかも」

艶のあるソプラノで、歌い始める。

「花開く 函館の♪

山を仰げば 月影 おぼろ♪」

アカペラの麻衣さんは、抜群に歌が上手く美人なので、某昼カラのマドンナなのだ。

「これ、何と言う題名の歌」

歌い終わり、そう言うので、曲名を言い、

「昔、港祭りで流していたんだそうです」

と付け加えると、

「題名知らないけど。昔聞いていたと思う。カラオケで歌いたいわね」

「といい、私がカラオケで配信されていないんですよ、と答えると、

「DAMとかに、配信直訴したらいいのよ」

とカラオケ会社のホームページ上にある配信リクエストを言った。

瀬川伸版は無理でも、池田さなえ版のCD音源ならあるはずだから、駄目もとで、それも有りかなと思うが、ネットでの申請操作が面倒で、私一人が言ってもなあ、と思った。

それからネット上の書き込みで、「函館ステップ」の発売を昭和三十八年としている文章が多いのは、単なる年代の間違いではなく、この年に佐々木基晴さんの「すずらん音頭」とのカップリングで、特別版シングルレコードとして再発売された事情からかと推測される。民謡調の「すずらん音頭」も幻の歌に近いが、函館の港祭り唄の一つで、同様な歌で他にも「五稜郭音頭」と「巴音頭」がある。

又、「函館ステップ」が、バスで二番までだったのは、三番の詞が、修学旅行には、少しアダルト気味だったからだと思われる。

「君と ひと夜は♪

あの湯の川で♪

厚い 情けに 夜もすがら♪」

エピソード**

最後は亡くなった務さんの兄、務さんが最後まで気にかけていた人。つまり私の母の兄でもある勲さんのエピソードであるが、この物語に関連する事を、最後に唐突に思い出した。

勲さんが昔、歌手を目指していたと言う話で、それは母から聞いたのだったが、

「勲兄さんさあ、戦前の二十歳前頃に歌手を目指して東京に行きたかったんだよ。あの瀬川伸と一緒にコンクールに出ていたからね」

と言っていた事があつた。私が瀬川伸、と言う歌手の名を聞いた最初かもしれない。

勲さんはカラオケが普及する前の時代の人だったので、その歌声を、私は聞いた事がなかったが、母は言う。

「勲兄さん、昔風の発声だった、上手かったし、良い声をしていた」

確かに、勲さんの息子、真秋が若い頃にバンドを組んで、ポップコン（ポピュラーソングコンテスト）の道大会に出ていたりしていたから、血を継いでいるのかもしれない。だが、この伝承も次の点で修正が必要だった。

勲さんの生年月日が大正九年で、瀬川伸より四つ下と言う点。瀬川伸が世に出た函館の歌のコンクールが昭和十二年で、この時の資料はないので不明だが、十七歳の勲さんはギリギリ間に合ったかもしれないが、一緒の出場には少し年齢が足りない気がする。

これは母の記憶違いか、元の情報の誤りではないのだろうか。解釈するならば、歌好きの勲少年は、同郷の先輩で、歌手になる為に上京した瀬川伸に憧れ、その後で歌手を志した

と言う事なのではないだろうか。あるいは上京前の瀬川と、大会ではなく、もう少し小さな催しか練習場の様な所で、二アミスしていたか。更に言えば、瀬川伸を輩出した函館の歌のコンクールの二回目、三回目に出たのかもしれない。この辺は想像で、やはり資料が無いので詳細は分からない。

しかし時代は戦争へ向って進み、若者の夢等を語れない時代になる。勲さんは勤め人となり、間もなく招集される。戦後復員したのだが、勤め人として生涯を終えた。瀬川伸もようやく戦後に芽を出す、勲さんが、それをどう感じていたかは聞いていない。

私の父方は私で函館四代目、母方は三代目だった。江戸っ子が三代目からなら、充分に函館っ子と言えたが、皆、無名の民として歩み、物故した。私は六十年以上の大半を他郷で暮らし、ほとんどの時間を無為に過ごして来たような気がしているが、死ぬ前の母が、

「無為でも良いのよ、継続する人の足取りこそが大切で、誰の人生も尊敬に値する」

そう言ったのを思い出した。読書家だった母は、時々含蓄ある言葉を吐いた。話の前後を忘れているが、自分の事でも私の事でもなく、一般論の中での雑談だった。人の無為の行いにも、意味はある。つまり人の全ての歩みには意味はあるとの言葉だ。

この物語で、当初伝えたかった事は、

「セピアの回想とその向うにある『函館ステップ』を忘れずに、口遊んで行きたい」

であつたのだが、図らずも母の言葉は、無為な自分の回想にも、人々の個々のステップを想起させ、我田引水すれば、少し深い話になったかもしれない、と思う。いずれにしろ私は、もう少し、あと何年かは、自分なりのステップを踏み続ける事になる。

そして、六十年をステップし、継続する公募に、これを添える事はできるだろうか、と思いながら、筆を置くのである。

(了)

ワンダフル寢台特急

水 関 清

小さな子が、遊びであれほかの何かであれひとつのことに夢中になる姿は、それを見るオトナを笑顔にさせる。目の前で展開する子どもの仕草が、自分の心の奥に息づいているコードモの部分に共鳴し、心の中で反響して生まれてくる何かが、オトナの頬をゆるめ、笑顔をもたらすのだと思われる。

小さな子どもたちの中でも、男の子が夢中になる対象の双璧は、列車と車だと思われる。ともに日常生活の随所で目にふれるだけでなく、それらは線路や道路の上を走ったり動いたりする。車体に塗られた色彩は多彩であり、機能別に分類された様式も多様である。鉄道なら、新幹線、特急列車、普通列車、貨物列車など、車なら、消防車、救急車、トラック、普通自動車など、それぞれをひと目見ただけですぐに分かる形態を備えており、ときには、汽笛やサイレンなど、視覚以外の聴覚に訴えかける機能や特徴もあわせ持っている。

その子たちが夢中になっていく過程にも、ある程度共通したものがみられるように思われる。鉄道や車が走る姿を街角で見て、親にその名を尋ねて興味を持ち始めると、絵本や写真集が、そしてビデオなどの動く視聴覚資料が買ひ与えられ

る。それらに飽き足らなくなると、鉄道模型やモデルカーへと遊びの興味の中心が移り、プラレール・トレインやミニカーのコレクションが誕生日ごとに増えていく。それらを見聴きし、それらで遊び尽くすと、大人顔負けの知識を蓄える子も現れる。そこまで行くと、知識として見知った列車や車に、どうしても実際に乗ってみたいくなるのは、必然の流れである。

当時四歳だった三男の列車への興味と関心の示し方も、まさにそうだった。例えば、近所のスーパーに買い物に行く時がそうだった。店までの路の途中にある、警報機付きの踏切に差し掛かると、いつも足どりが重くなっていた。踏切に近づくとつれて、ゆっくり歩くでもなく止まるでもなく、グズグズし始める。そのうちに、警報機が鳴って遮断機が降りはじめると、とたんに目がキラキラしてくる。

警報機に付随している、列車の進行方向を予告する矢印表示の意味が分かっているから、矢印が点滅する方向をじつと見つめて、遙か遠くから近づいてくる列車の前照灯を捜す。そして、目の踏切を列車が通過し、遠くに尾灯が見えなくなるまでの間、列車の姿を一心不乱に見守るのである。

通過列車が、自分がすでに知っている特急列車だった場合には、その愛称を連呼して、大騒ぎした。不思議なもので、踏切直前で足止めされ、舌打ちをして列車の通過を待っていたような人でも、三男の、このはしゃぎっぷりを目にする、みんな笑顔になり、一緒に列車名を唱和してくれる人までいた。

そのような日々を送るうちに、毎日小脇にかかえて持ち歩いては眺め、列車の名前をひとつひとつ指差しては読み上げた結果、角がとれてぼろぼろになった、全国の特急列車の写真が満載された絵本を、完全にマスターしてしまうと、父の書齋に忍び込んで本棚から取り出す鉄道雑誌の種類も変わってきた。それまで手当たり次第だったものが、特定の雑誌をきまって取り出すようになってきたのである。なかでも、「夜汽車で旅立つ」「汽車旅と食」「レールの旅、果つるところ、終着駅」は、なぜかお気に入りの一冊となり、三男の手垢で、表紙が光るほどになった。

特に、「汽車旅と食」と題された特集号がお気に入り、表紙には列車を背景に、駅弁の立ち売りをするおじさんが写っていた。

来る日も来る日もこの雑誌を開き、「これなあに」「あれなあに」を繰り返した。おかげで、森駅の「いか飯」、横川駅の「峠の釜飯」、富山駅の「鱒のすし」、新潟駅の「雪だるま弁当」、明石駅の「ひっぱりだこ飯」、小淵沢駅の「元氣甲斐」

など、写真をひと目見て解説できるまでになり、自然な流れで、食べてみたいと言いつつ出すようになった。

駅弁の中でも売れ行きが特に良いことで知られる、北海道の函館本線・森駅の名物駅弁「いか飯」を手始めに、長野行きの北陸新幹線開業前夜の、信越本線・横川駅の「峠の釜飯」、北陸本線・富山駅の「鱒のすし」や、鹿児島本線・折尾駅の「かしわめし」、そして、ユニークなお弁当容器で知られる、山陽本線・明石駅の「ひっぱりだこ飯」や、上越本線・新潟駅の「雪だるま弁当」などを、出張時などの駅頭で手に入れたり、物産展に出かけて行つては購入したりして自宅に持ち帰つては、三男とともに味わった。

思いつくままにその味を、駅弁ガイドふう順に並べていくと、小ぶりのイカにうるち米ともち米を詰め込んで、醤油ベースの煮汁でふつくと煮込んだ、「いか飯」の丸々とした姿。人気の源となった益子焼でできた容器の中に、鶏肉・ごぼう・椎茸の炊き込みご飯を詰めて、その上に真っ白なウズラの卵と紅シヨウガの「紅白」と緑色のグリーンピースを二粒のせた、「峠の釜飯」。曲げ輪っぱ風の樽の中に敷き詰められた笹の間からのぞく、鱒の身の色のオレンジ色の鮮やかさとすし飯の甘酸っぱさが、食欲をそそる「鱒のすし」。鶏そぼろと錦糸卵と海苔が、ごはんの上に載せられた三色のアクセントとなるように彩りよく盛られた「かしわめし」。タコツボを模した深い容器の中に、あなごの炊き込みご飯に錦糸卵を

敷き、さらにその上に野菜の含め煮と椎茸とともに、タコの足がでんと載せられている、香ばしい「ひっぱりだこ飯」。そして愛らしい雪だるまの形の容器につめたご飯に鶏そぼろ、蒟蒻や椎茸の煮物、ウズラの卵などのおかずを配した「雪だるま弁当」。

入手困難な有名駅弁であった中央本線・小淵沢駅の「元氣甲斐」新宿駅地下連絡路で店を開いている駅弁屋さんにお願いで、ついに手に入れた。午後の販売に合わせて、小淵沢駅で積み込まれ、新宿駅まで運んできてもらったもののひとつを、東京出張の折りに購入して、夕方の東京・羽田発の飛行機で自宅に持ち帰ったのだが、その時の三男の表情は、今でもありありと思い出すことができる。

私の帰りを、お昼寝もせず、「汽車旅と食」を繰り返しながら、いまかいまかと待っていた三男は、八ヶ岳のイラストを前に走るSLがあしらわれた包装紙で包まれた、憧れの駅弁を目前にして一瞬絶句した。そして、弁当箱を裏返して包装の裏側を確かめるや、

—「ゲンキかい」という名でコンニチハ、天下分け目の二段重ね—

という印刷された惹句をスラスラと読み上げ、いとおむようにして包み紙を破いて、二段重ねになった弁当を開いた。平仮名はともかく漢字の読みまでは教えていないので、丸暗記しての暗唱であろうが、それにしても幼子の一生懸命さに

は舌を巻く思いがする。

上段は、クルミの炊き込みご飯を主とした、京風の懷石料理、そして下段は、栗とシメジご飯の関東風料理である。最初に口に入れたのは、タクアン、その隣に詰められていたアスパラの豚肉巻であった。蓮根のキンピラ、鶏肉の味噌和えと続き、落と椎茸と人参のうま煮と食べていき、栗とシメジのおこわをほおばった。ヤマメの煮つけは苦手なようで、ワカサギの南蛮漬けとともに残してしまった。食べていくうちに、興が乗ったとみえて、雑誌で仕入れた蒟蒻を披露してくれた。自分が箸でつまみあげた、タケノコのような切り口を見せるアスパラの豚肉巻や栗の煮物を、雑誌のお弁当紹介欄にある、おかずの写真と見事に一致させ、「栗とシメジのおこわ」の写真を指さしながら、自分が実際に食べた下段の箱がそれだった、と教えてくれた。

三男の弁当三昧の時間につきあう私にとって、何よりの「香の物」は、三男が披露してくれる雑誌やビデオで仕入れた蒟蒻であった。何度聞いても飽きることはなく、繰り返されるたびにその語り口は新鮮で、駅弁をいただく食卓には、どうしても欠かせないものであった。

漱石の「草枕」ではないが、これら「名物」駅弁と「幕の内弁当」との差について考えてみた。それは、ご飯であることに気づく。名物駅弁は、いずれも炊き込みご飯か寿司飯をベースにしており、定番の幕の内のように、結び飯ではない

のだ。

この分野を網羅した、本山荻舟による「飲食事典」には、「幕の内弁当」について、こう書かれている。「結び飯に、ツマミ物と称する汁気のない料理を添えたもの。結び飯は、小さく長方形に作るのが定式で、花形などに押しぬくのは上々ふう。」

とある。結び飯には黒ゴマをまぶし、汁気のない料理として、卵焼き・かまぼこ・椎茸・香茸・焼イカ・鶏のうま煮・栗の含め煮、などが例示されている。私たちの世代が、列車の中で食べてきた駅弁には、決まって焼き魚と卵焼きとかまぼこが入っていたので、この当時の駅弁は、まさに「幕の内弁当」だったのだ。

駅に次々に急行列車が到着するたびに、重い駅弁をのせたケースを肩から下げたバンドで支えながら、車窓そばにまで売りに来た、立ち売りの弁当屋さんから、窓越しに争うように駅弁を買い求めている時代は、今は昔のこと。窓の開かない特急ばかりになってから駅弁は、停車中の駅ホームの売り台や、車内販売のワゴンから買うものとなった。さらに最近では、駅のホームにまで進出したコンビニエンス・ストアで、電子レンジで瞬時に温めなおされた駅弁が買える時代になった。

私たちの子ども時代、周囲の大人たちが駅弁を食べる姿を思い出すことがある。かなり多くの方々が、薄く切った拍子木のように反り返った弁当のフタに、こびりついて乾燥しか

かっているご飯粒をひとつひとつ、丁寧に箸でつまんでいたことを思い出す。それを食べ終えてからでないと、お弁当本体に手をつけないのだ。たまに豪快に本体から食べ始める人もいたが、そういう人は、お弁当を途中で投げ出してはお酒に走っていたように思う。

たまに、ご飯が汗をかいているお弁当にあたることもあった。そういうお弁当は、ほんのりと暖かく、フタについたご飯も、お箸ですぐに取れ、本体のご飯も、もっちりとしておいしかったことを記憶している。

私の数少ない旅行の経験から推論するのは気恥ずかしいのだが、「客にうまい弁当を食べてもらおう」という全国の駅弁屋さんに、代々受け継がれてきた目標は、「冷めても美味しい御飯の追求」だったと思えてくる。「幕の内弁当」の定番のおかずが、焼き魚・卵焼き・かまぼこ大差なかった時代、人々が駅弁に求める味の主役は、ご飯だったのではないだろうか。炊きたてのご飯の味には大きな差を出しにくい、冷めても美味しいご飯の追求は、高品質のお米を使い、炊き方を工夫するなど、高度の技術が必要としたのではないだろうか。

駅弁における「冷めても美味しい御飯の追求」は、「冷めたあとの御飯をもう一度美味しくする工夫」という、まったく別のかたちで実現することになった。全国の津々々らうらは、はては、駅のホームにまで進出した現在のコンビニエンス・ストアでは、「お弁当、温めますか？」の問いにうなずくだけ

で、温かいご飯をたべることができるのだ。

三男が雑誌で仕入れた蘆薈を聴きながら、一緒に食べる駅弁は、噂に違わず美味しい。だけど、何か物足りなくて、三男と顔を見合わす。列車の振動が足りない。機械油の匂いもしない。車窓風景も見えない。やっぱりこれらがないと、旅の気分という、駅弁に隠された最高の隠し味が活かされないのだ。

互いの思いが同じだと、話は自然に落ち着くところに落ちて、実際に列車に乗ってみようということになった。そうなる話の進むのは早い、そうした話は時として大きくなりがちである。駅弁を食べることはもちろん、車内での時間も十分に楽しみたい。

さりげなく三男の様子を見てみると、どうも近ごろは、寝台特急にご執心のようなのである。寝台特急といっても、いろいろある。手もとにある、一九九五年版の「二五時の時刻表」という資料を読むと、北は稚内から、南は西鹿兒島まで、各地で夜行列車が走っていたことが分かる。

二五時といえば、日付が変わってあたりが深閑としてくる、午前一時のことである。夕刻に発った列車を、終電代わりに利用する区間乗車の人の大半は下車して、夜汽車は本来の表情を見せ始める頃である。停車駅はぐっと減ってゆき、夜汽車の中では大半の人が眠りに就くなかで夜の中を走る道中も終着駅まであと数時間を残すのみである。

北海道には、一一本の列車が掲載されている。北から順に「利尻」「オホーツク」「おおぞら」「ミッドナイト」「はまなす」、そして「北斗星」の列車たちである。ちなみに、それから一九年後にあたる二〇一四年（筆者註：当時）の今も運転されているのは、この列車群の中では「はまなす」と「北斗星」の二本のみである。

乗る列車は、思い切って「北斗星」にしようと思った。

「北斗星」に乗るとして、「上り」「下り」のどちらがよいのだろうか。「上り」列車を選ぶと、終着の上野駅には、午前中に到着する。先にお目当ての「北斗星」に乗ってしまうと、帰りの列車に乗り込むまでの間、首都圏を縦横に走りまわる、選択の自由がありすぎるほどの列車の中から、次に乗るべき列車を決めていくのは、なかなか大変だ。

「下り」列車なら、どうだろうか。上野駅までの往路には東北・秋田・山形新幹線を選ぶとして、それに接続する列車群は、特急「はつかり」号のほか、快速「海峡」号とを組み合わせることで、バラエティを持たせることもできる。首都圏を夕方に出て、朝、北海道の景色の中を走る頃に目が覚めるといふ、「下り」列車が望ましい。

そうすれば、首都圏への往路には、在来線の特急「はつかり」号と一九九七年に運転が開始されたばかりの東北秋田新幹線のニューフェース「こまち」号との組合せがいいだろう。両方とも、三男が乗りたがっていた列車だ。ここまで決まれ

ば、あとは早い。私の勤務の調整をお願いし、指定券を予約し、着々と準備をすすめる。

新体験の列車に三本も乗り、その中に念願の「北斗星」が含まれているとのことを聞かされた時の、三男の表情は今も忘れ難い。「北斗星」に乗れるのだ、ということに嘯みしめるように一瞬沈黙したあと、お気に入りの写真絵本の該当ページを、しずかに開いた。あとは、滔々としていつもの蘊蓄の披露が続いたが、幼な心に滴りこんだ乗車できるという吉報と、「北斗星」で過す喜びの予感が、そうさせたものだろう。

そして、出発の日の朝を迎えた。前夜、いつもは妻を手こずらせる入浴も、

「電車のひとに、クサイって言われたら、乗せてもらえないかもしれないよ!？」

の、ひと言が効果できめんで、きちんと湯船につかって、石鹸で体を洗っただけでなく、苦手な頭のシャンプーもさせてくれた。パジャマに着替えるや、宵っ張りもきっぱりあきらめておふとんに直行した。おふとんに入るやいなや、寝息をたて始めた。かえって私のほうが拍子抜けして寝つかれず、明日の旅程を時刻表で確認したり、乗車券・特急券や寝台券をめくっていると、三男の声が聞こえた。どうも寝言のようであるが、その口元に耳を近づけてみて、思わず自分の頬がゆるむのがわかった。

「よんはちご……」。

「ディー・ディー……」。
こう、しゃべっていたのだ。

「よんはちご」とは、一九九六年に特急列車の「はつかり号」用にリニューアルされた、四八五系電車のこと。初雁（はつかり）が飛ぶ稲穂をイメージした黄色い前面塗装のなかに、鳥の姿をかたどった液晶がはめ込まれ、海峡をイメージした深い青色の帯が、車両前面から側面の窓の下にかけてスカートをかくようにして伸びている、当時としては斬新なデザインで、話題を集めた車両である。

「ディー・ディー」とは、DD五一型・ディーゼル機関車のことで、客車列車の牽引に使われる。寝台特急「北斗星号」の場合、編成が電源車を含めて一二両と長いために、この気動車を二両つらねて（重連）牽引しており、その迫力ある走りっぷりで人気の機関車なのである。

三男はひと足先に夢の中で、この有名車両への乗車を果たしていたらしい。

翌朝この時のことを聞いてみるが、もちろん覚えていなかった。

「はつかり一〇号」と「こまち一六号」という二本の特急列車を乗り継いで、上野駅へ到着した。乗るべき「北斗星一号」の発車時刻は、一六時五〇分。まだ陽は高く、待ち時間を利用して、近くの上野動物園に足をのばすことにした。新幹線の到着する地下ホームから、長いエスカレーターを乗り

継いで、地上階に出る。「北斗星」が発車する、上野駅の地平ホームのひとつである二三番線の脇を通って、動物園に至近の出口である「公園口」を指してぶらぶら歩く。

三男が歩を止めて、私の手を引く張る。見つけたのは、鉄道の車輪を模した鑄鉄製の円盤に、文字が刻まれたもので、石製の台座に乗っているモニュメント。石川啄木の歌碑だ。

ふるさとの 訛なつかし／停車場の 人ごみの中に／それを 聴きにゆく 啄木

と、刻まれている。三男は、その文字を、

「ふるさとの ●●なつかし／●●しゃ●●の ひとつみのなかに／それを ●●にゆく」

と、読み上げた。

ひらがなをマスターして、一部の漢字も読めるようになってたようだ。「中」と「人」を読めるのはいいとして、「停車場」の中に隠れている「車」のひとつと文字を見つけだすとは、あつぱれである。きつと、その文字は、読みなれた「電車」の中にあるひとつと文字と同じなのだから、「しゃ」と読む、と考えた結果なのだろう。

動物園を楽しんでくれるかと思いきや、興味を示したのは、東園と西園との間を結ぶ、モノレールだった。頭上高くを走る、見たことのない乗り物だから無理もないが、せっかく動物園に来たのに、という思いと、さすが鉄道一直線の心意気、とたたえる気持ちとが半々の、複雑な気分で乗車券を購入し

た。

上野動物園モノレールの営業距離は、東園・西園間のわずか三〇〇メートル、所要時間は一分余り、というミニミニ交通機関であるが、「上野懸垂線」という正式名称を持つ、鉄道事業法に基づいた、れっきとした「鉄道」である。運営は東京都交通局であるから、都営地下鉄、都電荒川線や都営バスと同列の輸送機関なのである。地下鉄と異なるのは、2歳以上の子どもは、運賃が必要なことである。ともかくも、これに乗って西園との間を往復することにした。

サル山の近くにある東園駅を発車すると、すぐに九〇度ぐらいの急角度で右にカーブする。進行方向右側に子ども動物園のステージを見おろし、左側に不忍池を瞥見すると、すぐに西園駅である。乗車時間にして五五秒、時速一八キロメートルで移動するミニ鉄道の旅であつた。

上野駅に戻って、まずは駅弁を購入する。三男は「あなご弁当」を選び、私は「梅じそおこね弁当」を手にした。動物園への往路で見つけた歌碑のそばを通って、上野駅の地平ホームのひとつである二三番線へと向かった。このホームから、「北斗星」が発車するのだ。一六時二八分という入線予定時刻を少し過ぎた頃、「北斗星一号」の青く塗られた車体が、後ろ向きにしずしずと入ってきた。まわりでカメラを構えて待機していたファンが、パチパチと一斉にシャッターを切る。さすが、注目の列車といったところである。

予約していた四号車に乗りこんで、指定された個室に向かう。この車両には、『デュエット』という二人用個室寝台がならんでいる。ここは、編成の中央（七号車）にある食堂車にも、シャワー室が備えられた六号車にも近く、何かと便利な位置にある。

『デュエット』の構造を簡単に言えば、二階建ての変形で、上向きの凸とこれを上下逆さまにした下向きの凸とが、パズルのように交互に組み合わせられたものである。断面図で見ると、枕木方向に上下に寝台が配置されているが、上下の寝台は仕切りによって完全に分離されており、中に入ってみるとふたつの寝台が室内通路を挟んで向かい合っているという、よく工夫された設計である。私たちが確保できたのは、下向きの凸である上段の部分で、上向きの凸である下段の上、天井裏のような部分にある。室内に階段を抱え込んだような構成で、入り口の扉を開けるとすぐに五段ほどの階段があり、そこを上ると小上がりのようなところに続き、この小上がりをはさんで、天井近くに寝台が枕木方向に並ぶという配置になっている。

予約時には、床面が廊下につながる平坦な寝台の並びである下段を希望していたのだが、確保できたのは上段の『デュエット』であった。下段を希望したのは、三男の寝相を心配してのことであったが、人気のチケットだけに、入手できただけでもよしとしなければならない。乗りこんでみると、上

り階段から続く、小上がりの部分には、意外に余裕があり、大人ふたりが向かいあって座ることができる広さがある。寝台をはさんで、天井の円みに沿った窓が設えられており、高い位置からの展望も楽しめる構造になっている。三男の身長なら、窓に近い方に枕を置けば、横になっても足先は小上がりから階段に移るところの前あたりに来ることになり、寝台から下に落ちることはなさそうで、ひとまずは安心した。

荷物を置くやいなや、三男に手をひかれてさっそく車内探検に出かける。三号車、二号車と個室の並ぶ通路を通り過ぎると、おなじみの二段式のB寝台車である。この車両では、上下二台の寝台が向かい合って配置された四人分のオープン式コーナーで、寝台と通路との間を隔てる仕切りはない。この車両が一号車、編成の最後端である。窓から外をながめると、立ち食いソバ屋や弁当販売のワゴンが並んでおり、ホームが最も深く切れ込んだあたりに位置することになる。後ろ向きに入線してきたのだから当然なのだが、最後尾の窓から、今は売店の窓しか見えないが、発車する時に後方に流れ去る上野駅を見送る際は、きつと絶景が展開していくにちがいない。

一号車から取って返して、編成の反対側、一号車の方にむかって戻る。ちょうど四号車に戻ったところで、車掌さんに出会う。寝台券を渡して検札が終われば、カードキーをもたえるものとはかり思っていたが、この四号車の個室は、す

べてデンキ・ボードによる施錠方式であるという。

個室が並ぶ五号車の隣は、シャワー室のある六号車。三〇分刻みの利用時間が設定され、二室ある。その隣には食堂車、発車してすぐの一七時三〇分から、第一回目のディナーがはじまる。シャワー室の利用券はここで売っている。利用時間を指定しなければならないが、遅い時間はすでに売り切れ、二〇時からの三〇分を利用できる券を買った。この券は、北斗星のエンブレム付きの見栄えのするもので、利用後は持ち帰り可とのことで、先ほどのカードキーの代わりができたこと、ふたりして喜んだ。

八、九、一〇号車と豪華個室が並び、先頭端の一一号車は、一号車と同じ・おなじみのオープン式の寝台で、その前には電源車がうなりをあげている。第一回目のディナータイムが始まるまでに、食堂車を通り抜けて、今夜の宿となる四号車に戻らなくてはならない。

一六時五〇分、軽い衝撃の後、「北斗星一号」は、ゆっくりと動き出した。徐々にスピードを上げていって、うす暗い地平ホームから抜け出すと、周囲は一瞬のうちに明るくなり、カーテンの向こうに燦々と降り注ぐ陽光に目がくらむ。夜行列車に乗っていて味わうこのミスマッチは、なんとも楽しい感じがする。

上野駅発車の興奮にひたっていた三男は、いつもの蘊蓄を披露することなく、いつの間にか舟をこぎ始めて完全なお眠

りモードである。ここでゆっくりお弁当を食べて、二〇時からはいっしょにシャワーを浴びるという目算だったが、新しい体験の連続は、大人でも気が張るもので、興奮の嵐がおさまれば、猛烈な睡魔が襲ってくるのは当然である。ここは、ゆっくり寝かせてあげようと、寝台に連んでやすませた。

その寝顔を見ながら、外を見ると、列車は間もなく最初の停車駅である大宮に着くところであった。時刻はまだ一七時一五分。窓辺にホームの屋根がゆっくり流れてくると柱があらわれ、列を作って並ぶ通勤客の帽子が見えてくる。高いところからみると、ホームからの眺めが、いつもとちがう。通勤客の立ちならぶ見慣れた光景だが、車両の天井近くの窓から見おろす視角の高さが新鮮である。

列車は関東平野の真ん中にさしかかり、夕陽を浴びた利根川の流れが窓を横切る。高い位置からの眺めは、なかなか素晴らしい。夕映えから、黄昏を過ぎて、夜のとばりが降りはじめると、上野駅で求めた「梅じそおこわ弁当」を食べ終えた。窓外に移り変わる景色を食前酒として、卵焼き・焼き魚・野菜の含め煮・鶏肉のごぼう巻が添えられた、梅じそのさっぱりした味がこちよい、おこわをたいらげた。

都会の風景に別れを告げ、寝台特急「北斗星一号」がようやく夜汽車としての装いを整えはじめた一九時過ぎ。郡山駅を過ぎたところで、三男が起き出した。不覚にも眠り込んでしまった時間を取りもどすように、「あなご弁当」に手をつけ

始めた。大ぶりのアナゴが蒲焼ふうになんて仕立てられて、錦糸卵の上に載っており、その下のご飯にたれがしみ込んでいてという美味しそうな弁当であるが、三男はアナゴを半分と錦糸卵の載ったご飯をひと口食べ、茄子の漬物をかじったところで、突然寝台の上に立ちあがった。

すわ、おしっこか？何ごとか？

と、心配してたずねると、「シャワー！」とのひと言。二〇時から予約した、「シャワールーム」の使用時間のことを覚えていたのだ。

時間は一九時四〇分、あと二〇分しかない。大急ぎで三男を手伝ってアナゴをたいたら、六号車に急ぐ。六号車には、椅子のならんだロビー室があり、その一隅には、公衆電話ボックスと、AとBふたつのシャワー室が備えられている。

A室が空いていた。中に入って、「シャワールーム」案内という掲示を読む。

上から順に、緑・黄・赤のランプがタテに並び、それぞれの右側には、「シャワー営業中」・「シャワー利用可能」・「シャワー準備中」とある。待ちきれない三男が、まずズボンとパンツをいっしょに片足ずつ脱ぎ、上着とシャツをまとめて引っ張って脱ぎ去っている。

ここは急がねばならない。指定の場所にシャワーカードを通し、自分はパンツ一枚になり、三男といっしょにシャワー室に入る。正面にはタイマー表示、その左側に赤と青の小さ

な押しボタンがある。下に温度調節のダイヤル、右にはシャワーヘッドがある。シャワーカードの有効時間三〇分のうち、シャワーのお湯の出る時間は六分間だけで、残りの時間は着替え等にあてられる。また、青のボタンを押すとお湯が出て、赤のボタンで止まるようだ。途中「一時停止」の赤ボタンを使えば、身体と頭を洗って泡を流し、体を暖めるには、六分は十分な給湯時間ということなのだろう。

おそろおそろ青のボタンを押して、流水を掌に受けてみる。大丈夫だ、あたたかいお湯だ。寝台車に蓄えられているお湯のタンクの大きさがどれほどかわからないが、食堂車のディナー・タイム真っ盛りの今までの時間で、このシャワー室が使われた形跡はないので、給湯が途切れたり、お湯の温度が下がることはきつとないだろう。その六分間だけは、私たち親子二人だけが入ることができる、夜の「東北」大陸を突っ切って走る「温泉」なのだ。

待ちかねている三男の身体を洗い、持参してきたシャンプーハットを被せて、苦手な頭髪のシャンプーをすませて、バスタオルで頭をふくと、くすぐったがって逃げ回る。やつのことでパジャマに着替えさせる。タイマー表示は残り一分三〇秒。残る時間で私もシャワーを浴びることにして、シャワーヘッドを手取る。シャワーの当たるところから、これまでの疲れが溶けだすような心地が始めた矢先、いきなりブザー音が鳴り響いた。

「緊急事態発生！」の合図ではなく、「使用できる残り時間は、一分ですよ！」を知らせる合図のようだ。気を取り直してお湯を出す、今度はいきなりお湯が止まり、残り時間表示がゼロになってしまった。訳の分からないままに急いで身体をふき、更衣スペースにもどって、寝間着代わりのジャージを着る。

あとで分かったことだが、残り時間に余裕があっても、うつかりドアを開けるとそこで残り時間がゼロとなってしまう仕組みのようだ。三男がドアを開けていたのだ。

隣の「ロビー室」のソファに腰かけ、ふたりして苦笑いしながら、髪の毛をふいて乾かす。

四号車の自分たちの部屋に戻るのだが、ふたりとも食堂車が気になって、落ち着かない。二二時を過ぎると予約制のデイナー・タイムは終了して、それからの約2時間は、予約不要のパブ・タイムとなる。どちらからともなく行つてみようかということになり、着替えて食堂車に向かう。

パブ・タイム早々に座席は埋まってしまう。うわさ通りの人気列車なのだというのを、あらためて感じる。席を確保してメニューをながめてみるが、食事は、ビーフシチューセット、煮込みハンバーグセットといった、デイナー・タイムに入れなかったお客さん向けの、いわば救済メニューが中心である。飲みものも、ワインやビールをはじめとするほろ酔いメニューが中心で、おつまみも、チーズやソーセイジの盛

り合わせである。子どもといつしよに、二二時過ぎに食事をする、こと自体に無理があるのだが、それにしてもメニュー選別に苦心する。

やっと、マルゲリータ・ピザを選んで注文した。イタリア王妃が、「バジリコの緑、モッツアレラチーズの白、トマトソースの赤が、イタリア国旗のよう」と絶賛したとされる、ナポリピザの代表だが、周囲の酔客の間でわき起こる「乾杯」の声の中で、ひっそりとふたりして口に入れていった。テーブルの窓際には、カットグラスを組み合わせたダイニングライトがあり、列車の振動で揺れるたびに、窓に映りこむ、滲んだような光の輪郭が揺らぐ。

にぎやかな周囲の喧騒のなか、食堂車の広い窓の中には、闇に沈んだ仙台平野が広がり、光の帯となった上り列車と時々すれ違ふ。車窓に点滅する警報機の赤色が映ると、周波数が高く短い、急ピッチの警報音が近づいてくる。そして踏切を渡ると、その車輪の音に隠れるようにして、警報音の周波数が急速に低まっていくな。灯りに照らし出された、小駅のホームが忽然と現れては、周囲の闇の中に溶け込んでいく。

「このままずっと、ここでこうしていたい」との誘惑に駆られるが、ピザの皿はきれいにたいらげられ、いつまでもそうし続けているわけにもいかない。ふたりして重い腰を上げて食堂車を出、ロビーカーを経て、今晚のねぐらとなる四号車へと向かう。途中にあるシャワールームは二つともふさが

り、ロビーカーのソファも満席となっていた。慌たしいシャワー室利用であつたが、三男の言うとおりにしておいてよかつたなと思う。

繁華街から迷い込んだ小径のように減光された通路を、三男の手をひきながら四号車にまでもどる。三男は先ほどぬいだバジャマにもう一度着替え、私もジャージー姿に戻る。並んだ寝台にそれぞれが寝そべって、時々顔を見合わせながら、どちらからともなく、目まぐるしかつた今日一日のことを話す。

レールの継ぎ目を渡るたびに発せられる軽快なジョイント音に、一瞬のうちに通過する踏切の警報音がときに交錯する。部屋天井への曲線にそっくりぬかれた窓から、外の景色を見上げる。当然のことだが、窓枠いっぱいには、その隅々にまで夜空が広がり、通過する駅舎の屋根が時おり見えるだけである。互いのおしゃべりの口数が減つていき、いつしか二人とも眠りに落ちた。

二時一一分の仙台駅到着はかすかに覚えていたが、二時三分から二二分にかけて行われたはずの青森駅での機関車付け替えも知らず、眠り込んでいた。「ゴーツ」という、切れ目のない高いピッチの連続走行音で、目が覚めた。横になつた寝台の平面が、進行方向にわずかに傾いている。車窓とは見れば、白い霧のようなもので、いちめんおおわれており、湿度の高い青函トンネルに突入して間もないことを示してい

る。

疲れて目が覚めないほどであつたら無理をしないで眠つたままでも通過しようと思つていた青函トンネルだが、高い、うねるようなレールの走行音で起きることができた。あと一五分ほどで、トンネルの中央部を通過するのだが、そこにちよつとした見ものがある。三男の様子をうかがうが、熟睡しており、少し揺すつたくらいでは起きそうにもない。ふたりで、列車の進行方向左側に展開するはずの一瞬の出来事を体験したいのだが、どうも無理そうである。私たちのいる個室寝台の窓は、進行方向右側の高い位置にしつらえられており、寝台で寝ながらにしてそれを見ることは、まず不可能である。

通路へと続く短い階段を下りたところにある、個室のドアを開けたままにしておけば、中の三男の様子をうかがいながら、車窓左に展開する光景を見ることができそうである。

三時〇三分、列車はトンネル中心部の青森側にある竜飛海底駅を通過した。あと九分ほどで、全長五・三九キロメートルの青函トンネルの中央部である。息をひそめるようにして、その時をじっと待つ。

三時一二分、青と緑のライトの点滅が続いて、三時一六分、トンネルの壁面に設置された、歓迎の電飾サインが窓辺を流れる。まず、「青森ねぶた」の武者絵があらわれ、次いで「大通公園の噴水」と「スズランの花」が続く。本州と北海道をへだてる津軽海峡は、今まさに乗客たちの頭上にある。三男

とこの瞬間を分かち合いたかったのだが、一向に起きてくる気配はない。

三時一八分、北海道側にある吉岡海底駅を通過し、

三時三四分、全行程四二分で、列車は青函トンネルを走破して、北海道側の玄関口である、知内町湯の里の野に顔を出した。

白みはじめた空のなかに、函館山の黒々としたシルエットが浮かび上がる。函館駅までは、もう一息だ。夢の中の三男を起こして、下車しなければならぬ。

四時二四分、未明の函館駅に到着した。起きるまではぐずっていた三男だが、機関車付け替えの時に発せられる、「ピーーツ」というホイッスルを聞いた途端にシヤキツとして、私の手を引っ張るようにして、ホームにおり立つ。青森からここ函館までお世話になった、青函トンネル専用の電気機関車である「ED79型」が切り離され、かわって連結されるのが、お待ちかねの「DD51型」気動車である。二両がつながる重連運転で、ここ函館から札幌までの三・一八七キロメートルを、四時間余りの時間で駆け抜ける。

残念ながら、今回はここで「北斗星一号」とお別れだが、この「DD51型」には、近いうちに三男を連れて乗ってみる予定である。

「北斗星」とともに一夜を過ごした後から、三男の遊びは一変した。

そのさまを、どう表現すればいいのだろう。「自分の眼の前に起きつつあることを、自分の五感を総動員してしっかりと見て、その出来事を中心にある何ものかに触れて、それをしっかりと捕まえた体験」とでも言うべきものが、三男の遊びのかたちを変えてしまったのだった。

それまでのビデオ視聴や、絵本や雑誌の読み聞かせ・読み上げといった、言わば「静的」「間接的」なものから、身の回りにあるおもちゃや、場合によっては家の中の小物を総動員しての、「動的」なものへと、ダイナミックに変貌したのである。

「北斗星」の乗車で、その実物の空間を体験したロビーカーを例にとると、おもちゃのブロックを組み合わせてまず「シヤワー室」を作り、粘土をこねて作り上げた「ソファア」をとなりに並べ、積み木でドアをこしらえる。車両の外壁は、段ボールを持ってきて、まず窓をくりぬき、出入り口のドアを模した切り込みを入れる。その中に、先に作った「シヤワー室」や「ソファア」を入れようとするのだが、窓より大きい「ソファア」や、出入り口より大きい「シヤワー室」が入るわけもなく、試行の果てに、ついにはバラバラになつてしまふ。かんしゃくを起こして壊してしまうこともあったが、それを繰り返していくうちに、「シヤワー室」と「ソファア」の外側に段ボールの壁を建てることを覚えて、これを、車輪がついた、積み木収納用の木製の箱の上に載せるようになって

た。

たまたま、この積み木入れの箱の前方には、二つの穴が穿たれていたが、三男は、この穴にひもを通すことを思いついたらしく、愛用の三輪車の後ろに、「シャワー室」と「ソファ」を備えた、段ボール製の特別寝台車両をくくりつけることで、曲がりなりに三輪車との連結運転が出来るようになった。

さらに驚いたのは、そのような経過をたどって出来上がった、自家製の「北斗星一号」を駆使して遊ぶさまが、きわめて具体的で細部にまで目配りの届いた、まことに堂に入ったものなのである。

まず、自分で作った特製の「北斗星一号」の周囲をひと回りして、あちこちを指さして歩く。始業前の指さし点検のようである。

次に、三輪車を指さして「ディー・ディー」と叫び、幼稚園の帽子をかぶって、笛を吹き、おもむろに三輪車にまたがる。私たちが乗車した「北斗星一号」を牽引したのは、実際には上野く青森間がEF八一型、青森く函館間が青函トンネル専用のED七九型の電気機関車であり、三男の言うDD五一型のディーゼル機関車は、函館く札幌間で運用されるのだが、未明の函館駅で見た機関車の付け替えがよほど印象深かったのか、「ディー・ディー」と叫びながら、三輪車にまたがって、部屋の中を走りまわった。部屋を一周しては、障害物

があると、「カンカンカン！」と言いながらその前に三輪車を止め、私のほうを見て、その障害物をどけるよう促していた。

三輪車を降りて野球帽をかぶると、今度は「きつぷをお願いします。」と言って、見物する私のもとへと歩み寄る。車掌さんに早変わりである。

切符の検札には、おもちゃのハサミで応じ、テレホンカードにマジックで「北斗星」のしるしを書き込んだ、これまた手製の「シャワーカード」を販売する。「おいくらですか?」とたずねると、「さんびやくじゅう円です。」と答える。私が食堂車で購入した「シャワーカード」の値段をしつかり覚えていたらしい。

しばらくすると、部屋の電気を暗くして回る。食堂車からの帰りに、寝台の通路の電気を落として回っていた車掌を見かけたことで、「単なる真似だけではない本ものの手ざわり」を感じ取って、「自ら体験することの大切さ」を知った、などと、言葉で表現しようとするけれども当てはまりそうなことだが、でも、どれも違う感じがする。

そこにはかないモノやヒトの作り出す情景にナマに接することで、自分のいる世界が広がり、見聞きした情景のことがもっとよく分かるようになるということ。

それは、見たものをありのままに写しとる能力と、それを「育ち」の力として形あるものにして表現する能力のあらわれ。無理やり言葉にすれば、そのようなところだろうか。

フランスの社会学者であるロジェ・カイヨワは、その著書として知られる「遊びと人間」の中で、子どもの遊びを、四つの類型に分類した。「アゴーン（競争）」「アレア（偶然）」「ミクリー（模倣）」「イリンクス（めまい）」がそれで、遊具や身近な遊びなどもこの範疇に属し、その発展系として、大人も夢中になるゲームやスポーツが位置づけられるという。

その中で、「アゴーン」の例として「かけっこ」、「アレア」には「じゃんけん」、「ミクリー」には「ままごと」、「イリンクス」には「ブランコやメリーゴーランド」がそれぞれ示されている。子どもの手による模倣の対象は、実際問題としてなんでもよく、周辺の生活をまねる「ままごと」から、テレビ番組の登場人物への移入、動植物や乗り物などへの変身など、その類型は多岐にわたる。

三男の「北斗星」づくりは、まさに「こっこ遊び」であり、カイヨワ分類の「ミクリー（模倣）」に該当するのだろうか、一步踏み込んだ見方をする、さまざまな資料等で事前に得た知識が、実際に自分の眼で見た、モノの動きやヒトの行動によって堅固に裏打ちされ、自由な空想力という揚力を得て、私の前で伸びやかに展開されたのであろう。

言い方をかえれば、自分の眼で見た事実の重しをつけられた「こっこ遊び（模倣）」は、ビデオや雑誌などで得られたバーチャルな知識とは比較にならない迫真性を持つということである。周辺のモノから自分が直接見たモノを再構成して、

現実の空間の中でそれを用いて遊ぶ、という行為には、一段階段を上ったような別の能力が要求されると思われる。

三男の遊びが、迫真性を備えたものへと変貌した要因のひとつが、三男の側に寄り添って事実の見聞を陰ながら支えた私であるなら、その「力」は、私の母や、私の周囲で暮らした古老たちなど、多くの人生の先輩たちが、与えてくれたものである。すなわち、周囲の方々が私を見守ることで、私の中に育まれて来た力は、世代を超えて受け継がれてゆくものにほかならない。

「育て」の力とは、きつとそのようにして伝えられるものであり、伝えられた側が「育つ」ことで、その力は世代を超えて、確かに継承されていくのであろう。

啄木の「我を愛する歌」とは何か？

水 関 清

第一章 はじめに

石川啄木の名を後世に残す力となった歌集『一握の砂』を貫くテーマは「我を愛する歌」である。「我」を「愛する」歌であるという以上、その「愛する」内容の具体像が各歌に明示されると思いがちであるが、必ずしもそうではない。例えば「我を愛する歌」の章に収載された次の歌である。

56 実務には役に立たざるうた人と／我を見る人に／金
借りにけり

143 男とうまれ男と交り／負けてをり／かるがゆるにや秋
が身に沁む

それぞれの歌の内容だけを見れば、自らが懸命になって追及してきたことが世の中に受け入れられず苦悶する一方で、頭を下げて生活の糧を確保しなければならない、という男の姿が確かに詠われており、一見すれば「我を嗤う歌」ではないかと思われる。

しかしながら、そうした心の動きを抱えながら生きている

男（啄木）の、その時々心のうちを（啄木が）詠んで、その切なさを（啄木が）いとおしんだ歌、と解すれば、これらの歌もまさに啄木のいう「我を愛する歌」と考えられる。いうまでもなく「愛する」という行為の主体は「我」であるが、「愛する」対象には、「私の行為」のみならず、それらの行為によって呼び起こされた「私の感情」も含まれており、その総体に対して、いとおしむという感情を「我」が抱くゆえに、「我を愛する」という表現が用いられるのである。

この複雑な関係を解き明かすカギは、『一握の砂』の編纂後、間を置かず上梓された歌論『一利己主義者と友人との対話』の中にある。ここで繰り上げられた、啄木の作歌姿勢の真髄は、「近代日本の生活者である我（啄木）」の心に浮かんだ「感じ」を詠うことにある。またこの中で啄木は、「感じ」「いのち」「自己」を一体のものとして捕らえており、デカルト流の「我思う、ゆえに我あり」の立場はとらない。すなわち「日常生活を送る中で、心に浮んで消えてゆく刹那々々の感じを自分の「いのち」のありようが自分の意識の中に投影されたものと捕らえ、それらをその時々「自己」と見做して、

言葉として定着させることを歌作の核心にすえたのである。

つまり、他者にも見える有機的な生命体としての肉体の中に息づく、見えない存在としての「いのち」の千姿万態を、生命体としての脳が「刹那々々の感じ」として「認識」し、歌のかたちで文字に定着させるのである。さらに「自己の認識」すなわち「自我」を簡潔に表現する上で、日常の言葉を用いることは有利に働き、かつ短歌という形で定着させることは、短詩形という表現方式が本質的に備える利点の活用にもつながるとしたのである。換言すれば、啄木調短歌とは、まさにその時々「行為」に付随して生まれてくる「感じ」を、「いのち」の発露として「われ」が「認識する歌」、すなわち「自我の歌」なのである。

認識や感情といった心の動きとヒトの行動との関係を、精神医学的に系統立てて検討し、一九一九年には、その理論的基盤の上に森田療法を創始して、神経質症の治療における高い実効性を証明したのは、森田正馬（一八七四—一九三三）である。その中核をなす神経質理論のひとつに、自我を、認識と実践および感情との相互作用の中に位置づける考え方があり、啄木が編み出した啄木調短歌の基本とされる、「感じ」「いのち」「自己」を一体的に捕らえる立場とも通底する。この森田神経質理論と先に述べた啄木歌論の類似性は、『ローマ字日記』の時期以降の多難な生活の中で、啄木の神経質性格が陶冶される過程で必然的に生まれたものと想定すれば、必

ずしも偶然的の符合ではない可能性が高くなる。

本論文の目的は、啄木調短歌における中心概念としての「我を愛する歌」について、精神医学的観点から論考を加えることである。

第二章 啄木における「われ」の変遷

啄木は、「われ」を愛する気分のとりわけつよい人であった。寺の坊ちゃんとして何不自由なく育った幼年時代、村始まって以来の神童ともてはやされた洪民尋常小学校時代。そして、盛岡高等小学校を首席で卒業後、盛岡尋常中学校（以下、盛岡中学）に進学した。三年生になった一九〇〇年頃から、高山樗牛の天才主義（『天才崇拜』）に傾倒していく中で個人主義に目覚め、「知識や道徳を否定し、国家からも社会からも離れ、ただひたすら自己の存在の確信とその意義の追求に邁進する」という「美的生活」を、樗牛のいう「生れながらの小児の心」で希求した。さらに、学友を通じて雑誌『明星』閲読の便宜を得てからは、与謝野晶子らに圧倒的な影響を受け、当時隆盛をきわめた浪漫主義にも心酔して詩作にふけた。四年生になると成績は下がり、ついに一九〇二年一月二十七日には、盛岡中学を五年生で中途退学した。

すぐに、文学立身の志に従って上京するものの、たちまち生活に行きつまずき、翌一九〇三年二月には挫折の中で洪民村に帰郷した。この無謀ともいえる最初の上京の傷が癒えると、

翌一九〇四年までの間に『明星』『時代思潮』などの雑誌に旺盛な詩の発表を行って、満一七、八歳の頃には「天才詩人」と騒がれるようになった。それと並行して啄木は、樗牛譲りの「天才主義」を、トルストイやニイチェらの世界観を基盤としてワグナーの思想に糾合させることで、独自の「一元二面観」へと発展させた。このようにしてはぐくんだ天才主義は、啄木の中で確固たる信念にまで姿を変えていき、自らも「天才」を自負するようになった。

一九〇五年以降も、処女詩集『あこがれ』発刊の強行、自らの結婚式の欠席、居食いの新婚生活の行き詰まりと続き、一九〇七年には浜民小学校の奔放な代用教員生活が破綻して一家離散となり、職を求めて北海道函館へ移住した後も、転職を繰り返した挙句の、妻子を顧みない釧路での半独身生活の享受など、道内を巡る目まぐるしい日々。そして一九〇八年、背水の陣を敷いて上京して小説の執筆に奮闘するものの一向に売れず、売れる小説を書いて金を稼ぎ生計の基盤を確立する、という当初の目論見はついて、自らの作家としての将来にも暗雲が漂うことになった。この間の暮らしの糧は専ら友人にたより、他人の金で生きるという体たらくであった。

これらすべては、樗牛に淵源をもつ啄木流の「天才主義」を実生活において実行した結果であり、啄木の不名誉な代名詞ともなった、あの借金生活や大言壮語であり、転職や漂泊

であった。

一九〇九年三月には、ついに「天才」の膝を屈して同郷の先輩のつてを頼って、東京朝日新聞社（以下、新聞社）に校正係としての職を得たものの、「売れる小説を書く」ことに加わるあまり、鬱々とした日々を送る中で逃げ込んだところが、一九〇九年四月から六月までの間に書き綴った『ローマ字日記』の世界であった。自らの「天才」を、それも売れる小説を書くことでしか証明できないところにまで追いつめられていた啄木は、その窮地の中で、生活資金稼ぎのために小説を書くこととしては途中で投げ出すことを繰り返し、ついに新聞社への出社自体を怠ることになった。社から得た給料は本来なら、家族扶養や入居中の下宿代の支払いなどにまず充てるべきものだが、啄木は、鬱憤晴らしのために、漁色と浪費という逃避行動に走り、費消した。

ここには、「天才なら必ず書けるはずの、売れる小説を書けないという事実」の承認が「自らの天才性は否定される」とに直結する、という観念に怯え、そこから生じる心の混乱をひたすら恐れて、事実と観念との間で延々と堂々巡りをする啄木の姿がうかがえる。「売れる小説を書けないことで生活の糧を得る道が絶たれ、食えなくなることの恐怖」という、常識的には誰もが理解し得る現実生活上の懼れでは決してない、ことに注目したい。

ついには六月一日、会社から給料を前借りしたその日に、

漁色と浪費の中でそのほとんどを使い尽くすという非常識な逃避行動に走り、さらなる窮状を招くことになった。『ローマ字日記』最終盤の日々をつづった記載によれば、この日以降「下剤を用い過ぎて弱った身体を、一〇日の朝まで三畳半に横たえていた。書こうという気はどうしても起こらなかった。(原文はローマ字、ここでは仮名漢字交じり文に変換)」という。この窮状から救い出される契機となったのは、啄木の母親であるカツが、息子の新聞社への就職を知って、同居を強行したことである。経済力のない啄木にかわって、親友・宮崎郁雨の助力のもとに、妻・節子と娘・京子をともなつての上京が実現し、家族との同居という「社会生活の実際」の場へと救い出されたのである。

ほかにも、この煉獄のような日々の中での幸運はあった。焦燥が深まって啄木の動きがとれず、『ローマ字日記』の中でも苦悩の底のような時期であった五月一七日、偶然目を通した雑誌で田中王堂の談話に接したことで、「評論の文学的価値は小説に引けを取らない」という主張を知ることになり、この談話に刺激された啄木は、二〇日までの間に力をふりしぼって評論(通信文)「胃弱通信」(全五回)を書いて岩手日報に送っている。「生きた世の中」をありのままに見るという視点を得たことで、啄木の執筆上の関心は、「売れるはずの小説の模索」一辺倒だった観念的な苦闘の段階から、「生きた世の中を見て、そのありようを評論という形で文字として残す」

という現実的課題に移っていったのである。

一〇月二日、そうした段階への移行期にあった啄木を、妻・節子の家出という衝撃が襲った。家庭生活の維持という、社会人として当然の義務を果たさない啄木の姿を、六月の上京以来見せられ続けた節子の「家出」という、ぎりぎりの選択が啄木を変えた。

狼狽のあまり友人や先輩に哀訴して帰宅の仲介を願う一方で、これまでの実生活における自らの「天才主義」の実践が、家族や友人に与えた苦悩について、おそらく初めて真剣に振り返り、反省し、これを一掃する日々の中で、先の田中王堂による「具象理想論」にふれて感服し、自己のこれからの努力の姿を映し出す鏡としつつ、「人生の真面目」を直視する大切さと覚悟を固める助けとした(一月八日付・金田一京助宛書簡)。この反省から、王堂理論の受容による家庭生活改善の意志表明までの一連の流れは、一二月になつて発表された「弓町より 食らふべき詩」の中で詳細に述べられている。すなわち、それまで依拠していた「天才主義」にかわるものとして啄木は、社会人としての義務遂行と文学的志向とを両立させた「生活の統一」を理想として見定め、具体的な日常生活を送るための指針としたのである。

「天才主義」から「生活の統一」へという、この方針への転換はその後、啄木の仕事と家庭の状況変化にともなつて、現実的な修正は加えられたものの、翌・一九一〇年三月から

の「啄木調」短歌創始の基礎となった。さらに、職場の上司である渋川玄耳に認められることにも繋がり、歌人としての将来に道が開かれることになった。また、啄木の「社会生活の実際」を見る眼は、六月に起きた大逆事件に関連して社会主義や無政府主義のことを調べていく中でさらに磨かれ、質的にも深化していった。くわえて九月一日から「朝日歌壇」の選者に抜擢され、投稿歌を通して在野の人々のものの見方を知る機会が得られるようになったことは、「社会生活の実際」を捕える視野が広がることに大きく貢献した。熟練した作歌技能に加えて、作歌の基盤となる理論体系が整えられたことで、十月にはそれを基礎にした歌論『一利己主義者と友人との対話』がまとめられた。そして、一二月にはその実践形としての歌集『「握の砂」が上梓され、人口に膾炙することになった。

このようにして啄木の中の「われ」は、『ローマ字日記』の苦闘の中で、青年時代から信奉し続けた樗牛に淵源をもつ「天才主義」に染め上げられた「われ」がまず燃え尽き、その廃墟の中で遭遇した、王堂の「具体理想主義」の摂取を経て、社会主義や無政府主義に目を開かれ、新聞歌壇の選者として大衆による詠出歌にも接することで、王堂のいう「国民生活」と有機的に結合した「われ」へとその姿を変えていった。啄木が少年時代から抱いていた「文学立志」の夢は、最後の上京時の念願であった自然主義小説作家としてではなく、啄木

流の「生活」という概念を発見して発展させていく過程の中で編み出された、深さと幅広さを兼ね備えた啄木調短歌の創始者として、あざやかに蘇生したのである。

第三章 森田神經理論からみた啄木の性格特徴（一九〇五年・自らの結婚式欠席まで）

本章と次章では、啄木の、その時々の「われ」の姿からうかがえる性格特徴としての神経質について、精神医学的に振り返ってみたい。

啄木は、一八八六（明治一九）年二月二〇日、岩手県南岩手郡日戸村の曹洞宗・常光寺で、僧侶であった父・一禎（三七歳）、母・カツ（四〇歳）の三番目の子として生まれた。当時としても高齢であった両親のもうけた、はじめての男児ということもあって、両親の溺愛と二人の姉の擁護を受けて育った。夜に突然、餅が食べたいと言って泣き叫ぶ啄木の意のままに、あたふたとそれを準備する両親の姿など、その頃の特別扱いのさまを、二歳下の妹として生まれたミツが長じて、羨望とともに詳細に語っている。

幼い頃は神童と呼ばれて名門・盛岡中学にすすみ、高山樗牛の天才主義に傾倒する一方で、浪漫主義にも心酔して学業を怠った結果、中学を退学してしまう一六歳までの経過には、神経質の性格特徴が随所に現れている。まず、こうと決めたものごとを徹底的に追及する「執着性」と「強い欲求」が

指摘できる。さらに、具体的な生活計画を欠いた、退学後直ぐの上京の強行と、その四ヶ月後の、必然的結果ともとれる挫折と帰郷からは、当時その多くが就労していた一六歳という年齢にしては、ものごとをバランスよく見ないという「観念の」幼弱性、すなわち、自己中心的なものの考え方、依存的な生活態度」の存在も、濃厚にうかがえる。

父親の庇護のもとでの療養が功を奏して詩作に励んで「天才詩人」と騒がれるようになった結果、自らもそのことを自負する一方で、樗牛に淵源をもつ「天才主義」を確立させた。その啄木流の天才主義とは、三層構造をなした強固なもので、中心にあるのが、文学的「天才」（たる啄木自身）の自負とプライドであり、その外郭には二層の「天才主義」が配置される。「天才主義」の内層には、借金癖・生業軽視・家族扶養義務の軽視・大衆を教化の対象とみる民衆観の保持などの、自らの天才実現のためには、実生活の糧を他者に依存することを躊躇しない処世観がある。「天才主義」の外層には「二元二面観」と呼ぶ啄木流の天才主義の理論的総括が置かれる。「二元二面観」とは何か。啄木によるとシヨウペンハウエルの世界観における誤謬を、トルストイやニイチェラの人生観を基盤としてワグナーの思想に糾合させることによって訂したもので、具体的には、本来なら相反する自己拡張と自己融合を愛という名のもとに統合することで、宇宙の意思（を体現する「天才」たる啄木）の「自己発展」に寄与するのだという

（『洪民日記』明治三十九年三月二〇日）。

ここには、自らが父の庇護のもとで生きている現実を直視せず、書物を通して傾倒した人物などの思索を、これまた独自の観念的な味付けをして自らの処世方針にするという、啄木の、悲しいまでに「観念」にとらわれた姿が生々しく現れている。啄木によるこれら処世観と神経質の性格理論とを対比すれば、まず「（理屈から割り出した）観念のみが正しいとする思考（の偏り）」と、それへの強い「執着性」、ならびに「観念に執着するあまりのとらわれ」（『森田の言葉でいえば、かくあるべしという観念に思考がとらわれてしまふ、思考の矛盾、（それのみが正しいと思つてそれに邁進しようとする）「強い欲求」が目につく。その基盤には、（中学を退学して一時的には病氣になったが、健康が回復した以上自らの努力で獲得すべき生活の糧を、父から得ても当然とする）「依存的、自己中心的な生活態度（『幼弱性』）があり、そして、諸哲学者の思索はそれとして、現実の中にそれを置いた時にどう考えれば合理的かについて考えようとしなない「観念的な思考様式（『幼弱性』）」も併せ持つており、神経質者の性格特徴が目白押しである。

詩集出版を名目とした上京を企てる際にも、これらの「天才主義」を実行した結果が、あの大言壮語や借金生活である。さらに、父親の失業の報に驚愕して窮したあげくにとつた行動が、有名な「自らと節子との結婚式の欠席」であり、盛岡

中学校以来の親友の多くを失くすことになった。

この間の啄木の行動の基礎には、「幼弱性」に基づく「依存・自己中心的な生活態度」と「観念的なものの見かた」がある一方で、実際の行動として表面に現れたのは、自らの「天才主義」を堅持したいという「強い欲求」に「執着」し続けた姿である。神経質性格四大特徴のうちのふたつが有する「負の側面」が前景に立っており、神経質性格がもたらすさまざまな生活障害からの回復にとって重要な「心配性」と「自己内省性」という、四大特徴の残りふたつが後景に隠れていたという、バランスの悪さにも注目したい。すなわち、自らの生活の基盤となる生業の維持を怠って父親の庇護に依存しつつ、観念で築き上げた世界に安住しようとする啄木にとっては、「強い欲求」に「執着」するという、前二者の性格傾向こそが処世の中心であったが、神経質性格のバランスを保つうえで重要な、「心配性」と「自己内省性」という後二者の性格傾向が後景に隠れていたために、生活基盤を依存していた父親の失業を知り、節子との結婚で家庭を持った以上、容赦なく迫られることになる生業の維持にはまともに向き合うことが出来ず、そこから生じたのが、自らの結婚式の欠席という不可解な挙動であつたと考えられるのである。

第四章 森田神経理論からみた啄木の性格特徴『ローマ字日記』から『一握の砂』まで

以降も「天才主義」実践による必然的結果としての生活苦は続く。一九〇七年から一九〇八年にかけては、洪民↓函館↓札幌↓小樽↓釧路とたびたびの転職を繰り返す目まぐるしい日々が続き、一九〇八年の上京後も、小説の執筆に奮闘するが果たせない一方で、暮らしの糧はもっぱら友人にたより、他人の金で生きることが躊躇しなかった。その背景には、自らの天才実現という「自己拡張の意思」のためには、他人からの「自他融合の愛」が得られて当然、という啄木流の「天才主義」がうかがえる。精神医学的観点に立てば、これらの処世観は（自らの生活をありのままに見ない）「観念的なものの見かた」と「幼弱性」に基づく「依存性・自己中心的な生活態度」であり、三年前に自らの結婚式を欠席した時代から何も変わっていない。

一九〇九年三月の新聞社への就職以降も、「売れる小説を書く」ことにこだわるあまり、啄木の意識は「必要な金は、小説を売って稼ぐ」という一点に集約され、小説断片を書き散らしては中断することを繰返した。啄木は、「自分が稼ぐ手段は、小説を書くことだけ」と思いつめ、「天才なら必ず書けるはずの、売れる小説を書けないという事実」を承認すれば、「自らの天才性を否定することになる」という観念にひたすら怯えた。「売れる小説が書けない」という事実と「天才なら、書けるはず」という観念の間で、延々と堂々巡りが続けられる一方で、給料の前借りなどで得たお金があれば、漁色や浪費

に逃避して、経済的な窮状をさらに深める結果となった。

この間の経過を精神医学的に整理してみたい。「生きていくためには、金が必要」→「その金は小説を書いて稼げる（はずである）」→「何故なら、自分は天才なのだから」その流れの上で小説を書いてみたが、売れない。「天才たる自分が書いたもの（が売れないはず）は（なく、必ず）売れる（はずである）」（ここに見えるのは、「金を稼ぐ手段は小説書き」「自分は天才なのだから書くのは簡単」「それは必ず売れる」「売れさえすれば金は稼げる」という、「かくあるべし」という思考の連鎖にとらわれたあぐくの「視野の狭窄」であり、その結果、「行動の制限」が生じたのである。森田理論ではこれを「とらわれ思考」と呼び、それにとまなう一連の行動のちぐはぐさを、「思想の矛盾」という言葉で端的に表現している。また、「新聞社からの収入は直ぐに浪費してしまい、手元にはいつもお金がない」という窮状は、「売れる小説を書い」て稼ぐことで直ちに解消出来る、という啄木の考え方があつた。そこには、根底に潜む問題の本質について多面的な検討を行わずに原因を単純化して考えようとする思考様式、すなわち森田理論という「防衛機制の単純化」や「両面感の欠如」が明瞭に伺えるのである。

浪費行動に走つた六月一日以降は、心理的には「思想の矛盾」の中にかめとられ、身体的には浪費行動に走る資金にも事欠いて憔悴して寝込み、啄木の生活は、創作するどころ

ではない破綻の危機に瀕していた。この煉獄のような日々から救い出される契機となつたのは、外形的には、否応なく家族との同居という「社会生活の実際」の場へ引きずり出されたことであり、内面的には、偶然、「評論の文学的価値は小説に引けを取らない」とする田中王堂の主張を知ること、「生きた世の中」を見る目が開かれる端緒を得たこと、の二つの要因が指摘できる。後者は、小さいながらも大きな発見であり、習作的位置づけの作品としてではあるが、苦悩のただ中にあつた五月末には「冒弱通信」を書き、九月からはその主張に沿つた評論である「百回通信」を岩手日報紙に掲載している。

森田理論に沿つてこの間の変化を分析すると、自らの理想の実現という「かくあるべし」ととらわれることで行動が停滞する「思想の矛盾」の状態にあつた啄木が、評論の持つ小説同等の価値を示唆されたことで、「生きた世の中」を見て評論化するという習作に挑むことになつた。この実践は、『「事実」を『ありのまま』に見ることこそ、ものの見かたの基本』という、森田理論で最重要視する「事実唯真」の考え方に、ぴたりと適合し、神経質症における「とらわれ」から脱却する上で、大きな力になるものでもある。

その後の妻・節子の家出が啄木に与えた衝撃は大きかつた。自らの実生活における、これまでの「天才主義」の実践がもたらした、妻をはじめとした家族や友人などへの影響につい

て、啄木はおそらく、結婚以来初めて真剣に振り返って反省し、「人生の真面目」を直視する覚悟を固める上での大きな力とした。

この間の経過には、森田理論のいう「事実唯真」の立場が大きく作用したと考えられる。すなわち、自らの理想の実現の基盤には、家族や友人らの貢献があり、それらが失われた生活にはどれほどの困難が生じるか、という「事実」を、自分の側から、そして節子らの側からも「ありのまま」に見ることが出来たのである。その結果、「現実はいくくあるべし」という観点から離れて、「不本意ながら、現実はいくくあるのだ」という観点で、自らの置かれた立場を直視出来たのである。

節子の帰宅後は、新聞社の仕事に励み、生計の補助としての副業にも手を染めた。一月三〇日刊行の「弓町より食らふべき詩」の中で啄木は、まず家庭生活を顧みなかった自らのそれまでの態度を反省し、その姿勢を卑怯と断じている。さらに詩歌の型式については、形式上は口語詩が、そして内容上は様式性にこだわらない感情の正確な報告が、それぞれ望ましいとした上で、「足を地べたにつけて歌う詩」「珍味ないしは馳走ではなく、我々の日常の食事の香の物のごとく必要な詩」こそ、時代が求めるものとまとめており、一年後の「一握の砂」の編纂方針にも通底する論旨を展開している。すなわち、啄木にとっての「詩」とは、「時々刻々の行為にと

もなう自己の内面的変化」の「記載報告」の積み重ねであり、その「まとまり」こそが、王堂流の「自己の生活の統一」の表れとするものである。

この姿勢もまた、先ほどの「事実唯真」の立場を堅持したものであることは明らかで、かつ実際に詩歌を作る場面を想定した、具体的な詠草方針を示すところまで深化させていることから、事実在即して自らの行動を吟味し、選択するという段階にまで、啄木の思索方針が変化してきたことを示している。このことは、一九一〇年三月からの「啄木調」短歌創始の基礎となり、職場の上司である渋川玄耳に認められることにつながり、歌人としての将来に道が開かれた。

このような啄木の「社会生活の実際」を見る眼は、六月に起きた大逆事件を調べていく中でさらに磨かれ、質的にも深化していった。九月一五日からの「朝日歌壇」選者への抜擢によつて、投稿歌を通して、「生活」の「ありのまま」に接する機会が増え、その実像を捕える視野も拡大した。熟練した作歌技能に加えてその基盤となる理論体系が整えられたことで、十月にはその理論体系としての歌論『一利己主義者と友人との対話』が、そして二月には実践形としての歌集『一握の砂』が上梓されることとなった。

次章では、「生物としての『われ』」という存在が、その時々『いのち』の反映である『感じ』を『認識』して詠んだ歌が、すなわち「自我の歌」であるという啄木調短歌の理論を

踏まえた上で、その核心となっている「感じ」「いのち」「われ」「認識」という概念を、啄木がどう短歌の中で表現しているのかという問題について、『一握の砂』の冒頭を飾る「我を愛する歌」の章に収載された一五一首を対象として、啄木自身の神経質性格と対比させつつ、精神医学的観点を織り交ぜて解き明かしていきたい。

第五章 「我を愛する歌」における「われ」の重層性

啄木調短歌の真髄は、孜孜として働いて金を得ることで自らと家族を養う「国民生活」の現実の中で、生起するその時々「感じ」を、「われ」の「いのち」の姿として素早く捕らえて表現する点にある。また「生活」は「国民生活」と有機的に結合した重要な概念であり、その「国民」の中に啄木自身も含まれることから、啄木調短歌とは、神経質性格を有する啄木の「意識」が捕らえた、その一瞬一瞬の自らの「生活」の姿ともいえる。『一握の砂』冒頭の「我を愛する歌」の章に収載された一五一首の中で、詠草時の啄木の「意識」や「行動」のあり方と、森田神経質理論の教える「感情と行動の法則」との間で、一定の連関が認められる歌は三九首ある。以下ではこれらを、啄木の「生活の発見歌」と呼ぶことにしたい。

この歌集編纂にあたって啄木は、見開き二頁に収載された四首ごとに歌意に一定のまとまりを持たせる、という工夫を

凝らしている。先の一五一首を例にとると、冒頭の二首のあと、四首単位でのまとまりが三七連あつて、末尾の一首という構成になっている。これらの「四首単位でのまとまり」の観点からみると、三七連中二三連に「生活の発見歌」を認め、各連には一四種のそれ（ら）が含まれている。なかでも目を引くのは、四首すべてが「生活の発見歌」である¹⁰³から¹⁰⁶番歌までの第二六連と119から122番歌までの第三〇連の、ふたつの連である。まず、第二六連を構成する、以下の四首からはじめる。

103 とある日に／酒をのみたくてならぬごとく／今日われ切に金を欲りせり

104 水晶の玉をよるこびもてあそぶ／わがこの心／何の心ぞ

105 事もなく／且つこころよく肥えてゆく／わがこのころの物足らぬかな

106 大いなる水晶の玉を／ひとつ欲し／それにむかひて物を思はむ

103 番歌を評して、啄木研究者として知られる岩城之徳は、飲酒衝動にたとえた「金欲しさの痛切な訴え」を、木股知史は「生活者の金銭に対する痛切な欲望」を、夫々表現したという見方をするが、詠出の裏側に潜んでいる真の欲望は何か、

という問題への考察が不十分と考えられる。すなわち、啄木が何のために金銭を求めたのか、ということである。

啄木がこの歌を詠んだのは一九一〇年七月二六日夜、同年八月四日の東京朝日新聞に掲載されたものである。初出では四句めが「今日は我切に」と「は」が入り、「われ」の表記も「我」となっている。この時期の啄木は、仕事上は新聞社での勤務も順調で、作家としても小説「我等の一団と彼」を執筆しながら、幸徳秋水の代表作『平民主義』を読んで、大逆事件関係の思索を深めるという、その一生でも最も重要な思想上の変革期にさしかかっていた。その思想家としての啄木が、「切に、しかも急に」金銭を求めたとしたのなら、それは当時の思索を深めるために必要となる書籍、それも高価な洋書だったのではなからうか。当時の啄木の月給は二五円、洋書は一冊で三円前後もしたので、おいそれと買うわけにもいかない。蓋平館時代の借金返済もある。「天才主義」時代の啄木なら衝動買いをした可能性もあるが、今は「自己の生活の統一」を求めて、現実的な日常を送るべく努力している以上、自制を求められる立場にある。

それらを念頭に置いて103番歌を見直すと、この歌は単に洋書を買う「お金が欲しい」という衝動を詠ったものではなく、それを自制せざるを得ない日常生活を送る中で、不意に「洋書を買うために必要な」お金が欲しい」という気持ちが湧き上がってくる、自分の心の動きの不思議を表現したものと考

えられる。

104番歌の初出は、東京朝日新聞一九一〇年六月一八日の「水晶の玉をよるこび弄そぶ我がこの心ひとり嬉しむ」であり、詠出時期は103番歌の一月前である。103番歌同様にこの頃の啄木は、その一生で最も重要な思想上の変革期にさしかかっており、初出歌は、その緊張した思索の日々の中で水晶の玉を愛でる時の、心の安らぎを詠んだものと考えられる。

しかし、『二握の砂』収載時には、「ひとり嬉しむ」を、「何の心ぞ」に改変している。この推敲の意味するところを考えてみたい。この改変の結果、歌意の重点は、緊張した思索の日々の中にあっても、掌に水晶玉を載せた途端にそれを見ることに注意が移り、その形を愛でるうちに、美しいという新たな感情が湧き起こって、思索の緊張が一時的にほぐれる。些細な行為ひとつで、それまで思索に集中していた心が、水晶玉を見て美しいと感じる心へと容易に変化していく、その不思議さに置かれることになった。

ここには、森田理論の教える感情の法則⑤「感情は新しい経験によつてこれを体得し、反復することにより、ますます養成される。」に基づいた意識の流れが明瞭に認められる。啄木による推敲の結果、歌意は、初出歌での「一瞬の心の安らぎ」から「心の動きの不思議さ（への驚き）」となつて、より深く重層的なものへと改変されたのである。

105番歌は、不思議な歌である。その初出は、東京毎日新聞

一九一〇年八月二日。「事もなく且つころよく肥えて」ゆくのであれば、もう言うことなしの毎日であらうに、かえって「物足らぬ」という感じが起こってくるのだという。103番歌に現れた「切望」する心、104番歌になると、小さな水晶の玉ひとつでそれが逸らされるという「不思議」、そしてこの105番歌には「満たされてゆく」心を見つめる、もうひとつの自分の心の中に浮かぶ「不足感」を詠っているのである。それは、次の106番歌に至って、鮮やかにまとめられる。

106 番歌の作歌は一九一〇年七月二十六日夜。初出は、同年八月四日の東京朝日新聞に掲載された「手帳の中より」五首のうちの最後の一首であり、四首目までは大逆事件を題材としている。「大いなる水晶の玉」から連想されるのは、水晶占いである。一六世紀のドイツ発祥ともいわれるそれは、見つめる水晶玉に浮かび上がる、風景や場所、過去や未来の映像などをともに占うのだという。初出歌の配列であれば、大逆事件の推移を占いたいという意図も推測されるかもしれないが、『一握の砂』に収載された段階で、啄木が別の歌意を潜ませようとしたものと推測される。すなわち、「それにむかひて物を思はむ」の句が示すとおり、啄木は水晶玉を前にして、占いを求めるのではなく、ものを思おうというのである。103番から105番歌にかけて、洋書の購買衝動、ふとしたことによる思索の緊張からの解放、満足する心を見つめるもう一つのところ、を詠った後に置かれた106番歌において、その不思議さ

を通覧しようとしたものと考えられる。以上をまとめると啄木は、第二六連の主題として「心の動きの不思議」が浮かび上がる編集を意図したものと推察される。

つぎに、第二〇連の四首についてみていく。

119 ある日のこと／室の障子をはりかへぬ／その日はそれにて心なごみき

120 かうしては居られずと思ひ／立ちにしが／戸外に馬の嘶きしまで

121 気ぬけして廊下に立ちぬ／あららかに扉を推せしに／すぐ開きしかば

122 ちつとして／黒はた赤のインク吸ひ／堅くかわける
海綿を見る

119 番歌の初出は「スバル」一九一〇年一月月号のため、作歌は、啄木が『一握の砂』再編集にかかった同年一〇月四日から一六日の間である。屈託したある日のこと、思い立つて部屋の障子を張り替えたのである。「ローマ字日記」の時代の啄木なら、きつと浅草に行ったことだろうが、この日は違った。この歌で目を引くのは、どうして障子を張り替えようと思ったか、である。最初から「心なごみき」になることを目指したのではあるまい。どこの家でも障子は、子どもが穴を空けたり、開け閉めのちよつとしたことで破れたりするも

のである。また、張替から目を重ねると、紙は変色し、汚れてくる。啄木の心は屈託しつつも、その眼はそのような障子のあり様を、事実のあるがままに捕らえたのであろう。そこで生じた心の流れのままに、張替を思い立ったのだと推察される。決して、屈託を晴らす目的が最初にあつてこの行動をとつたのではない、ことを銘記しておきたい。

破れていないところも含めて紙を取り払い、棧に残つた紙も水をつけてきれいに拭き取る。棧に糊を刷毛で塗り、新しい障子紙を張りつける。もしかすると糊は妻が母が作つたもので、この障子の張替は家族総出での作業だったのかもしれない。まっさらの白い障子のおかげで部屋は明るくなり、うまく張り替えられたのであれば、障子はぴんと張つた状態で、それを見るだけでも快いものである。いつの間にか屈託は晴れている。家族総出でそれが成し遂げられたのであれば、なおさらである。

この間の啄木の心の動きをたどると、屈託の中で、ふと「障子の汚れが目につく」↓「張り替えよう」↓「張り替えの作業を、手順に沿ってきちんとこなす」↓「部屋が明るくなつて、気持ちよい状態になる」↓気づいてみれば、いつの間にか屈託は晴れて「心なごみき」の状態になつていた、という流れであろう。104 番同様に、森田理論のいう、感情の法則⑤を示した好例といえる。さらに、自分の周囲をありのままに見たからこそ「障子の汚れが目につく」のであり、そのこと

から自然に生じる「張り替えよう」という気持ちのままに行動を起こして、実際に障子を張り替えるまでの一連の流れを啄木がとり得たことは、「かくあるべし」という「思想の矛盾」にとらわれていた時代の神経質症状からの解放を意味し、その根底にある「事実唯真」「あるがまま」というものの見かたを啄木が体得していたことの傍証となると考えられる。

120 番歌に行こう。初出・作歌とも、119 番同様の時期である。歌意は、「空想に耽つている時に、馬のはげしい突然の嘶きを耳にして我に帰り、一瞬うろたえて衝動的に立ち上がったが、馬の嘶きと判つた後は落着きを取り戻した」と思われる。ここには森田理論のいう感情の法則②「感情は、その衝動を満足すれば、急に静まり消失する。」が示されている。

121 番歌の初出・作歌とも、119 番同様の時期である。歌意は「この扉の開閉は固いと思ひ込んで力を入れて開けようとしたのに、思いがけず簡単に開いたため、拍子抜けして廊下に立ち尽くした」と思われ、ここにも森田理論のいう感情の法則②が示されている。すなわち、行動によってさまざまな形で生じる感情は、そのまましておけばたちまちのうちに消え去る、ということであり、その一瞬の変容を、自らの「いのち」の現われと考えたからこそ、啄木は短歌の形で残したのである。

122 番歌の初出は、東京毎日新聞一九一〇年六月一八日、104 番歌同様、啄木がその一生の中で最も重要な思想上の変革期

にあつて、緊張した思索の日々を送っていた頃である。歌中の「海綿」は、文房具として用いられたもので、ペン先に残るインクを拭き取るために使うものである。どのような時に使うかといえば、ペン先に付けるインクの色を替える時である。啄木は、原稿書きの際には基本的に黒インクを使っていたが、新趣向で原稿を書き起こすときには赤インクを用いることが多かった。その海綿が、「堅くかわいて」いるさまを詠んだということは、それなりの期間ひとつの原稿書きに集中し、インクの色を替える必要がなかったということを意味する。作歌時期を考えるとすぐに思い当たるのは、小説「我等の一団と彼」の執筆である。この歌には、ひとつの作品の執筆に集中した最近の自分のこころの姿が、海綿の姿になぞらえて表現されていると考えられる。

啄木は第三〇連の主題としても「心の動きの不思議」が浮かび上がる編集を意図したと推察されるが、第二六連と異なるのは、森田理論のいう感情の法則を暗示する歌がならび、啄木の、「ものを見る眼」が平明となつて、事実をありのままに見ようとする姿勢がより顕著となつていゝことである。

第六章 まとめ 「生活」の発見歌としての啄木調短歌

少年の日から信奉してきた「天才主義」の呪縛から解き放たれて、自らを含めた生活者の「人生の真面目」を見つめ、そのありようを、日常の言葉で、短歌として短く定着させる

こと。そうした「生活」の発見を積み重ねていくことの先に「国民生活」の現実を置くことで、両者を有機的に結合させようとしたことが、啄木調短歌の最大の功績である。いうまでもなく、實在の人物は矛盾と不明瞭性の塊であり、短歌に詠出するにしても、詠唱者に都合よく動いてくれるわけではない。それらの「不確実性」自体が、生身の人間の生きた証しということにもなるうが、啄木の作歌に向き合う姿勢は、あくまで「生活」の発見ということに忠実であつた。すなわち、分かっていることだけをつなぎ合わせて、その隙間をあり合わせの言葉で安直に埋めることはせず、そして、自分だけの視点で、事実をつなぎ合わせて作歌することの危うさをしっかりと認識した上で、その不確実性をこそ、「ありのまま」に詠つたのである。

先に詳しく見た、第二六連や第三〇連などは、その実践の代表作と考えられる。そうするために必要となるのは、啄木が詠唱の対象として見据え続けた「感じ」と「こころ」を表現するに足る「ことばのかたち」であつた。また、一瞬にして過ぎ去るこれらを、素早く掬い取るためには、短詩型である短歌が最適ではあるものの、過剰な修辭や特定の概念に直結する歌言葉はかえつて歌意の表現の妨げとなり得る。この問題を避けるためには、日常の言葉をそのまま用いることが望ましいというのが、啄木の立場だつたのである。

三枝鼎之は、「自我の詩」と「歌言葉のシェイプアップ」を

近代短歌革新の二大テーマとし、前者はまぎれもなく啄木の手で達成されたと指摘している（短歌俳句川柳一〇一年『新潮』一九九三年一〇月増刊）が、前者達成の前提としての後者の導入も、啄木調短歌創出のカギとなったと考えられる。

啄木が自然主義の歌人（特に前田夕暮）に学んで、啄木調短歌を創始し、その後自然主義を超えて、さらに高い思想を求めてクロボトキン等を読んだ後に『一握の砂』を創造した明治期後半とは、どのような時代だっただろうか。啄木は一九一〇年八月に、「官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて」「学生のすべてが其在学時代から奉職口の心配をしなければならなくなつた」状況を指摘して、「理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失つた」青年たちの「内訌（内輪もめ）的、自滅的傾向」について愁い、その状況を「時代閉塞」と称したが、それはまさに「時代に対する組織的考察」の欲求の表れであり、当時の文壇における「自然主義」小説家たちのもの見かたとは視点を異にしたものである。

啄木は、その欲求に忠実にしたがって国民生活のありようを「あるがまま」に見つめ、世の中に遍在している「生活者」の姿が自分のそれと何ら変わりが無いことに思い至つた時、その生きざまを愛惜する心が生まれ、それを表現する手段としての短歌が、啄木の中で深く認識されたのであろう。それはとりもなおさず啄木による「生活」の発見であり「生活」という歌の脈の発見だったのである。このようにして創始

された啄木調短歌には日々「近代日本の生活者としての我」の「こころ」をよぎる「感じ」が、しつかりと詠みこまれた。またそれら「生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じ」を意識するのがその時々（我（『自己』のち））である以上、そこには啄木の行動とその根元にある意識までもが自然に詠み込まれることになる。

最後に、啄木調短歌創出と啄木の神経質性格との関連性についてまとめておきたい。啄木が「生活」を、感情・行動・認識の相互作用の中において捕らえ、その複雑な相互関係を一定の理解のもとで言葉として適切に表現出来たのは、啄木を持つ神経質性格の「正」の側面が発揮された結果でもある。すなわち、神経質者の性格の四大特徴のうち、『ローマ字日記』の煉獄と節子の家出という衝撃によって、それまで奥に隠れていた「心配性」と「自己反省性」とに活が入られた一方、「天才主義」時代の啄木を悩ませ続けた「強い欲求」と「執着性」の「正」の側面が発揮されて、ものごとをありのままに見つめるという「事実唯真」の立場が確立されたことで、それまでの啄木の行動における認識のアンバランスが是正され、神経質性格がもたらすさまざまな生活障害から解放されたのである。

その結果、『一握の砂』を編纂する過程で、それまで啄木を苦しめていた「強い欲求」「執着性」といった神経質性格の備える「正」の側面がいかなく発揮されて、緻密で粘り強い

編集活動を継続する力となったばかりか、ひいては自分の作歌意図を完璧に反映させたいという「完全欲」をも引き出した。その集大成が、一〇月四日から一六日までの、あの驚異的な歌稿の推敲であり、その努力のすべてが、『一握の砂』という、短歌史にその名を残す稀有な歌集として結実したのである。

また、啄木が得た「事実唯真」というものの見かたは、その詠唱に広さと奥行きを与えて、歌意を立体的なものにした。さらに、もともとこまめに日記をつけ、知己との通信を怠らなかつた啄木の習慣によつて残されていた、啄木自らが筆をとつた各種記録の存在は、詠唱にあたつての啄木の視点が現在と過去との間を自由に往き来するための力となり、広さと奥行きに加えて、時間軸に沿つてものごとを見つめるというユニークな観点が付加されることになつて、『一握の砂』における回想歌の幅を増すことにつながつた。

このように、常に変転して一か所にとどまらない「人のころ」の持つ複雑さを、空間的にも時間的にも多様な広がりのある人々の「生活」に即して捕らえ、日常の言葉で明晰かつ繊細に再構築したことで、啄木の自意識が捕えた「切れ切れの生活断片」は、分かり易い「心の索引」となつて、日常の食事に供される「香の物」のような短歌（弓町より 食らふべき詩）として、われわれ生活者の前に立ち現われたのである。

小説は昨年と同じ十一篇。昨年以上位の作者の作品が目についたがそれも含めて筆力が均衡して一定のまとまりのある作品が揃い、一方そこから際立ったものを見出すのが難しかった。結局は小説というジャンルの特性をどう充たしているか、それも簡単ではなかったが、その範囲で入賞作を選定した。

畠田実里「揺らぐ」はその中で頭ひとつ抜けた印象があった。幼い時同居していた祖母を母と信じて育ったある時父から、母はお前が生まれた時に死んだと言われてから、心が揺らぎ始める。それはどんな事情なのか、母は本当に死んだのか、生きているのではないか、小学校から中学生へと思い当る数々のことが、母の死よりも生への確信を導き思い巡らすうちに十七才の時、父からあらためてその事情を明かされ、自分の生をめぐる家族の思いに心を動かされる。

これまでも陰のある少年時代の回想という風な主題の作品を手法を変えて描き、入選歴十分の作者だが、今作は居るべき母が不在の家で育った少年の視点で迫る謎の展開となりゆきに新味があり、興味を誘われる。自分が母の難産の子であったという事情がそこに複雑に絡んで、今でもリアリティのある人情話が心をうつ。話の経過背景などやや書き足りない感じもあるが、一方重い話を湿らせずに、少年のミスティアスな視点を効果的に活かして書きあげた手際と筆力に感心した。

日高光「俺の謙信」もこのところ常連の作者で作品ごとに趣向の面白さを見せる。今作は二〇二五年の近未来、29才の高校日本史教師が授業で大好きな戦国時代、長篠の合戦から数々の場面を経て、お気に入りの上杉謙信が織田信長らを制して天下取り目前というところで急死するまでを臨場感たっぷりに語り、謙信病死と黒板に書いて、次に移ろうとしてうっかりその黒板の字を消してし

まう。すると教師の頭の中で歴史が一時改変するという話の流れが面白い。謙信病死という黒板の字の消しと直しの間に歴史が動くという教師の想像と現実の場面になかなかリアリティがあつて読ませる。歴戦不敗の名将謙信が急死しなければ歴史はどう動いたかというのは魅力的な想像で、その興味に添った授業の話が、突然教師が脱走罪で逮捕されるというドタバタで打ち切られ、場面が変わって二〇四〇年日本史の授業で、二〇二五年に徴兵制度が復活したということが黒板に書き残されていたということが場面では終わっている。二〇二五年や四〇年という時間の設定はそれなりに意図がうかがわれるとしても、謙信の話と、ラストの急展開の幕切れにそれらしい伏線も説明もなく物語が話としてつながらない。謙信の話が面白く展開していただけに、題名通り「俺の謙信」の世界で物語を着地させたかった。

佐藤憲明「秘湯夫婦旅」、二年前に金婚式を迎えた夫婦が新婚旅行時に約束し

た記念の旅行を五十数年ぶりに実現する話。娯楽らしい生活も求めず実直に勤めあげて定年生活に入った夫の視点で、底抜けに明るい妻とつましく暮らして穏やかとはいえない苦楽の人生が、秘湯めぐりの旅の背景として過不足なく描かれる。蓄えらしいものもない旅の目的地は青森山中のランプ宿青荷温泉、酸ヶ湯を経て一泊、翌日は乳頭温泉から日本海に出て横手に泊り黄金崎温泉などを俟約しながら巡る二泊三日の奥羽の旅が目に見えるように描かれる。つましい生き方の中で子ども達も真っ直ぐ育って自立し、新婚旅行以来の秘湯めぐりの自足した旅の気分がしみじみと伝わってくる。道中格別な趣向はないが、真率平明でユーモアを含んだ語り口が安定して、心地よく読める作品になっている。

高橋剛治「函館ステップ」 題名は函館のご当地ソングに由来する。全国的なヒットソングではないが函館でなじまれてなつかしく思い出す人も多いだろ

う。作者は父の鼻歌の一節から聞いた十才の頃から五十年ほどの現在にまつわる歌の来歴と折々の函館の街や家族や自分の思い出などを重ねて描く。思い出す時間を昭和から平成とホップジャンプしてスキップし、ステップして令和の現在に至るという章分けて書いている。つまり「函館ステップ」という曲名に自分の人生の歩調を合わせて書くという考えた構成になっている。内容もいろいろ取り合わせて興味をひくが、あれもこれもと話が移りすぎ、またゆきつ戻りつするので断片的に話が広がり物語になりきれない。作者も話が広がって伏線を回収しきれずエピソードをつけ加えたと書いている。筆力があるだけに過剰な思いを整理しきれず語り口を集約できなかったという印象が残る。「函館ステップ」という素材に魅力があるだけに思いついた話の取捨がほしかった。

水関清「ワンダフル寝台特急」 四才の三男と寝台特急北斗星の乗車体験を描くが、そこに至る四才の兄の鉄道愛と

知識、それに重なる作者父親の鉄道マニアぶりが書かれる。列車への興味と関心は駅弁への興味から寝台特急への関心となり、父子はある日の寝台特急北斗星へ乗車する。鉄道マニアは世に多いのでこの父子の話がとび抜けているとは思えないが駅弁への蘊蓄や北斗星の乗車体験のことこまやかな描写などはゆき届いてよく書けている。ただ話そのものに特別な趣向はないのでノンフィクションとしても興味は限定されるだろう。話の前後にわが子の鉄道体験にもっともらしい意味を与えるのも、ほほえましい父子の鉄道旅の話にちよつと水を差している。

以上五作品から、入選作は「揺らぐ」に、フィクションの面白さで「俺の謙信」を加えた。小説としての造形度は弱いがそれぞれ一定の筆力と完成度のある作品として「秘湯夫婦旅」「函館ステップ」「ワンダフル寝台特急」を佳作として評価した。

この他に自然の中をただ歩きつづけ

て不思議な体験をする一日を書いた「少年時代」、四〇年ぶりに定年退職して戻った函館で、造船所に囑託として通う冬の朝の電車の光景を描いた「雪の朝に……」はその文章の世界に心ひかれた。ノンフィクション風作品が多かった入賞作に比べこちらの文にむしろ小説的世界があったが短篇随筆風でもう少し作品の奥行きがほしかった。「真実のセックス」

はゆき違いの中で結ばれた男女の話を素直にまとめて好感が持てるが平板な書き方でストーリーだけの印象にとどまっている。「臥牛山」「座頭首」「双子絵」いずれも着想は目についたが肝心の日本語表現が怪しい。文法を守って書きたい。「竜のユイ」は竜の血をうけついで少年が変身する朝から始まるファンタジーだが、ファンタジーだからこそ話の道筋に現実感が必要。そこから物語の世界をつくりあげてほしい。高校生の作品。

評論は水関清「啄木の『我を愛する歌』とは何か？」

作者はこのところ連年啄木についての論考を寄せているが前年の「復元『悲しき玩具』」を除けば、その前々年「ふたつの『一握の砂』と啄木の『生活の発見』」、その前年の「啄木の精神分析」といずれも精神医学的な立場からの啄木論という点で一貫している。本稿も第一章で「啄木調短歌における中心概念としての『我を愛する歌』について精神医学的な観点の論考を加えること」とその目的を明記している。

「我を愛する歌」は五つの題で構成された「一握の砂」冒頭の歌群の題だが、作者はそれを啄木調短歌の中心概念として、森田療法で知られる精神医学者森田正馬の神経質理論などを援用して考察している。本稿の理論的内容は前々稿の「ふたつの『一握の砂』……論と重なる」ところが多く、「ローマ字日記」や「一握の砂」を対象に森田理論との関係を述べた前々作に対し、本稿では「われを愛

する歌」の「われ」とは何かということに考察の主題を置いている。

作者が森田の神経質理論に注目するのはそこに啄木の歌論との類似性を見るからである。啄木の「われを愛する歌」は、その時々にも生まれてくる「感じ」や「いのち」の発露として認識する「自我の歌」であり、それが認識や感情と人との行動の関係を検討した森田正馬の神経質理論と通底する、と作者はいう。論考は啄木における「われ」の変遷を、その生い立ちから晩年に至る生の外形と内面を追いながら、「われを愛する歌」の「われ」の重層性から「啄木の神経質症的性格」からの解放陶冶を見出してゆくというかたちになっている。また作者は、「われを愛する歌」一五一首を森田理論と対比させて特に関連のある歌三九首を「生活発見の歌」として論じている。

啄木の歌論と森田理論との類似性には必然的な意味があるという作者の専門的立場からの医学的考察は、同時代的

な文学情勢からも興味深く、啄木の生活改善のきっかけとして田中王堂の文章からのヒントを強調しているのも肯ける。王堂にも通ずる文学理論の論客片山孤村の「神経質の文学」を連想した。神経質と文学の関係は同時代的な関心事であつたと思われる。啄木が苦しい生活の中でも積極的に時代の空気を吸おうとしていたことが、本論の考察からもあらためて感得され、触発されるものが多い好評論だつた。

いか釣り船団 ―山背泊という港町―

齊 藤 満

海辺で育ったので海の香りが忘れられない。久し振りに港町埠頭に出かけたら、大型客船が入港していた。この日、令和元年九月四日朝九時、新潟港―函館港を往復するクルーズ客船ツアーの豪華客船「飛鳥Ⅱ」であった。二泊三日のツアーで、約八百人が乗船し、三日に新潟港を出発し元町や函館山などを観光した後、夜の十時に出港するという。

晴天であつたので、私は市民の一人として何よりホットした。外出するときはデジカメを携行しているので記念に一枚撮りたいと思って、少し離れてみたが船体が大きいので船首と船尾だけにした。

夕刊を見たら入港後の歓迎セレモニーで、函館市の田畑港湾空港部長は「同じ開港都市の新潟の皆さん、唯一の寄港地を選んでいただきありがとうございます」とあいさつ。新潟日報社の小田敏三社長は「函館のマチを満喫しましょう」と呼び掛けた。

この風景を新潟日報の読者投稿コーナー「窓」に送ったところ、九月十七日掲載された。

つながり深い新潟と函館

わが家は函館港に近い。新潟から二泊三日の函館観光に豪華客船「飛鳥Ⅱ」が約八百余人を乗せて、四日午前九時に入港した。

観光客の中には「はるばる来たぜ函館へ」と口ずさんでいる人もいるような気がした。巨大な船体の前に歓迎の横断幕が張られ、セレモニーが行われた。

私の叔母二人は西蒲原と北蒲原の出身。戦後、北海道に嫁ぎ、ひ孫まで残してこの地に眠っている。さらにいとこが新潟市東区に住んでいる。この春、東京のおいが燕市生れの女性を伴侶とした。新潟県には深い縁を感じている。

古くは江戸時代の末期、明治初頭あたりから蝦夷地開拓のため新潟県から渡って来た人もいる。北洋漁業を切り開き、函館の繁栄に尽力した新潟県出身者は多い。函館は先人から受けた恩は忘れてはならない。

このたびの函館へのクルーズは、天候に恵まれたということで何よりだった。四日後「飛鳥Ⅱ」は函館を離れた。以前「船では『さようなら』ではなく『また会いましょう』と言うんです」と「飛鳥」時代の船長に教えて

もらった。その言葉を「飛鳥Ⅱ」に送りたい。

二、三日して新潟日報社の「窓」担当者から、このたびの観光客の一人から、投稿者の住所を是非、日報さんに教えてほしいという文書が届いた。これまでもよくあったので、私は素直に承諾をした。個人的な扱いとなり相手に不愉快なことをしてはいけないうと、受けとめることになった。

日を待たずして手紙が来た。思わぬ内容で県内の〇〇郡の高齢の一女性からだった。

戦前、幼児期に新潟から函館へイカ釣り船団で二、三日かけて津軽海峡を越えて、あるときは山形の港で一泊して、近くのお寺で航海の祈願をしたあと、汽車に乗り換えて、青函連絡船の三等室で母にすがりながら、たどり着いた様子を便箋に書きながら、涙にぬれたほほをぬぐうことを忘れて、一緒に遊んでくれた当時のお姉ちゃんたちが、なつかしいと結んであった。

いか釣り船団の番屋（宿舎）での期間は、七月から秋の深まる十月の末日までで、北風が吹き出す頃に新潟に帰港すると記していた。

その港はすぐに分ったので、資料が手に入るたびに女性に送った。（この人をＴさんと呼ぶことにして書くことにしたい）Ｔさんはなかなかの達筆家で、社会奉仕活動が続けてきたが、知人たちのすすめで一休みをしている、明るい性格のよ

うにも感じとった。前浜の海は佐渡海峡、指呼の間に佐渡島が横たわり風光明媚な集落で、函館を恋しく思つて余生を過しているであろうことを想像した。私はＴさんの心境を詩にしてみた。補作・作曲はＴさんがどうぞとペンを執った。

山背泊という港町

作詞 齊藤 満
補作・曲 〇〇 Ｔ子

一 越後出雲崎をあとにして

針路を北に舵をとる
イカ釣り船団 母娘おやを乗せて
津軽海峡 乗り越えた
父の持ち船 長清丸よ
ああ函館の山背泊という 港町

二

山形港の お寺で祈願
青森行きの汽車に乗り
連絡船の三等室
丸い小窓は 海の中
そんな人生 運命さだめでしようか
ああ 函館の山背泊という 港町

三 飛鳥口のクルーズ船で

八十余年の一人旅

デッキの上で夜空を仰ぎ

北の七つの 星明り

ついに着いたよ 涙でかすむ

ああ 函館の山背泊という 港町

＊令和元年九月「新潟日報」に投稿した。縁でお便りを拝見しながら、駄作を書いてみました
Ｔさんだけの思い出の記録です

(令和二年二月二十五日作文)

山背泊の港は函館山の西部地区、麓の下にある。函館ドック（現どつく）前の市電の終点から五分もかからない。昭和四十年七月、町名変更があり、山背泊町は入舟町となった。

明治二十年以降に、新潟県佐渡島の一漁師がイカ釣りを試み、日本海側の各県の漁業者に教えたのに始まるといわれている。

道南地方、特に函館へ移住した人たちの県名は、新潟、山形、秋田、青森（津軽・南部）であり、イカ釣り船団が入稼することになる。

一時期、函館の漁夫三百人に対して、本州からの漁夫は三千二百人という記録が函館市史にある。また、松前町「江良

町村の郷土」（昭和七年発行・ガリ版刷）を閲覧して、改めてイカ釣りの歴史を学んだ。

次のように記されている。

：浜辺には五、六十艘の船が並び、七月下旬になると加賀、越前、庄内、津軽方面から毎年二千人から二千五百人が入り、三、四ヶ月の間だが、人口五千人の江良町村が出来て、商店は一年分の利益を得る。

函館の漁港に次ぐ港を持つだけに、この漁期は不夜城となる…。

私のイカ釣り

父はある日、体調をくずしたので、イカ釣り船から当分降りることになった。船名は北洋丸、セトンぐらい、乗り子十人、出漁中は毎日甲板上に仕切られた枠を交代となる。

昭和二十五年の夏で十五歳であった。船主は水揚げ数から三割の歩合を、生イカを自主申告し浜で手渡すのは例であった。

十歳頃から磯舟で父の手元の姿を見て、実習してきたが、夏休みの限られた時間、前浜のすぐ沖でも、すぐ船酔いがして苦痛が続いた。同級生は皆、大人に負けないほど釣り上げるのに、なぜ俺がダメなのか、ため息が出るばかりであった。父にも話せなかったが、当然子の態度は知らない筈はない。

やがて一人前になるための試練の日がきた。前述の昭和二十五年、中学二年の時の初秋の日、沖は荒れていたが船は出た。日暮れに獲れるイカを宵イカと呼び、二、三十匹釣り上げたときに、船酔いが激しくなり、立って釣り糸（テグス）を引くことも出来なくなってしまう。周りの人は笑っている。声を出して頑張れ！コラー、怒りだ。船長は縁者だったのか、「船長室に寝ろ！」と言った。その時、甲板を洗うカッポレ（木製の小型手桶）で、私の顔をめがけて海水を浴びせた若い人がいた。弱り目に祟り目、反抗する気力もなく、背を丸めて朝を迎え、船は陸に着いた。一人、三、四百匹の漁だったらしいが、母は釣具を海に落したと思えと慰めたが、一目散に家に急いだ。恥かしいのが辛かった。

漁師には不適格者だと自ら判断したが、学校を卒業するまで、収入のないわが家の生活費を得るためには、力の限り頑張らねばならないと覚悟した。これが最良の手段であった。

それは北洋丸の船主で機関士を兼ねていた、佐々木金次郎さんという復員軍人の言葉を、何かの折りに小耳にはさんだ。

昭和十六年十二月八日、日本は米英に宣戦布告をし、「真珠湾攻撃」を開始した。作戦名は「ハワイ作戦」、その時の「伊号第十六潜水艦」の乗組員、若き兵長だった。私の家から四、五十メートル離れたところに自宅があった。大柄な人であったが、いつも優しかったのは忘れられない。

語ったのは次のとおりであった。

「作戦参加搭乗員（五隻）七百六十五名の八割が終戦までに戦死した。生きて故郷の地を踏むとは夢にも思わなかった。人間、死んだつもりで事に当れば、生きる道が開けるもんだヨ。」セーラー服の写真を見たことがあった。

魔の松前沖・四十の生霊呑む

痛まし七少年漁夫

昭和二十五年十一月十六日の函館新聞は、見出しのさらに小見出しに、「巡視艇・激浪中に主なき船発見 イカ船一夜に二隻遭難」

松前町に大島村と小島村、大沢村が合併しない時のことであった。（概要のみ記載）

十一月十四日、江良のイカ釣り船、松前郡大島村字江良柏木三之丞所有の明山丸（十二トン） 船長船尾吉次郎（四二）乗組員二〇名は午後二時ころ江良港を出港、福島沖で漁をしていたが、夜になって北西の風七、八米の強風が吹き、同夜九時ころ江良に向け帰港中、機関の故障で救助信号を発した。江良の木村菊三氏所有の有宝丸（七トン）が十五日午前一時ころ、館浜の沖の岩礁に乗り上げた明山丸であることを認めながらも、航行さえ困難を極めた状況なので救助することもかなわず、大破沈没を確認した。

同日、小島村赤神の柴谷栄三氏所有・泰西丸（七・九トン）の船長柴谷栄太郎（四四）乗組員二〇名は、福島沖に向かったまま消息を絶っていた。矢越岬沖で漂流中の無人の中波漁船を、明山丸搜索のため函館海保「ともちどり」が発見、泰西丸と確認。福島に向け曳航中転覆したため放棄したが、函館海保の二隻目の「あさちどり」も搜索に当たっている。

さらにこの日、大沢村白神灯台付近で、同村佐藤由蔵氏所有堪洋丸（四・七トン）船長佐藤友太次（三五）乗組員十五名は、岩場に衝突沈没、海中に飛び込み陸に泳ぎついたが、宇荒谷、柴田栄吉（三四）は行方不明となった。

正月前に一稼ぎをしたい、どこの船主も思いは同じだ。この時の天候は奥羽北部の小低気圧が東方に急進、蒙古からの高気圧と合流したために気象台では、風速二十米の出漁漁船に警報を出していた。

私は特に驚いたのは、隣村の数ある漁船の中で、新造船で焼玉エンジンの復筒を持ち、船体を見ることはなかったが、船主仲間では話題になっていた。その明山丸に生徒二名が乗っていた。小林富也、佐賀某君だった。

二か月前に原口中学校で大島中学二年生十名ほどを招き、交歓会を開いたばかり、案内したのは江良出身の宮川教善先生だった。（後に大島中学校）訃報を告げた先生は合掌しながら、教室で冥福を祈った。僧侶でもある先生の姿は尊く見えた。

この遭難の日は、集落では漁港がないので出漁しなかった。北西の風は強くて寒い、奥尻島の方から春先までよく吹く季節風で、漁師泣かせのタバ風だ。

一夜に四十人が亡くなった当時を思い、図書館を訪ねて海難事故の詳細を報じた新聞を閲覧しながらすでに七十余年の歳月が流れ、記憶も薄れ記録が過去帳となった。もしかして私は数少ない生き証人となっていく気がする。ただこの日「吹雪の岸で嘆く遺族」と、見出しは大きかったが、吉報も掲載されていた。

十五日午前一時半、行方不明となった松前郡大島村の木村菊蔵氏所有の宝山丸（九トン）と、同村村本光雄氏所有の末徳丸（十七トン）は、いずれも同日九時ころ無事入港した。

漁師の宿命だろうか、怖れてはならない海ではあるが、昭和二十六年十二月二十八日の新聞の歌壇に入選した一首がある。

「海峡に荒波高く遭難の 明山丸の一周忌来る」
（選者・阿部たつを）。

松前小島がよく見える館浜の遭難場所、岩礁が多く、沖合いのヨシ島に、白い灯台が設置されたのは、昭和三十三年十一月一日であった。塔型コンクリート造りで、水面上から十四メートル、航海の安全が確保されたことを知ったのは、八年前のことであった。永遠に遭難者の冥福を祈らなければならない。

ふる里に帰省のときに、思わず車の中から手を合わせた。

機関の故障で漂流

集落の漁船は、昭和二十七年頃で十二、三隻であった。函館の漁船造船所まで出かけることは、大きな故障でない限りは、松前町の弁天の工場で修理することが多かった。

漁期中、二・三隻は短日であるが修理のため、休業することがあった。

乗船して乗り子となるのは、船主の縁者が多くそれだけにトラブルが起きることはない。

新潟、山形、秋田、青森方面から入稼した人たちが移住したこともあって、〇〇衆という言葉で出身地が分るので、まるで何か国語を耳にして理解しなければならぬ。それぞれの地方から来た人たちは根性もよく、〇〇衆で沖が荒れて出漁できない夜は、お国自慢の民謡大会のように歌い合う。子どもながらに耳を傾けたこともあった。みな名人ばかりで、各地方代表者のようだ。酒の肴はスルメイカさかなの生干しを焼いて大皿に山盛りにして、歌の伴奏は小皿を箸で叩き、おけさ節にあるように、

へおけさアー踊るなら板の間で踊れよー

板の響きで 三味いらぬ…。

望郷の念にかられて、酔うほどに涙を出しながら歌う人もいる。

へはあー奥山でーひとり米搗くあの水車よ

誰れを待つのかくるくる…と

わずかな時間だが、わが家は楽しかった。

沖に出る日が来た。東風やませだった。裏山から浜辺に吹くので風のように見えるが、沖は時化ときざとなる。秋イカは魚体も大きくなっている。

夜空は澄んで北極星を軸にして、北斗七星が時計の反対まわりも時刻が経つにつれ、まるで「プラネタリウム」の世界の中にいる。

宇宙を眺め流星を目で追いながら、イカが釣れない時間・時刻は甲板の上では自由であった。陸をみると灯りはわずかに見えるだけで、漁師の家に限らず早寝早起きの習慣であった。

この夜は朝までに平均して二、三百匹を釣り上げた。すでに浜に向っている船もあったが、私の乗っている「信平丸」は、エンジン故障で風に吹かれ、対馬暖流に乗り北上しているのが気にかかった。暖流の速度は時速二から四キロメートルで、人の歩く程度だが、沖に流されていくほど大波が船体に音が響いてくる。陸の山々は雲が覆い、東風やませの特徴が分る。

もう時刻は太陽の昇る位置からして、九時は過ぎているようだ。仲間の語る声も少なくなってきた。機関室には二人だ

けが点検や、エンジンをかける作業をしているが、頭をかしげているところを見ると、あせっているように見える。船長も動く気配はない。

僚船は付近に見当らない。ただ漂流が続いている。羅針盤があるが時計はない。イカ釣り船には海図はない。あるのは勘だけだ。

心細くなってきた。海難事故はこうして発生するのだと、二年前の江良の明山丸のことが連想された。

船長の声があった。「マネを揚げろ！」マネとは、火の合図をあげる。「沖で松明を振り回して、救助を待つこと、陸に大漁を告げるなど、大漁旗と違う行為をすること」であった。(北海道方言辞典・榎法華掇) すかさず古老が上着を竿にとりつけて、船長部屋の上に掲げた。

はるか沖合いから船がマネを発見したので、こちらに向つてくる。黒い船影を見たとき、救助されるのだという安心感がわいてきた。

それにしても船主の帰りが遅いので、もしやと思わなかったのだろうか。船との連絡手段はないにしても、海保江差保安署もそう遠いところではないのに……と、脳裏を駆け巡った。

全く知らない船であり、どこの港の船かも知らないが接近してきて、いきなりロープを投げてきた。横波が激しくようやく支柱にくくり付け、二、三言交わしただけで曳航されたのだ。仲間に笑顔が戻ったが、機関士は一人焼玉エンジンに

手をかけていた。

石崎港に入港

相当な時間がかかったが、エンジンの音が小さくなった。曳船が、ロープを巻きあげた。

この港は桧山管内上ノ国村(昭和四十二年三月町制) 字石崎村にあった。

石崎港は、隣町の江差町から南へ車で約四十分。石崎の古名である「比石館」跡で知られる道南十二館の一つ、石崎川河口に突き出し、三方の高さ二十五メートルの断崖を、昭和九年六月に岬の下部をトンネルをくり抜き、長さ四十五メートル、幅九メートルをコンクリートブロック造りで完成した。当時は東洋唯一、世界でも珍しいものであったという。

設計は北海道庁中村廉次港灣課長によるもの、昭和四十二年ころから漁船の大型化により、昭和五十八年三月閉鎖されたが、平成十八年二月「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に認定された。

漂流して救助された時の安堵感は、歳月を経て今なお忘れることは出来ない。腹が減っていたこと、疲労感で意識もなく、口には出さなかったが最悪の事態が頭をよぎっていた。

現在の港はすぐ近くに出来たが、原型をとどめているトン

ネルの港に行つて眺めてみたい。

人の一生には思いもよらぬことが起きるものだ。不思議を感じながら、あれから六十八年、夢幻のごとく歳月は流れてしまった。

いか釣り出漁の生徒

道南西海岸の各集落の学校では、教育に著しい学力の低下の問題と、児童生徒の健康面も大きな課題となっていた。戦後五年生活は貧しく、漁業をしている家では、違法と知りながら放課後すぐ漁に出る支度をさせていた。翌朝登校して昼近くになると眠くなり、机の上に伏せてしまうが、先生の注意を受けながら、仕方がないと思つてか、授業はそのまま続けていた。

昭和五十一年九月・開基百年記念、樞法華村史年表に、昭和二十五年九月一日「いか釣り出漁生徒の対策協議会」を開催する。この項目を目にしたが、村独自か、渡島支庁の教育関係機関の通達によるものか、私は知る由もないが、各方面で問題化されてきた。

津軽海峡に面している旧戸井、恵山沖は、六月に入ると濃霧が発生し、しばしば漁船に限らず衝突事故が多く、潮の流れも速く、海中に落ちた人の救助も困難で、不幸にして遺体

もあがらないことは幾例もある。

函館では、昭和二十八年度の長欠児童は、病欠二百六十名、長欠児童・生徒六百十名、家庭の無理解によるものとされ、翌二十九年も続くと記されている。

昭和二十六年当時、イカ釣りに関連した工賃は、イカサキ百尾さいて五円から七円、イカかけは百尾で三円、スルメのばし一枚五錢これ十枚束ねて十五錢、十四、五歳の女の子でも一日百円となつた。

ちなみに昭和二十八年頃には、駅前繁華街（大門、松風町付近）では、スズランを売つて家計を助ける女の子が見られた。午後十一時すぎの終電に乗る。（昭和二十九年五月二十五日・道新）函館・イカの街は繁栄を続けていたように思われなかった。

すでに「いか釣り船団」の入稼は終わりを告げていた。各地方からの商店が軒を連ね、北の玄関に残された旅館業の看板が往時をしのばせていた。越前屋、山形屋、秋田屋、津軽屋、江差家、今も湯の川温泉街に時代を思わせる老舗が多い。

函館は合衆郷であつたのだ。

イカ釣り哀話

昭和二十八年七月二十五日の北海道新聞の論塔・現在の「読

者の声」に掲載の記事を二十年ぐらい前から、図書館でノートに書き写しておいたものを記してみたい。

函館の船場町の浜にたむろするイカ釣船の漁夫たちが、天気もわるくないのに沖に出かけるでもなく、ぼんやり船に寝転んでるので声をかけてみるとこうだ。

イカ一貫目五円で引き取られる。一貫目のイカは普通二十七尾見当だから、一尾二十銭にもつかない。一晩中沖で頑張り腕のよい漁夫で、百円釣りあげることとは到底不可能だ。その苦勞、機関油、船の補修費などにおよびもつかないのはもちろん、自分一人の口を糊することさえおぼつかないので、働く氣力も失せ、今日は休むという。

私は赤銅色に陽焼けした漁夫の話に、答える言葉を知らなかった。このイカを買取る加工業者、仲買人の受益からなおかつこの悲しい『海の幸』を追わねばならぬ。漁夫等々イカをめぐる一群の人々の猛省を促したい。

(函館 佐々木太郎 無職)

*船場町は現在、末広町「地蔵町築島」と呼ばれ、明治時代以降に「船場町」と改称された。金森赤レンガ倉庫の裏一帯である。

私はこの記事の切抜き、書き写しは、いつの日か貴重な資

料にしたいと保存していた。

イカ釣り船団を受入れてきた函館だが、明治・大正時代のニシン漁場の繁栄で、歴史に残っている小樽のニシン御殿、留萌管内の小平の番屋の観光資源とは比較することは同一に出来ないが、函館漁港の片隅に記念碑があったらうれしく思う。

「イカ釣り」での御殿は道南西海岸に一カ所もないように思う。

昭和は夢の中

少年の頃のイカ釣りの思い出は、船酔いから始まる。集落で生きていくためには、五体健康であれば漁師になるために、子どもの時から海に馴れておかねばならない。必須項目を取得していくために前浜のワカメ、コンブ、アワビ獲り、それらを加工し製品化するコツを父の背を見て学ばなければならぬ。

合羽や長靴、漁具、磯舟は中古でもよいから持たねば漁は出来ない。これらを購入する資金は漁業権を得て、返済をしなければならぬので、理論ではないのだ。

病弱の父を思うと、漁師不適格と決め込んでいる私は自信喪失になってしまう。現金収入がなければ生活は成り立たない。母は若くして長男の私を産んだので、自ら未熟児を産ん

だのではないかと諸作で分る。

やがて船酔いをしなくなったが、大人になって、結婚しても生活出来る保証はない。将来を憂える日々が続いた。二十歳になろうとした年の秋、母に余り話したことはなかったが、この集落から出て行きたいと話した。

しばらくしてから、「母さんの若い内に出て行つてよい」という、母なりの覚悟を知った。私はなお心が揺らいだ。

漁業をするにしても、船入澗もない僻地になぜ大人たちは黙っているのだろうか、若気の至りもあつてか、歌壇で新聞に投稿を続けていたこともあつて、この村を出て行くと決つたので次のように道新の論壇に原稿を送つた。

船入澗完成の急

漁村の生活安定を叫ぶ今日、当地の場合漁民の生活にとって根本的な基礎である船入澗は、長年の待望をよそに未だ完成されない現状である。着工以来数年にして、予算の関係上で工事が進まず、また中止されることもしばしば、いつの日にか船が出入するかまったくわからない。

北風の吹く十月になると、しける日が続き出漁する日が少なくなり、浜に波が高い時などは他村の出漁してい

るのを、目の前に見ても出漁できず、生活にも支障をきたす結果となる。船を陸に揚げ降ろしたりは、まったく漁民の悩みの種であり、その都度一貫になり屈強の男が秋冬を問わず、海にはいり必死の作業である。

船入澗のある隣村に比較した場合、イカ漁業だけでも著しい差を生じ、水産物の年間における漁獲高の差は多大なものがある。他村では遠洋沖合漁業へと進出している現在であり、漁民の自覚、漁協組を主体とするところの積極的なこんこの促進運動のもとに、もはや欠くことのできぬ施設の完成に努めることが、急務であると思う。幸いにして副業である農産物の収入によつて生活を保っているが、年々漁民の生活は深刻な様相を呈しており、この先の不況を克服することは困難であろう。

たびたび各関係当局から視察にくるが、乗用車の窓からの視察でなく、もっと実態を探り不況にあえぐ原因の最大である、船入澗の完成を支援してくれるよう願する。早期完成を熱望してやまない。(昭和三十年十一月二十日付)

翌年の一月十六日、成人式を母校の小学校で終え、同級生と別れを告げた。この朝は積雪のためバスは運休となった。隣村までは八キロあり除雪車はなく、雪道をかきわけ、ボストンバッグを手にしての旅立ちとなった。

父母は家の中で無言で、神棚に灯りをともしていた。母は別れはつらいので、涙は門出に不吉だよと小声で言った。

あの日から相当の歳月が流れ去った。函館がわが人生の出発点となったのだ。

幸いに転勤をまぬがれて、函館生活六十五年が経ち、友人知人が増え、漁師なまりの私の言葉も通用できるようになった。

酒宴が始まりカラオケの時間にセットされ、それぞれ十八番を披露した。日記をめくったら平成十九年十二月と記されていた。

この年の十二月に発表された演歌のメロディ、歌詞が、カラオケのモニターに映しだされ、哀愁の込めた内容であった。その歌詞を、文章を綴るように書いてみた。

風に追われるように街を歩いてる
痩せた野良犬も見かけなくなった

路地の屋台で聴いた ギター流し歌

そんな風情もまた 消えて行くのですか

小さな手をつないで 夕焼けこやけの道を

歌って帰った昭和は風の中

裸電球点した小さな駅から

夢を枕にして あの日 町を出た

あれから幾年月 時は流れたけど
あの日の夢はまだ列車の棚の上

貧しかったけれどみんな元気だった

笑顔と一緒に昭和は夢の中

三節は略、(歌)大川栄策、作詩作曲はオオガタミツオ
昭和浪漫第二章

イカの不思議

イカ不思議―季節の旅人・スルメイカ―桜井泰憲さん著
(北海道新聞刊)を読んだ。イカ・タコ類は軟体動物、頭足綱に属しているという。イカのミミはヒレで足は腕で十本のうち長い二本の役目など、詳しく記されているから参考になった。

世界中どここの海にも生息し、その種類は五百以上(一説には六百から六百八十とも)にのぼるというから驚いた。足(腕)の中に吸盤部がありするどい歯があり、「カラストンビ」とあったが、村一帯では「トンビカラス」と呼んでいたの得分りやすかった。

イカの一生は一年(産卵時期により)過ぎることもあるようだ、函館は津軽海流によりイカの通り道は東西につながっている。

函館と八戸の「市の魚」

イカに関する専門書であるこの本は、イカ釣り船になくなくてはならないと思った。著者は現在、道立総合機構函館頭足類科学研究所長で国内外でも有名な専門家であることを、九月一日の新聞で知った。

津軽海峡では水温が高く、道南太平洋への南下の遅れを指摘。津軽海峡への戻りイカのピークは十一月〜十二月で、一月上旬ごろまで漁期がずれこむと、取材記者が書いている。

すでに秋イカの時期に入った。天気の良い日の夜の海峡には漁り火が見える。幻想的な光景であり対岸の青森県下北半島の、大間岬一帯の集落の灯りも郷愁を感じさせてくれる。

一昨年私は下北半島側から函館の夜の灯りを見て感激した。海上に浮かぶ漁り火のとは別に、函館山から湯川町周辺は不夜城のようにくつきりとよく見えるのだ。まさに指呼の間だ。函館から眺める風情とは全く違うことを体験した。

先日道新夕刊の「海と国境」第六部を読みながら、海の実態を克明に綴っている編集委員の本田良一さんの筆致に息をのむばかりであった。松前小島の北の漁船のこと、九月十日の記事では「ロシア産イカ輸入急増」のことにふれ、水産加工団体などの要望を受けて、冷凍スルメイカの輸入は年々急増している。しかも国産よりも三割ほど安いという。

ふる里のイカ釣り船のことを心配した。

函館市は魚でないイカを市の魚と制定したのは、平成元年八月一日、青森県八戸市は昨年（令和元年五月一日）であった。本州では水揚量第一位を誇ってきたが、年々減少しているという。漁業関係者の悩みはつきない。

両市の共通点を調べているうちに分ったことがある。函館市の総人口は令和二年九月一日現在二十五万二千人、八戸市は二十二万六千人で、函館市の木は「おんこ」八戸市の木は「オンコ」であることを不思議に感じた。

さらに本州の各県の魚でないものを、県の魚としていることを知ることができた。

福井では越前ガニ、静岡は月ごに変る。三重はイセエビ、京都は春夏秋冬ごと、広島はカキなど、海の特産物が制定されている。

自らの漁師になれなかつたくやしさが、老いてなお汐の香りが脳内から離れないのは、生れ故郷のことが意識の中にあるからだろうか。フェリーの岸壁に足を運び海の風に当るのが心を和ませてくれる。

いか釣り船団に母娘が乗って、函館の山背泊町にやって来た、新潟のTさんがクルーズ船でやって来た心境が分ったただけでも幸いであった。

イカあれこれ

イカを釣りあげた時は匹、陸揚げすると、杯となり干物は枚と呼ぶ、古くは新聞では、尾と記されていた。漢字では鰯、烏賊、寿留女、語源の由来は諸説あるがおもしろい。

特にアタリメとは漁師は言わないが、駅の売店の片隅に見かける。(語源略)

冷凍施設のない時代に、雨に打たれたイカは売りものにならないので、イカ漬物となり大根やキャベツと相性がよく、各家々の自家用塩辛と同様、味くらべとなる。越冬用の秋イカの塩辛は、六、七十杯を焼酎がめに沖漬けのように入れ、春頃まで冷たい所に置かれる。昼飯のジャガイモにのせて食べた。

かつて仕事で青森県五所川原市に、秋から冬にかけて行ったことがあった。五能線の五所川原駅は私鉄の津軽線があり、片道二十キロ先の津軽中里駅を往復する汽車の発着駅である。毎年十二月から翌年の三月まで、津軽平野をストーブ列車が走っている。

ダルマストーブでスルメを焼く匂いが漂う。津軽の人たちと観光客の声が響く、「あんまり焼くとソレ！カタグなるぞ」、案内人もいるが親切だ。

イカのことを忘れたことはない。一年に二、三度は、「山背

泊という港町」に足を運んでいる。ふる里の香りがするからだ。

少年の頃、浜辺で「かもめが飛んでいる」と言ったら、お前は漁師になれないよ、と笑われた。「あれはなあーゴメと呼ぶんだ」。

(了)

参考文献

函館市史
上ノ國村史
榎法華村史
北海道新聞
新潟日報

榎本武揚の言い分

木村 裕俊

一、開陽丸と「戊辰戦争」の勃発

慶応二年（一八六六）十月、榎本はオランダを出発して大西洋上にいた。大海原に出た途端、いきなり暴風雨に遭い、もう二週間以上も続いている。しかし「開陽丸」は、大波に身を任せるように揺られながらも、平然と進むことが出来ていた。徳川幕府がオランダに発注した最新鋭の軍艦であった。榎本は、この船の設計にも深く加わっており、その造船行程のすべてを確認して完成させた軍艦であった。たとえ嵐の中の航行であっても、揺れているというだけで、少しも不安はなかった。「素晴らしい船だ、こんな船は二度と造れないのではないか。これで徳川幕府は安泰だ。…」と、独り言をつぶやきながら満足していた。

開陽丸は慶応二年七月に竣工し、日本側に引き渡された。蒸気機関を搭載した木造帆船で、総排水量が二五九〇トン、長さ七三メートル、幅十三メートル、高さ四十五メートルの三本マストであった。当時としては、最新鋭であり、しかも装備された砲門は、榎本が特に設計を変更してまでこだわった施条砲を備えた、当時の世界でも群を抜く最強軍

艦であった。

榎本がオランダに向かったのは、文久二年（一八六二）であった。幕府がオランダに蒸気機関の軍艦を発注するにあたり、榎本を含め七名の若い幕臣たちを留学させたのであった。榎本らはオランダのハーグに下宿し、船舶運用術・砲術・蒸気機関学・国際法などを学んだ。また、オランダ政府の計らいで、観戦武官としてデンマークとプロイセン王国の戦況を体験している。そして、関係国の軍隊の戦線を見学し、実地に近代戦争の戦況を体験していた。この事は榎本にとって、後の「箱館戦争」で大いに役立ったことであろう。

半年の航海を終えて榎本は、慶応三年（一八六七）三月に横浜港に到着した。四年ぶりの日本であった。幕府の軍監奉行・勝海舟らに迎えられ、久々の再会を喜び合った。榎本は、勝らの推挙により、軍艦頭並に登用された。そして榎本がまず行ったのは、オランダ海軍に習って軍服を制定し、厳しい軍律を定めることから始めたのであった。

慶応三年は、十月に徳川幕府が「大政を奉還」して、新

しい政治体制を作ろうとした年であった。十四日に將軍慶喜は、朝廷に政權を返上した。これにより日本は、徳川宗家も含めた代表諸侯による新しい「公儀新政府」を發足させようとしていたのである。しかし薩長連合をはじめ討幕派は、あくまでも徳川幕府を完全に廢絶しようと画策していた。「大政奉還」後、關係代表藩の話合いが行われないまま十二月に入り、討幕派が遂に、朝廷内でクーデターを起し「王政復古の大号令」を發して新政府を強行に樹立してしまつた。

クーデターにより成立した新政府は、まだ勢力の衰えない幕府軍を挑發して、無理やり戰鬪に引き込み徹底的に潰す作戦に出たのであつた。慶応四年（一八六八）一月三日には、ついに薩長連合の挑發に乗せられ「鳥羽伏見の戦い」が始まつたのである。

一月六日に、幕府軍が敗れると、將軍慶喜は会津藩主ら数名だけを連れて大坂城を抜け出し、江戸城に帰つてしまつたのである。この日榎本は、幕府軍が「鳥羽伏見の戦い」で敗れたことを知り、將軍慶喜に謁見して今後の戦い方について意見を述べようと船を降り、幕府軍本陣の大坂城へと向かつたのである。ところが、その將軍慶喜とは行き違ひとなり、慶喜は船長のいない開陽丸を無理に出航させ、船長を置き去りにしてそのまま江戸に向かつたのであつた。總大将が、大坂城にいる將兵たちを見捨てて江戸に帰つて

しまつたのである。前代未聞の出来事であつた。

榎本は大いに憤慨した。將兵を見捨てて、總大将だけが隠れて逃げるなどという戦いは今まで聞いたことがない。たとえ敗れたとしても、一矢報いるのが、武士の戦いである。戦いはまだ始まつたばかりではないか。徳川幕府には、数えきれないほどの幕臣と家来がいる、その者たちを一体どうしようとしているのか。榎本の心にやり切れない気持ちが、暗雲のように覆いかぶさつてくるのである。しかし、將軍慶喜を嘆いても最早どうしようもなかつた。主を失つて、大坂城に残された將兵たちは、そのまま自主解散のようになつて、潮が引くように誰も居なくなつた。

榎本は止むを得ず、大坂城に残されていた書類等を整理した。この時、城内に金十八万両が残されていることを發見したのである。これを持ち出し、富士山丸に積込んで江戸に向かつた。この金額は軍資金として「箱館戦争」で使われた。この時、同じ富士山丸にフランスの軍事顧問団のブリュネ一行も同乗していた。ブリュネ自身も、榎本の嘆きと大坂での最後の始末の様子を見て、同情するものがあったのではないだろうか。そのことが、後に榎本と行動を共にして箱館に向かう決意をさせたのかもしれない。

二、榎本の要求

「鳥羽伏見の戦い」で勝利した新政府軍には、最早大き

な敵はなく東海道を難無く進軍して、三月には江戸城を攻撃できる所にまで迫っていた。將軍慶喜はすでに江戸城を離れ、新政府に対して恭順の姿勢を示している。幕府は勝海舟に全権を委任して、新政府軍の西郷隆盛と降伏条件の交渉を行っていた。交渉は以下の条件で決した。(主目)

一、徳川慶喜は隠居の上、水戸藩にて謹慎すること。徳川家は田安家(御三卿家)から家達(いえさと)を後継させる。その上で、徳川家は新たに七十万石で静岡駿府藩に移封する。

一、江戸城は、尾張徳川家預かりとする。

一、旧幕府軍が所有していた武器・軍艦は、全て新政府軍に引き渡す。

これで、江戸城の攻撃は中止されたのである。

ちなみに徳川家が、静岡駿府藩として七十万石の大名になるということは、これまでの徳川宗家四百万石と徳川家旗本家臣団三百万石の、合わせて七百万石が全て新政府に召し上げられ、その上で十分の一に当たる石高の大名になったということである。これでは、徳川八万旗といわれる旗本家臣団と、その家来・使用人の生活は成り立たない。

また、旧幕府軍は「鳥羽伏見の戦い」で新政府軍から、朝廷に反逆する「賊軍」勢力であると決め付けられた。幕府側は「大政奉還」をしており、その上で天皇を中心とした政治機構に賛成しており、「公儀新政体」への参加も表明

していた。断じて朝廷の反逆勢力ではなかったのである。武士として生きて来た榎本にとつて、この「誇り」は自らの曲げられない人生観であり、捨て置く訳にはいかなかったのである。自らも徳川家臣団の一員である榎本としては、この二点は譲ることの出来ない問題だったのである。

慶応四年(一八六八)四月に、江戸城は無血開城された。武器も軍艦もみな新政府側に引き渡されることになった。しかし榎本は、これを船上で断固として拒否していたのであった。榎本の指揮下にあった幕府艦隊は、品川沖で海上から新政府軍に無言の圧力をかけ続けていた。新政府軍も無為に時を過こした訳ではないが、新政府の貧弱な海軍力では、榎本艦隊を抑えられなかったのである。

榎本武揚は、江戸湾品川沖でじつと待っていた。新政府側からの返事を、である。榎本は、新政府に対して「徳川幕府への二百数十年の恩顧を忘れた一部の強藩の措置」として糾弾し、徳川幕府を「朝廷に背いた賊軍」と決めつけたことを撤回させ、「生活を奪われた徳川家臣団をエゾ地に派遣し、開拓と北方防備の役割を担わせる」ことの二点を新政府側に強く要求していたのであった。

榎本はその後も、機会を求めては再三にわたって繰り返し新政府側に要望書を提出していた。そして根気強く回答を待ち続けていた。しかし、新政府側からは何の音沙汰もなく、完全に無視された形であった。

八月十九日、ついに榎本は開陽丸以下八隻の艦隊を率いて品川を出発し、北に向かった。榎本は、江戸を離れるにあたって、勝海舟、山岡鉄太郎、関口良輔の三人に宛てた『書状』を書き、同時に新政府に宛てた『告文』をこの三人に託している。これ等の書状には、榎本のエゾ地に向かう心意気が見えており、榎本が新政府軍に対して「物事の道理」を説いているようにも思えるのである。以下に勝ら三名に宛てた『書状』と新政府側に託した『告文』の主旨を掲載する。

『榎本釜次郎書状』

寸書拝啓、秋冷の候。

皆様には、益々ご壮健に忙しくされていることと存じ、実に喜びに堪えません。

申し上げますと、私たち一同はこの度、この地を退去することに致しました。

私たちの本心・情実とは別紙の通りでございます。皆様方でご回覧の上、出来れば新政府の鎮將府へお届け下さるようお願い致します。

もともと、朝廷ならびに軍防局へはそれぞれ手づるを以て差し出したのですが、届いたのかどうかも分かりません。

この事で貴方様方を煩わせることとなりますが、宜しくお願い致します。

私たちの今回のこの行動は、決して良い方法とはいえませんが、これをもって、長く天皇を中心とした政体が一つにまとまる基礎になれば、と思っております。

目下、今日の情勢では言葉をもって行うより、行動による方法しかないと思ひ致しまして、この挙に及んだ次第です。それ以外の他意は御座いません。

天がもし私たちを見捨てなければ、めでたく再びお会いすることが出来るでしょうが、叶わぬ時には、すなわち命はありません。

私たちの結果がうまく熟するように願っています。

おそれながら私は、新政府の役人方によく議論いただき、物事の順序を宜しく見極めて欲しいのです。

生前の一語として、祈っております。

八月十九日 榎本釜次郎より

勝安房守様、山岡鉄太郎様、関口良輔様 各位

『徳川家臣大挙告文』

天皇を中心とした新しい日本の政体は、未来の幸福に満ち溢れている。我等もまたそうした将来を希望していた所であった。

しかしながら、今日までの新政府による政体の在り方は、「公明正大」であるというが、その実態は必ずしもそうはなっていない。

新政府軍が京から江戸に東下するや、わが徳川幕府の將軍を陥れるのに「朝敵」の汚名を以て充てた。そして敗戦後の処置は甚だしく、遂にはその領地と蔵入りのものを全て押収してしまい、祖先からの地を棄てさせ、その墳墓を祀（まつ）る事さえ出来なくなってしまう。そして旧幕臣たちの領地も取り上げて官有としてしまい、家臣たちは家を保つことさえ出来なくなったのである。これも又甚だしい行為ではないか。

これは一つに、（薩・長をはじめとする）強藩の私意から出た政策によるもので、（天皇を中心にした）真の王政とはとても言えるものではない。我等は、泣いてこれを朝廷の役人に訴え出たが、組織が梗塞しその実情が上に伝えられなかった。

故に我等はこの地を去り、長く真に朝廷の政治を助け、和解の一助となるようにその基礎を築きたいと考えたのである。

全国の総ての士民平民を問わず、道義を守り、これまで数百年続いた武士の時代の怠惰した悪弊を洗い清め、人々の意気を鼓舞して、日本国が世界全体と肩を並べて堂々と歩むことが出来るようにしたい、我等の願いはただこの一挙にある。

こうした政策の実行は、あえて我等が自らに任じて行うこととする。朝廷におわす君子も、水辺林下に遁れた

隠士たちも、いやしくも世の中の道理が分かり志ある者は、どうか我等の主張を聞いて欲しい。

（原文は漢文）

榎本武揚の本当の目的は、新政府の承諾を得た上で旧幕臣の自分たちが「未開のエゾ地の開拓」を行い、南下政策を進めるロシアの圧力から「北門の嚴重な守りを固める」ことであつた。しかしこの嘆願は、新政府側に何度も繰り返し打診したが、全く無視されたままで返事はなかつた。そのため榎本は、新政府の許可を待たず『告文』の「こうした政策の実行は、敢えて我等が自らに任じて行う」として北へ向かうこととしたのであつた。

八月に入つて榎本は、いよいよ出港準備に取り掛かつていた。勝海舟からは、くれぐれも軽率妄動は慎むように言われていた。海舟の前ではあいまいな表情をしていたが、心の中ではもはや動かせないものになつていた。八月十五日に、徳川宗家を継いだ当時六歳の田安亀之助（後の徳川家達・いえさと）は、静岡駿河藩七十万石の新藩主となつて、駿府城に入城した。榎本はこれを確認した後の、十九日深夜に艦隊を品川沖から静かに出港させたのであつた。

榎本は出来たばかりの静岡駿河藩、徳川宗家には自分たちの行動で迷惑はかけたくなかつた。そのためこの度の行動は、新藩主が駿河城に入城した後に起こそうと決めていたのである。これは榎本が自軍を「旧幕府脱走軍」と呼ん

だことがあったが、これも自分たちは今後徳川宗家と全く関係ないということを、あえてアピールしたのだといわれている。

榎本艦隊は開陽丸を旗艦として、八艘で編隊を組んでいた。品川沖を出港した榎本艦隊は、その翌日から台風崩れの暴風雨が続き、途中で八艘の編隊がバラバラになってしまい、二艘の船を見失ってしまった。ほかの六艘は何とか仙台沖に集結することが出来たので、直ちに仙台で修理することとした。

九月に入り、榎本は仙台で「奥羽越列藩同盟」の会議に出席し、諸藩に奮起を促したが、大勢としては降伏に傾いていた。この時点ではまだ会津での戦闘は続いていたが、その情勢は既に目に見えていた。そのためか戦線から撤退する兵士も多く、榎本艦隊に望みを託そうとする将兵らが続々と集まって来た。榎本艦隊は結局の所、桑名藩主、備中松山藩主や大島圭介、土方歳三らと共に、伝習隊・衝鋒隊・額兵隊など約千人を新たに収容することとした。これで榎本艦隊の総勢はおよそ三千人となったのであった。

この時期榎本は、新政府軍の仙台追討総督四条隆謨（たかうた）が仙台に入るため、平潟口まで来ていることを知り、同総督に宛てて旧幕臣を救済するための「エゾ地開拓を目指す嘆願書」を提出している。しかしその後新政府軍は、仙台に迫って来たため、余計な戦いを避けるために、

十月十二日には仙台を離れエゾ地に向けて北上したのであった。

榎本はこのように、これまでも、これからも、新政府側と接触する機会があるごとに、何度も旧幕臣たちの「エゾ地開拓」と賊軍と決めつけた「名誉回復」についての嘆願書を繰り返し提出していた。また、新政府軍との戦闘についても、最初の戦いを自軍の方から仕掛けることはなかった。すべて新政府軍側から挑発された戦いであった。

三、エゾ地での戦いと主張

エゾ地に着いた榎本艦隊は、箱館港に直接入港すること避けた。箱館港には、弁天台場などの防備施設があり、新政府軍がこれを守備・管理していた。ここで一戦交えると、港内の外国船などにも危険が及び、国際協定上問題が大きい。そのため榎本は危険を避けて安全な場所に上陸することとした。上陸さえしてしまえば、兵力的には榎本軍の方が圧倒的に多かったので、新政府軍を難無く撃破できると考えていた。そうした配慮から、十月二十一日に箱館から四十五キロメートルほど北にある鷲ノ木村（現・森町）に上陸したのである。

榎本武揚はここでも、新政府箱館府知事・清水谷公考（きんなる）にまず「嘆願書」を提出し、新政府側の理解を得ようとした。その内容は「自分たち旧幕府軍は、エゾ地で

開拓と北方警備を行い新政府に協力したい。ついで、自分たちのエゾ地への入植を許可して欲しい。また、中央政府にもこのことを斡旋して欲しい。」というものであった。榎本はこの「嘆願書」を人見勝太郎ほか三十名の先遣隊に預けて清水谷府知事への使者として先行させた。先遣隊は、無用な戦いを避けて交渉の下準備が出来る程度の人数にした。

残る約三千人の本隊は上陸後部隊を二手に分けて進んだ。一隊は、駒ヶ岳裾野を箱館方面に南下し峠下村・七重村（現・七飯町）から箱館に向かう大島圭介の部隊と、もう一隊は噴火湾沿いの鹿部から川汲を経由して湯ノ川から箱館を目指す土方歳三の部隊が続いた。

榎本から「嘆願書」を託された人見先遣隊は、十月二十二日に峠下村まで来た時に、不意に新政府軍から奇襲攻撃を受けた。これが箱館戦争の始まりであった。戦いは新政府軍の拙攻もあり、三十人の奮闘で何とか持ちこたえて二十四日に後続の大島隊と合流し、箱館府軍を退けることが出来た。また川汲峠（現・函館市）に差しかった土方隊も、箱館府軍の攻撃を受けたがこれも敗走させている。旧幕府軍は、東北戦線で実戦に慣れていたためか、新政府軍をほとんど問題にできなかった。峠下村の戦線は、大野村（現・北斗市）、七重村（現・七飯町）に拡大していったが、いずれも箱館府軍が敗戦した。この報告に清水谷箱館府知

事は、たまらず五稜郭を放棄して青森に撤退したのであった。

榎本隊が五稜郭に入城したのは、十月二十八日であった。エゾ地に入り、五日目で箱館の街を占拠し、八日目で五稜郭に入城している。開陽丸をはじめとする榎本艦隊も、箱館港に入港した。しかし、当初の目標としていた箱館府知事に「嘆願書」を提出し、エゾ地での処遇を交渉しようと考えていた目論見は、実現出来なかった。

榎本は、松前藩の説得にもすぐに取りかかった。松前藩はほんの二年ほど前まで、第十二代藩主の崇広（たかひろ）が徳川幕府の老中職を勤め、幕府の要を担っていた藩である。三ヶ月ほど前まで「奥羽越列藩同盟」にも参加していた藩である。従って、榎本武揚のみならず旧幕府軍幹部のほとんどは「今は新政府側に就いているが、旧幕府軍側の立場を理解しているもの」と確信していた。しかし実態は、藩の勢力は守旧派と尊王攘夷を主張する改革派の二派に分かれて激しい勢力争いが続いていた。この年七月に藩内でクーデターが起こり改革派の「正義隊」が実権を握り、藩内を改革派で固めてしまっていた。

榎本は松前藩に対しても、「旧幕府軍がエゾ地に来たのは、エゾ地の開拓と北方警備のためであり、松前藩の理解と協力を要望する」として、松前藩と和を図り交渉を求める使者を送った。しかし改革派で固めた松前藩には、榎本のこ

の思いは届かなかった。松前藩は、使者を殺し、断固戦うことを旧幕府軍に宣言したのである。そのため旧幕府軍は十一月五日に至って、土方歳三を司令官とした七百人の軍隊を編成して松前城下に出陣させた。

松前城下には、わずかな兵しか残っていなかった。江戸屋敷や、東北梁川飛び地の管理、厚沢部の新城、箱館府への出向などに割かれ、松前城で戦える兵員は四・五百人足らずだった。敗戦は時間の問題で、松前藩の兵たちは城下に火を放ち江差方面から館城を目指して敗走した。

十一月十日、館城への攻撃には松岡四郎次郎が向かった。五稜郭から江差街道を経由して、厚沢部に入った松岡隊は約五百の兵を率いて館城へと向かった。館城は未元の城で、城を守るための施設が機能していなかった。また、松岡隊の到着が予想していたよりずっと早く、同月十四日には落城してしまった。松前藩主徳広一行は、熊石から船で津軽方面に逃げ渡って行った。しかし病弱であった徳広は、弘前薬王院で遂に逝去してしまった。

旧幕府軍に拿捕され、投降した松前藩士はおよそ四百人であった。旧幕府軍と松前藩との交渉で、松前藩士たちの措置が決められた。この旧幕府軍の松前藩に示した行動内容は、松前藩士にとってはほとんど拘束力を伴わない、いわば「寛大な措置」であった。このような措置もいわば、榎本をはじめ旧幕府軍幹部たちの、松前藩に対する思い入

れが大きかったことを示すものだったのかもしれない。旧幕府軍と松前藩の「覚書」の内容（主旨）を以下に示す。

一、藩主徳広の所に行きたい者は、渡海して青森に行ってもよい。但し武器は置いていくこと。

二、帰農・帰商を願う者は、庶民とする。ただし農を願うもの、商を願うものはそれぞれ、その村や街の支配の許可を得ること。

三、旧幕府軍に加わりたいと願う者は帯刀を許す。食料を与え、待遇は我兵と同じにする。

という内容であった。藩士たちは、やはり藩主の後を慕って渡海するものが圧倒的に多かったという。但し松前藩士は、翌年の「己巳（きし）」の役では官軍の先鋒部隊となり、かなり凄惨な行為を繰り返していた。「恩をあだで返した」形であった。

明治元年の松前藩との戦いの最中、榎本にとってショッキングな事態が発生した。無敵艦船といわれた開陽丸が、江差沖で嵐に遭い座礁・沈没してしまったのである。開陽丸の軍備力は新政府軍の海軍力をはるかに凌ぐ実力であり、それが榎本軍の心理的な大きな力にもなっていた。

十一月十五日、榎本は江差攻略の支援に開陽丸を参加させたのであった。江差攻略には、何も開陽丸ほどの戦艦が参加しなくてもよかったのであるが、内外に開陽丸の威力を見せつけたかったのであった。ただ油断したのは、江差

沖の地形を調査しないまま上陸したことで、この季節江差地方に吹く強い西風「タバ風」を軽く見ていたことだったのではないか。榎本軍が開陽丸を失ったことで、エゾ地沿岸と津軽海峡の制海権を維持出来なくなり、翌年の戦いで新政府軍のエゾ地上陸を簡単に許し、戦局に大きな影響を与えてしまった。

話を戻して、松前軍が榎本軍に降伏したのは、十一月二十二日のことであつた。一般にこの日をもつて榎本軍はエゾ地を平定したことになる。そして、これをもつて「エゾ共和国」の成立とか、「箱館政權」樹立などともいわれた。しかし当の榎本は「新政權などは考えていない。エゾ地は日本国天皇の領地であり、我々は天皇の臣民である。」と述べていたという。ただ、諸外国との交渉などには「エゾ共和国」という曖昧な定義を利用して有利な交渉を展開していたようである。

また、日本で初めてという「入れ札選挙」の実施も新政權の代名詞になっているが、これも榎本軍の中で真のリーダーを決め、グループの中で士官以上の役職を決める参考にするための選挙であつたといわれている。榎本軍の中には、元藩主や元幕府老中などの大格の人たちも参加しており、上下関係が複雑に絡み合っていた。組織も海軍と陸軍の派閥があり、その中でも小さな部隊ごとの派閥もあり、全体にまとまりに欠ける集団であつた。そこで、西洋式の

選挙をまねた「入れ札選挙」を行つたのである。組織の矛盾を解決するための方法であつた。国の代表を決める選挙であれば、国民となるべき住民も選挙に参加しなければ有効な手段とはいえないだろう。

榎本に新国家樹立の気持ちが無かつたことは、十二月に入ってから明治新政府に対して再び「エゾ地開拓を求める」嘆願書をイギリスとフランスの艦長に託していたことでもわかる。ただこの嘆願書は、両国とも艦長から公使に託され、公使から新政府の役人に渡された。これを見た新政府の岩倉具視は、ほとんど時間を置かずに、すぐに「却下」したという。岩倉には、榎本の立案した政策など検討にも価値のないものであつたのであろう。

この時期、榎本の気持ちを読み取れるような書簡がある。十月二十六日の日付のあるもので、箱館府との戦線で勝利して五稜郭に入り、松前藩政略直前の時期のものである。宛先は、イギリスとフランスの公使である。その主旨を以下に示す。

我輩、今度の挙動は見込みの通りとなつた。それは官軍がこの戦いの中で、見苦しくも自分の持場を打ち棄てて、我等に何の異議も唱えずにその地を明け渡してしまつたからである。

あなた方にもすでに「推察出来ていると思うが、官軍は我等を法律も知らない「海賊」だと思つていよう」だ

が、我等は海賊にあらず。その証拠を官軍に見せたまき故、エゾ地を平定することとしたのである。そして、我輩より官軍に書簡を送って、官軍のそれぞれの持ち場を持つた者がそのまま残ることがあれば、我方としてもその者たちを守ることにについて、掛け声だけで終わらないように申し遣わしたが、彼らはこれを無視し、恥を忘れて逃げ去ってしまった。

依って我方の手により、止むを得ず奉行所を預ることとした。我等から相当の役人を申し付け、諸税・海運の業務を申し受けることとした。取り集めた諸税は、我方から後日、江戸表に差送るよう申し上げる。

我等から今後、新しい政（まつりごと）を行うことを知らしめるため、近郷・近在の名主たちに集まってもらったが、皆我輩の旧来からの知り合い人であり、心中もよく存じ上げた人たちばかりである。

故に、日本人の取締りの向きにも、外国人に対しての取扱いについても、我等がここにあるときには何の不都合もない。

我輩は松前藩とは、争論致したくないと願っている。彼らから手出ししないうちにこちらから発砲するようなことはない。また、諸道を固め敵兵を防ぎ、当所を守護することは当然のことであるが、それ以外でもやむを得ない場合には当然兵力を用いる。

我輩には今、自分を守るだけの力は十分にある。これから何卒、日本人の手により、日本を支配したいと望んでいる。どうか外国より手出しのないように祈っている。

とある。最初は新政府軍の戦い方に対する批評をし、次いで旧幕府軍を「賊軍」と決めつけたことへの批判と、どちらがそう見えるのかと切り返している。新政府側が五稜郭とその業務を放棄するのであれば、榎本軍がこれを行うとし、運上金が集まったら江戸表に送ってやると表明している。次に自分たちの政治・政策は、地域住民に支持されていることを強調している。そして今後については、松前藩との戦いは出来れば避けたいが、やむを得なければ戦うという態度である。最後に、書簡相手のイギリス、フランスに対して、榎本軍には自分たちを守る力は十分あるので、何卒外国からの干渉をしないで見守って頂きたい、と要望して終わっている。

四、「碧血碑」と榎本の鎮魂

榎本軍がエゾ地を平定して、自らの信念に基づいて政策を実施した期間は、余りにも短かった。年が明けて明治二年（一八六九）、エゾ地の雪も解け始めた四月に入って、新政府軍は乙部に上陸し攻撃を開始して来た。開陽丸を失い制海権を無くした旧幕府軍は、簡単に上陸を許し、軍艦で

何度も波状的に上陸を繰り返す新政府軍を阻止できなかった。この時エゾ地に上陸した新政府軍は八千人といわれ、旧幕府軍三千人を圧倒的に超える勢力であった。旧幕府軍の主要施設を次々と攻め、江差、松前、福島、木古内などに兵を進め、新政府軍の攻撃が始まって一月ほどで、あつという間に旧幕府軍は箱館と五稜郭を中心とする地域に追い詰められてしまった。

新政府軍は五月十一日を「箱館地区総攻撃の日」と定めて箱館戦が始まり、市街で激しい戦闘が繰り広げられた。しかし、これらの戦闘も時間の問題で、市内の守備施設も制圧されつつあった。五月十六日に至って、千代ヶ岱陣屋に立て籠もっていた中島三郎助父子の壮絶な戦いが最後の戦闘となったのであった。榎本は、この時中島父子に五稜郭に集まるよう命令したが、死を覚悟していた中島父子は受け入れなかったという。

すべてが終わったのであった。降伏の前夜、新政府軍総督の黒田清隆から差し入れがあり、五稜郭では最後の宴が開かれていた。榎本はこの時、自室に籠っていた。死を覚悟していたのである。床に正座して軍服を開き、静かに脇差を抜いた。その時、背後に何か気配のようなものを感じたのであった。偶然通りかかった秘書役の大塚霍之丞（かくのじょう）であった。次の瞬間、大塚は大声を出して飛び込み、素手で脇差をつかんで離さなかった。この騒ぎで人

が集まり、榎本の体から力が抜けてしまった。大塚の手から鮮血が溢れ、右手の指が切れてしまっていた。この時初めて榎本は、降伏することを決断したのだという。

榎本には死ぬことも許されなかったのである。これまでも青年の頃から、徳川幕府の中で幹部候補生として教育され、責任感を背負わされてきた。それを一身に担って、部下を思い、国家を憂えてきた。オランダから青雲の志を持つて帰国すると、祖国は革命の最中にあつた。新政府は薩長士肥の田舎侍と、政治とはほとんど無縁で無智な公家たちの寄り合い所帯で、外交は拙劣で居留地にいる外国人を納得させる政策は全くなされなかった。

平和裡の内にオールジャパン体制の政治組織を作ろうと「大政を奉還」したはずの徳川幕府は、何故か「賊軍」の汚名を着せられてしまったのである。明日からの生活に困る家臣団の面倒は、誰も見向きもしてくれない。そのため、自らエゾ地に渡り「開拓と防備」の任を目指したのであった。そして国際港箱館において、欧米諸国との交渉も自分が行なおうと決心したのであったが、情勢は許さなかったのである。

榎本武揚の生き方は、余りにも純粋であり、結果として無謀であったのかもしれない。榎本は品川沖を出てから、常に自分と共にある兵士たちの心情を考えていた。彼らもまた北の箱館で、自分と同じような「青雲の志」を持つて

いたと信じて生きて来たのであった。

戦いが終つて榎本以下七名の幹部たちは、東京辰の口の軍務糾問所の牢獄に収監された。収監中、敵将の黒田清隆が榎本の才能を見抜き、助命嘆願に奔走していたという。その甲斐あつてか、明治五年（一八七二）に榎本らは特命を以て釈放された。

そして同年には新政府から「開拓使に出仕」するようにとの辞令を受け、新政府の一員として働くよう要請され、これを受けた。明治政府内での榎本は、幕臣出身者の大物として活躍し、最終的には、政府内では通信大臣や農商務大臣も歴任した。政府の内外でもその出世をねたみ、「二主に仕える」などと非難する声もあつたが、榎本と仕事を対等に張り合える者は誰もいなかった。

明治八年（一八七五）、箱館戦争が終つて七回忌を迎える時に、函館・谷地頭の丘に榎本や大鳥をはじめ、後年まで生き残った人たちと協力して「碧血碑」を建てた。開陽丸で品川沖を出港してから、奥羽・エゾ地で戦死した旧幕臣とその同志のために建てた「慰霊碑」であつた。この碑に眠る英霊の数は榎本が整理した『戦死者過去帳』によると、八一六名にも上る。碧血碑の裏面の石板には、以下のように文字が刻まれている。「」内は、漢詩の主旨である。

明治辰巳

「明治辰巳の年（元年と二年のこと）」

實有此事

「実際にこの事（箱館戦争）があつた。」

立石山上 「（そのため）山上に石（石碑）を立て」

以表厥志 「それをもって（犠牲になったあなた方への）志を表します。」

明治八年五月

箱館戦争が終結して七回忌を過ぎたこの時期になつても、なお直接的な表現を避けて世間を憚っていたのである。それでも榎本は、この碑を建てて、自分のために尽した多くの戦友たちを心から祀つたのである。

碧血碑の「碧血」とは、中国の故事で「義に殉じた武人の血は、三年経つと碧玉（宝玉）に化す」といわれている。榎本にとつては、果せなかつたが、彼らと同じ志をエゾ地まで持つて来て、懸命に前を向いて進もうとしたことが「碧玉」だったのである。

後に榎本が明治政府の中で、休みなく働き続けてきたのは、「碧血碑」に眠る英霊たちに彼の作つた新しい日本の姿を見てもらいたいという慰霊の気持ちがあつたからである。

明治四十年（一九〇七）、榎本武揚七十一歳の時、榎本は改めて碧血碑に祀られている御霊八一六名の名簿、榎本が知り得る全員の名前を掲載した『明治辰巳之役東軍戦没者過去帳』（函館市中央図書館蔵）を書き上げた。明治二年、戦いが終つて路傍に打ち棄てられていた旧幕府軍犠牲者の埋葬に力を貸してくれた、函館市民に感謝しつつこの名簿を整理したという。榎本はこの名簿を整理した翌年、明治

四十一年に帰らぬ人となっている。享年七十三歳であつたという。「序文」の主旨を掲載しつつ筆を置く。

【序文（主旨）】

戊辰之役で、我が軍に属して函館その他の各地で戦死した者の遺骨は、当時は憚る所あり、これを顧みる者は、ほとんどいなかった。ここに俠客柳川熊吉なるものがあり、実行寺の住職と諮り、自ら収拾の勞を取り、これを谷地頭の丘に埋葬した。

後に同志等が相諮り、一片の石碑を建て「碧血碑」と名付けた。

明治四十年七月 榎本武揚 印

(了)

連作短編集「ファイフティピープル（50人の人々）」を読む

菱井

亜紀

誰もが自分の人生の主人公で他の人の人生の登場人物であることを思いおこさせてくれる」という紹介文にひかれて手に取った本。表紙には50人の似顔絵がシンプルな線で描かれていてそれぞれの話に登場する人物を印象づけるようになっている。

舞台はある地方都市の大学病院とその周辺で、医師、看護師、インターンなどの病院関係者、患者とその家族、あるいは病院に物資を納入する業者、大学病院の図書室で働く司書や、中には病院で亡くなった患者を地下の霊安室に運ぶ役の人など総勢50人の物語。登場人物の一人一人の来歴や出来事がそれぞれ短く語られるいわば群像劇で、一人の物語は短く淡々と事実が語られるだけなのだが、よく読むとそのうちの誰かと誰かがどこかでつながっていたりする。例えばある1話。

卓越した手術の腕を持つ女医の話

彼女はいつも冷静で的確な判断と技術を持ち、若いのに他の医師たちから天才医師として一目置かれる存在だ。ある

とき手術中に倒れそうになった。やはり気が張り詰めていたせいで過労気味だったのだろう。幸い、すんでのところ誰かが倒れ掛かる彼女を支えてくれたことなきをえた。それは彼女の手術にいつも控えている麻酔科の医師だった。後日、病院の廊下でばったりあつた彼にお礼にお茶をご馳走したいと申し出る。病院の前のカフェで仕事が始まるまでのごく短時間の間だが、仕事人間の彼女にはそれでも精いっぱいのお礼の表し方なのだった。

麻酔科の医師の話

彼はいつも目立たない存在だ。麻酔科はいわば縁の下の力持ちなのだが手術の間気を張っていないなくてはならない。しかし彼女の手術の時はまた別の緊張がある。彼はひそかに彼女に好意をもっていた。だからずっと彼女を見守っていた。彼女が倒れそうになった時もとさに彼女をささえることができたのはそのせいだ。そうとは知らないその場に居合わせたスタッフたちは「すごい瞬発力だね」と感心してくれたが、その彼女がお茶にさそってくれた。舞い上がらなばかりの彼は彼女

から「お茶をこちそうしたお札に今度映画に誘つて下さい」と言われ緊張のあまり気の利いた返事ができなかった。それでも仕事に行く彼女を見送つてやつと我に返つて確信する。「彼女は僕の気持ちが変わつていたのだ」と。

天才的な腕を持ち誰からも注目される彼女はいつも緊張していきつと見えない疲労をためていたのだ。ひそかに彼女を思つている不器用な彼が自分を見つめていてくれたことにやつとおもひあたる。ほほえましいカプセルはこれからどうなつていくだろう。

救急医療室の医師の話

大学病院にはいつも重症患者が運ばれてくる。心臓の機能が低下してマッサージが必要な患者もいる。成功して息を吹き返す場合もあるがむなしい努力に終わることもある。それでもマッサージはやめられない。たとえ無駄な努力とわかつていても。今日は交通事故で意識を失つた患者が運ばれてきた。血だらけの患者の心臓マッサージを終え、血まみれになつた手を洗つて、ふと視界に入つたのは部屋の隅で頭を振り続けていた男だつた。どうしたのかとそばにいたインターンに聞くと耳に蜂が入ってしまったのだという。その男は、耳の中を刺された痛みと耳をつんざくような羽音とに卒倒しそうになつて治療室に運ばれてきたものの自分より重篤な患者が次々運ばれてきて診てほしいとはいひだせず気が遠くなりなが

ら結局そこで2時間我慢していたのだという。

気の毒になつた医師がすぐに処置をしたが取り出された蜂はびつくりするくらい大きかつた。彼はプラスチックの小さな箱に蜂を入れてその男にプレゼントすることにした。それを見にインターンたちが集まつてきた。

壮絶な救急医療現場のピリピリした緊迫感が伝わってくる描写と、対照的な男のどこかのどかな振る舞い、それに反応してしまつたのか、災難のもとである蜂を思わずプレゼントしてしまう医師の行為と、それを物珍しそうに見物にやつてくるインターンたち。そのどれもがそこはかとなくおかしく、そして物悲しい。

蜂が耳に入つてしまつた男の話

蜂に耳に入られたなんて信じられないわ、と妻が言う。彼女はつきりものをいうタイプだから同情したりしない。ドジなのは男の方だ。でもそんな彼を選んできたのも妻だ。最初の妻が30代で亡くなつた時、娘は幼くて泣いてばかりいた。5年前に今の妻と出会つたとき中学生になつていた娘がどう思うかそれが一番心配だつた。若くてキャリアウーマンだつた彼女は意外なことに娘とうまがあつた。彼女は遠慮なくものをいう一方でとても心配りのできる人間だつたのだと今ではよくわかる。

娘が大学生になつた今では一緒に服を買いにいきコンサー

トにも二人で出かける。心配事がなくなつたわけではないが、それでも妻を病気で亡くして落ち込んでいた時に比べれば今はずつと幸せだ。蜂の被害にあつたのはまあご愛敬といえるかもしれない、と男は思う。

人は、能天氣に暮らしているように見えてもどこかにつらい思いや過去の傷をかかえていたりする。他人を思いやる気持ちもそこから生まれてくるのかもしれない。

スナックのマスターの話

大学病院の近くで営業していたが、いろいろあつて店を閉めることにした。好きで集めていたジャズのCDも友達に譲ることにして。いつも明るいうちに來てカウンターの隅でジャズを聴いている品の良い老紳士がいる。注文するのはノンアルコールのものばかり。下戸なのかもしれないと思うがどこか病氣なのかもしれないと思う。年上の人に失礼かと思ひ今まで聞いたことはない。今日も彼はやつて來た…。最後の日だからと思ひ、いつものようにジャズに耳を傾けている老紳士に思ひきつて声をかけてみた。彼は、車で通勤していて、渋滞する時間をさけて帰宅するためにこうして時間をつぶしているのだという。アルコールを避けたのはそのせいだった。それにジャズは私の若いころの思い出の音楽なんですね、と思ひ出話をしてくれた。若いころアメリカに留学したが貧乏学生だったので食費を削つてジャズを聴きに行ったこと。お腹を空かせて聞い

たジャズが心を満たしてくれたのが今は懐かしい思い出ということ。最後の日に老紳士の話を聞けて本当に良かった、とマスターはおもつた。

老医師の話

長年医療に携わつてきたが、今は診断も手術もコンピュータでできてしまう時代だ。なるべく若い人の邪魔にならないようにしようと思うが、患者を前に困惑する新人医師が氣の毒で、余計なお世話とは思つたが触診してその結果患者の病氣を見つけたことが何度かあつた。若い医師から尊敬のまなざしで見られることもあるがそれは少し面はゆい。これには長年の経験と勘もあるが運もあるからだ。奨学金で大学に入れたのも公費で留学できたのも、もちろん努力もしたが人に助けられ運にも恵まれたせいだと思つている。子どもには恵まれなかったが妻と二人仲良く暮らしてきた。思えばこの年になるまで二人で生きられるのはとても運のよいことだ。そうではない例をたくさん見てきたからしみじみそう思う。少しでもその運を返したくてボランティアで貧しい地区での無料検診をしている。ある時そこで小さい男の子に 医者になるにはどうすればいいですかと聞かれた。あまり勉強はできないのだけど、と付け加えて。もちろん勉強も必要だね。でも運も必要なんだよ。どれ、坊やに運を分けてあげよう」そういつて彼は温かい手で男の子の小さな手を包んだ。

男の子の話

彼の父親は大きな事故に遭つて意識がもどらないまま病院のベッドにいます。母親が働きに出ることになつて祖母の家に預けられることになった。男の子は祖母が学校まで彼を迎えに来るのを校庭で待つのが日課になった。心細い彼のそばにいつも一緒に待つていてくれる友達がいる。おばあちゃんには言えない話を友達にする。この頃ママがあまり話してくれない。僕のこと嫌になつたのかな「友達は言う。つかれてるからじゃないかな。うちのかあさんもそうだよ」

友達は貧しい地区の子だが、僕がお医者になつてお父さんを治してあげる」と言ってくれる。男の子はそれは難しいと思うが友達のやさしさがうれしい。だからもうすぐ引越さなければならぬ友達に自分の書いた絵をプレゼントしようと思う。おばあちゃんがプラスチックの額を買つてくれて裏に住所と電話番号を書いて渡すのだ。

男の子の友達の話

男の子の友達にも父親が不在だ。母親は遠くに働きに行つたというが、刑務所に入つてゐるのだと教える大人もいる。住んでいる家は市の宅地造成計画で立ち退きを迫られているが、母親は生まれたばかりの赤ちゃんがいて働きのでることができない。ある日学校から帰ると玄関と窓にテープが貼つてあ

り中からガスの匂いをする。彼は必死でテープをはがし中に入ると母親と赤ちゃんが倒れている。夢中で消防署に電話した。救急車がやつてきて誰か知つている大人はいないかと問われ、男の子からもつた絵の額をおもいだした。電話に出た男の子の母親に彼は叫ぶ「おばさん、たすけて」

男の子の母親は男の子と祖母と一緒に病院に駆けつけてくれた。赤ちゃんはすでに死んでいて母親の意識も戻らない。男の子の母親は一人ぼっちで家に帰ろうとする幼い彼に「今夜はうちに泊まりなさい」といい自らの気持ちを引き立てるように、今度、みんなで映画に行こうね」というのだ。

映画館にて

大学病院のすぐ前に建設中だった建物の中に映画館が開設された。こけら落としには大人も子供も楽しめる映画が上映されることになった。映画館には50人の登場人物たちの多くが、互いのつながりをそれと知らずに居合わせる。老医師や蜂の難に遭つた男、スナックのマスター、それにインターナたちや看護師の数人。もちろん初々しい恋人未満の二人も、母親に連れられた男の子と友達も。

しかし、上映が始まつて間もなく、地下の配電室から火災が発生したことがわかる。3階にある映画館まで煙が上がってくるのは速かつた。下には逃げ場がなく、階段を伝つて屋上に向かうしかないことがわかつて人々に緊張が走る。男の子

とその友達を連れた母親は両方の手で二人の子の手をしつかり握りしめる。これ以上、この子たちを不幸な目に遭わせることはできない」と。いたいけな子供たちに度重なる不幸が襲う。胸が痛くなる場面に涙が止まらなくなった。人生とはこんな風な理不尽さにみちている。しかしそんな中でも人々は冷静に行動し助けあおうとする。煙を吸わないようにハンカチを口に当てるようみんなに助言する看護師。未来のある若い人に道を譲って自分は後からいこうと決める老医師。励ましあつて救助を待った人々には、幸いなことに一人の死者もけが人もでなかった。建物は壊され、数年後にはここに映画館があつたことを思い出す人もなくなるかもしれない、と物語は締めくくられる。作者は二人の男の子について『小さな小さな子たちに過酷な運命を負わせてしまつて申し訳なく思う。いつかこの子たちが幸せな未来を送る物語を書きたい』と言っている」とは、この作品を訳した翻訳者の言葉である。

「となりの国のものがたり」というサブタイトルが付くこの小説は、最近注目されてきているという韓国80年代生まれの女性作家の一人の作品だ。コロナの影響で巣籠生活を余儀なくされた若い人々が、インターネットを通して韓国ドラマを観るようになったと聞く。韓国のドラマを長年視聴してきた私には、いまさらの感があるが、そういう私もこの国の若い

作家による小説作品に触れたのはごく最近のことだ。もちろん歴史や国民感情も異なる人々の世界である。にもかかわらず共感できるのは登場する人々が私たちと同じような日常を生きているのだと実感できるからだ。人は自分の人生の主人公であり誰かの人生の登場人物だということがしじみ胸にしみる。

平凡に生きる人々のささやかな喜びや人生の哀しみが断片的な叙述のなかに描かれる50人の物語は、隣の国のものがたりであると同時に私のすぐ隣に住む人々の物語でもあるのだ。

参考

「ライフ・タイム・ピープル」チンセン作 斎藤真理子訳

ノンフィクション

佳作

カラオケ・レクイエム・パーティー

～今季亡くなった歌い手達へ～

高橋 剛治

序

このノンフィクションは、友人のSさんが開催したカラオケ飲み会の後で、

「今日のカラオケ・ウンチク、文字にしたら面白いと思うよ。カラオケ好きの仲間に読ませるから纏めてよ」

そう勧められた文章を再編集した物です。

私としては、そんなに歌のウンチクが好きな人っていないのかな、と疑問に思わなくもないのですが、表題の（今季亡くなった歌い手達へ）の追悼の意味になるかな、とも思い、文字にしてみました。1項はそれを開催する事になる前段階の話ですので、（今季亡くなった歌い手達）にのみ興味のある方は、そこを飛ばし、2項及び4項をお読みいただければ良いかな、と思います。

1

飲み会の誘いが、Sさんから入ったのは、コロナ感染症の

非常事態宣言が明け、減少と再感染の波が交差する八月だった。

「まだ、感染リスクあつて駄目でしょう」

「函館は感染者、ずっと出て無いし、大丈夫だよ」

軽い持ち味全開で、Sさんは言う。

それはそうなのだが、人の密になる所は、まだ不味いのだと思つた。と言うのも去年の暮、昼カラの店でもらつたと思われるインフルエンザで、結構大事になつてしまつた経緯があつたからだ。私自身は一晩の頭痛で済んだので、単なる軽い風邪だと思つたのだったが、直ぐ後で妻が寝込み、通院してインフルエンザ感染が判明した。私自身は風邪も数年に一度位しか罹らず、通院した事も無いので、インフルエンザの診断は受けた事が無かつた。けれども、家に引きこもり気味で、他との接触の少ない妻は、感染源は私しかないと言ふ。

妻は気管支が弱いので、インフルエンザの罹患でも大変だつたので、今回のコロナ感染の流行には厳重な注意が必要となり、私には慎重な行動が必要とされていた。

四月末から五月は、スナック、カラオケ喫茶はじめカラオケ・ボックスも、全国的にほぼ休業だったのが、

『ボックスは、一人カラオケなら大丈夫じゃないのかなあ。全店閉店は無いな』

その間中、私は妻にこうボヤいていた。私はカラオケ・オタクなのだった。但し、それは歌唱に関する部分ではないので、歌は、あまりうまくわけではない。

『ボックスも、ヒトカラの人だけじゃ儲け出ないのよ。団体じゃないと』

だからヒトカラが安全でも、それオンリーでの営業は無いのだと言う。しかし何故か嬉しそうにニヤニヤしているのは、妻が、私の小さな痛痒を見る事に、小さな愉快を覚えるからだろう、と想像できた。

それでも六月辺りから徐々に店やボックスも再開し、我家もボックスでの一人カラオケと妻と二人のそれは解禁したが、スナックやカラオケ喫茶行きはまだ自粛している。

飲食店や観光関係者の経営、広く経済問題を考えると、とても悩ましい状況になっている様には思われたが、時々クラスタ―報道も出ていて、特効薬でもできない限り、完全に感染を抑え、安心する事はできないのではないかと思われ、妻の健康状態を抱える我家の事情では打つ手がなかった。

それでも、九月になって大分感染者が下がり、函館では感染者が、ずっと出ていない状況なので、百パーセントの安心

では無いが、

「アクリル板を用意する」

そのSさんの提案もあつて、またSさんへの信頼からか、

「Sさんの飲み会なら」

Sさんとは面識も無いのだが、思い込みの強い妻の了解もあり、参加に同意した。

＊

「久しぶりだね。追悼カラオケ会だから、本当はお盆頃に開催したかったんだけどね」

待合せの場で、Sさんが言い、

「やっぱり奥さんは一緒に来ないの」

と続けた。

「申し訳ない。コロナ警戒もあるけど、相変わらずの人見知りですよ」

妻は学生時代に合唱部にいたので、カラオケの歌唱力は高いのだが、基本的には人とのフリートークを苦手としていて、単に参列していれば良い、と言う場合を例外に、この手のパーティーは避ける。そもそもカラオケがあまり好きではないので、参加は難しい、とSさんには伝えていた。

Sさんは私より一つ程下だったが、親からの会社を引き継いでいるらしい。零細家業だと言っているが、内容を私は知らない。純粋なカラオケ友達だった。

逆算すると七年前、私の母が亡くなって父親が独居になり、三ヶ月に一度程、東京から函館へ帰省していた時に、気晴らしで行く五稜郭のスナックで知り合った。その場だけのカラオケ仲間、連絡先こそ交換しているのだが、私生活での交流は薄い。

函館に戻る前に、行き付けだったスナックUは、その少し前に^{（こぼれ書き）}寿閉店していた。その連絡を東京までくれたのがSさんで、

「Yママが常連のKさんと名古屋で所帯を持つ事になって、Uも閉店だってさ。よろしくねえと伝えて、と言っていたよ。それで、今後会う店が無くなったから、今度函館に来た時は、直に連絡してくれ」

と電話をくれた。それでその後も、更に定年で私が函館に帰郷してからも、月に一度程は会って歌い合っていたのだが、コロナ感染の影響により、二月半ばを最後に会っていないかった。

*

九月十六日（水）午後六時、Sさん指定のスナックは貸し切りだった。初めて行く店だったが、Sさんの行きつけなのだろう。フェイスシールドをしたママさんが、愛想よく迎えてくれる。私より一回り上だと言うが、綺麗な方だった。

店は明るい照明で、夜の店らしくなく、清潔感のある内装

だった。テーブル前にSさん持ち込みの亚克力板が、六人分立てられていたが、参加者は五人だ。

店のカラオケ機種はDAMで、各々に専用の検索入力機であるデンモクとマイクが置かれている。因みにカラオケの機種がJOYサウンドの場合は、検索機の名称はキョクナビと呼ばれる。宅急便がクロネコヤマトの名称で、他社が宅配便である事に似ている。機械の統一名称は無いが、まあ、良くある事なのかもしれない。因みにこの2社は、それ以外にも、カラオケ画面の本人映像の有無等、微妙な違いがあるが、大きい相違はカラオケの採点基準の違いと配信曲が、だいたい両方にあるのだが、一部の曲で一方にあるが一方に無い、と言う物がある点である。

参加者の紹介や、御無沙汰の挨拶もソコソコに、乾杯後にSさんが、オープニングだと言って、まず夏川りみの（涙そうそう）を入力する。メンバーは面識のある二人と、初めての四十位の男性だった。面識のある二人は七十過ぎの御夫婦で、以前、別の所で何度かお会いした事がある。全員がSさんの知り合い、と言う事だ。

仮に名前を、若い男性を藤木直人。御夫婦の御主人を笹野高史、奥さんは宮本信子とする。各々、その芸能人に雰囲気（顔ではないです）が似ているからが名称の理由だった。ついでに言えばSさんは梅沢富美男、初対面のこのママはジューディ・オングかなあ、と思う。ここまで書いてしまったら

自分の事も書かなければ不味いので言う、私の雰囲気（繰り返しますが、顔の相似で無く）は（青春時代）を歌ったトップギヤランの森田公一だろうか、以前人に言われた事があった。その辺の人物イメージで、このノンフィクションをお読みいただければと考えます。

（涙そうそう）は富美男さん（前出Sさんです。以降同）の十八番だが、もしかしたらこれを歌う為の飲み会なのかと思わせた。

今日のテーマは、あらかじめ私が知らせておいた、『追悼〜今季亡くなった歌い手達〜』

だった。今年の八月までに亡くなった歌手のカラオケ曲を歌おう、と言う物なのだ。つまりお盆供養の様な物なのだが、動機は、以前新聞のベタ記事で、かつて一世を風靡した歌手のお悔やみ記事を見たからだ。随分小さな記事で、世間的に多くを注目はされていないのは、引退して普通の暮らしが長い人だったからだ。世間に忘れられて不幸とかではないのだが、なんとなく私は寂しく感じ、せめてその人の歌を、個人的にカラオケでも歌いたい、と思った事だった。

それで、歌手の誰かが亡くなった折々に一人で歌っていたが、去年の三月頃に、そんな話をしながら森山加代子の（月影のナポリ）と（白い蝶のサンバ）を某店で歌うと、

「今度、お盆が暮にでも一緒にそれやろう」

物好きなのか、そう言ったのは、そこに同席していた富美

男さんだった。

その森山加代子について触れる。函館出身の方で、昭和二十年生まれ。去年平成三十一年三月大腸癌の為に七十八歳で亡くなった。一九六〇年代に洋楽をベースとしたコミカルなイメージのカバー曲を中心に多くのヒットソングを歌い、昭和四十五年（白い蝶のサンバ）が大ヒットしている。歌を聞けば、皆さんも聞き覚えがあるかと思う。

各々が一曲ずつ歌った。それぞれ面白い曲を歌ったので、後程紹介したい。次項からは追悼になる。富美男さんがまず渡哲也の（くちなしの花）を入力し、曲が流れた。

2

渡哲也は、つい先月、八月十日に肺炎で亡くなった。七十八歳の大スター。歌手よりも俳優の方が本業ですが、昭和五十八年大ヒットの（くちなしの花）の他にもヒット曲が数多くあります。続けて私が（水割り）、笹野さんが（みちづれ）を歌った。昭和五十年、五十一年の発売曲だ。（みちづれ）は牧村三枝子も競作していて、そちらのバージョンも流布している。

「年配世代の男性は、石原裕次郎とか渡哲也の曲は幾らでも行けるね」

信子さんが言う。確かに、これにフランク永井を入れて、

年配者のカラオケに向いた歌が多い。渋いメロディーで心地よく、歌い易い事もあり、昼カラでは定番である。

（みちづれ）のDAMでのカラオケの画面は、昔の日活映画（錆びたペンダント）の映像だが、私は画面の若い山本陽子の、困惑時の下り眉の表情が好きなのだが、映画は見えてはいないので、笹野さんが、若い頃にそれを見たと言うのを、ひどく羨ましく思った。

その後、藤木君が（ひとり）、笹野さんが（ほおずき）、富美男さんが（日暮れ坂）を歌った。昭和五十二、三年の三曲である。藤木さんが、昔のテレビ番組である（大都会パートⅡ）の挿入歌である（ひとり）を知っているのが驚きだった。まだまだ渡哲也の歌はあったが、次に進む事にした。

「宮城まり子、歌えますか」

と笹野夫婦に聞くと、（ガード下の靴みがき）なら、上手くはないが何とか、と信子さんが言う。昭和三十年のヒット曲だ。同じモチーフの歌に暁テル子の（東京シューシャインボーイ）があるが、これは洋楽カバーで、昭和二十六年の歌だ。共に戦災孤児達の歌だが、実情は、こんな明るい物ではなかったろうけれど、虚構の底に哀愁を隠し、後世に歌い継ぐ時代の歌であるのだと思う。

宮城まり子は三月に九十三歳で亡くなっていた。リンパ腫だった。有名な歌手で女優だが、現在は、ねむの木学園等の福祉事業家としての方が有名かもしれない。私が昭和二十八

年のヒット曲である（毒消しや、いらんかね）を、次に歌うと、

「森田さん、こんな歌を良く、知っているねえ。こんな古いの、さすがだね」

笹野夫妻が言うので、カラオケ・オタクですから、と私は笑い、

「富美男さん、加門亮、お願いしますよ」と、続けて言う。

「亮ちゃん、死んじやったんだよなあ」
悲しそうな顔で、富美男さんが答える。

加門亮は平成七年の紅白歌合戦に出ている演歌系歌手で、三月に癌で亡くなっていた。六十一歳。私と同年である。前から富美男さんは、彼の曲を持ち歌にしていた。（男の慕情）を歌うので、私が（麗子）を、笹野さんが（黒い花びら）を歌った。これは加門亮による故水原弘の昭和三十四年のレコード大賞曲のカバーである。もう一曲、富美男さんが（小樽でもう一度）を歌った。

「次は、梓みちよですが、信子さん（こんにちは赤ちゃん）をお願いできますか」

「えーと。森田さんごめん。（二人でお酒を）の方がいいな」
信子さんは、そちらを歌う。

梓みちよは一月に七十六歳でなくなっている。最も有名な歌は（こんにちは赤ちゃん）で、昭和三十八年の第五回日本

レコード大賞曲で、翌年選抜高校野球の開会式行進曲にもなっている。(二人でお酒を)の方は昭和四十九年のヒット曲で、この他にも幾つかのヒット曲がある。(メランコリー)を富美男さんが、(銀河系まで飛んでいけ!)を私が歌う。昭和五十一年と五十三年の曲だ。

「古い歌手の、古い歌ばかりで、詰まらないでしょう。(こんには赤ちゃん) って、知っていますか」

私が藤木君に話しかけると、

「古い歌、好きですよ。うる覚えですけど、(こんにちは赤ちゃん)は歌えますよ」

そう答え、ジュディママとデュエットで歌う。ジュディママは梓みちよのファンだったらしく、(この胸のときめきを)を歌ってくれたが、これは洋楽のカバー曲で、ダスティ・スプリングフィールドが歌い、後にエルヴィス・プレスリーもカバーしている。

三月に、コロナ感染で亡くなった志村けんは、世間に衝撃を与えた。お笑いの人で、歌としては(東村山音頭)位だが、セリフが多いコミックソングは、歌うのは中々大変だ。純粋に歌いたい場合は、この元歌の三橋美智也歌唱の(正調東村山音頭)が良いが、追悼なので志村版を歌ってみる。ドリフターズとしての曲はたくさんあるので、その後、富美男さんに(いい湯だな)ビバノン・ロック)を歌ってもらうが、藤木君が(ドリフの早口ことば)を歌って、大ウケを取った。

「志村けん、とても残念で、寂しいわよね」
信子さんが言い、

「そう言えば、岡江久美子さんって、歌はないんですかと、続けた。

コロナ感染で、六十歳で亡くなった岡江久美子は、ジャズシンガーを目指した事もあったらしいが歌は出していない。そう伝える。

「森田さん、本当に、なんでも知っているよね。ところで、だいぶ追悼できたかな」

富美男さんが言う。

「私は芸能オタクですから。追悼は五人済んで、半分以上コロナのせいではないけど、今年は人数多いですね。休憩しますか」

「そうだね、休憩しましょう」

そんなやり取りの後で、藤木君が、

「そう言えば、吉行淳之介のエッセイだったか小説で、恋人のMMって、登場していた、あれ、宮城まり子の事だったんですよねえ」

と、言ったので、意外と文学青年だったんじゃないのかと感心した。MMは、多分そうなのだろう。宮城まり子が作家、吉行淳之介の生涯のパートナーであった事は有名だが、正式な婚姻はしていない。

飲み物の追加がそう間、三浦春馬の(ナイト・ダイバー)

を入れ、

「藤木君、これどうですか」

私が聞くと、無理ですと言う。

「さすがにこれは難しいよね。私も無理だ」

と言う私に、富美男さんが言う。

「万能の森田さんでも、歌えないの？」

「いやいや、これ、歌も難しいけど、発売が八月二十六日ですよ。つい最近。彼の亡くなった後ですよ」

三浦春馬は七月十八日、三十歳で自殺したが、人気全盛期の俳優だったので大きなニュースになった。俳優としての活動の方が大きかったが、この夏（フアイト・フォー・ユアー・ハート）と言う曲を発売し、（ナイト・ダイバー）は二曲目だった。どちらも売れているが、曲的には年配層には難しい。そして色々な意味でコメントがしにくい。その死にたいして的確な言葉を見つけれない、と言った方が正解だった。

「映画の（永遠の0）^{ゼロ}、に出ていたよねえ」

ジュディママが言い、私が頷く。

「どうしてとしか言えないわよねえ」

信子さんが言い、各自飲みながら、メロディを聞き、画面の歌詞を追った。

「次回までには、練習してきますよ。一年後ですかね」

藤木君がそう言いながら、笑う。もう一曲の（フアイト・フォー・ユアー・ハート）の方が歌い易いかなあ、と私は

思った。

3

休憩で、各自が好きな曲を歌うが、ここまで歌う機会の少ない藤木君に多く歌ってもらう。米津玄師の（レモン）とか、あいみよんの（マリーゴールド）等の新しいヒット曲を歌った。私は、園まり（逢いたくて逢いたくて）にした。昭和四十一年の懐メロだが画面に映画映像が使われていて、渡哲也が出ている。場の世代空気に寄せてみたのだが、ゆったりして歌い易い曲だ。

笹野さんが、鳥羽一郎の（光秀^{おとこ}の意地）を歌った。明智光秀をテーマにした演歌だが、大河ドラマが明智光秀だからね、と力を入れた。鳥羽一郎は海物の演歌ヒット曲の他に、こんな歴史物の演歌もあり、他に坂本龍馬や信長、徐福を扱った歌がある。

富美男さんが、AKBはこれしか歌えん、と言いながら（365日の紙飛行機）を歌い、信子さんが、今日の為に練習してきたと、美空ひばりのA Iで話題になった（あれから）を歌った。良い曲だが、世代でこんなに歌う曲が違うのか、といまさらに思い、より若い世代がいたら、例えば、Y O A S O B Iの（夜に駆ける）とか米津玄師の（感電）なんか出て、もっと歌の幅は広がるのだらうなと思う。その後出た歌で、

今年のヒット曲を書き出すが、はたしてこれ全部知っている人はいるだろうか。三ヶ月半先の紅白歌合戦には、これらは出て来るのだからと思う。

(曲名)

(歌手)

- 1 香水 瑛人
- 2 裸の心 あいみよん
- 3 五島恋椿 丘みどり
- 4 残照 山内惠介
- 5 ソンナコトナイヨ 日向坂46
- 6 しあわせの保護色 乃木坂46

世代による音楽嗜好の乖離は、いまや当たり前で、若い世代は演歌には関心がないだろうし、年配者には若い世代の歌の多くは理解しがたくなっている。そういう意味では、今流行しようとしている(香水)は、曲が結構レトロなフォーク調で、詞が良いので魅力だが、どうだろう。

「ドルチェ&ガッバーナのお♪」

そこを皆で歌っているのが、可笑しい。

私的には、今年のNHKの朝ドラ、(エール)に登場する戦前の曲が好きで、笹野さんとか私が歌ったそれらを紹介すると、取りあげるカラオケ・ジャンル、増々幅は広がるなあ、と痛感するが、今年の歌との対比で、ここに記してみます。因みに主題歌(星影のエール)も良い曲で、藤木君が歌った

のだが、歌うGreen^{グリーン}が顔出しNG歌手なので紅白に出るのかどうかはわからない。

「懐メロ良いよねえ」

私は力説したい。

(曲名)

(歌手)

(昭和)

- 1 船頭可愛や 音丸 十年
- 2 東京行進曲 佐藤千夜子 四年
- 3 東京ラプソディ 藤山一郎 十一年
- 4 暁に祈る 伊藤久男 十五年
- 5 銀座の柳 四家文子 七年
- 6 討匪行 藤原義江 八年

4

さて、再開。

「広谷順子って歌手、知っています」

私が聞くと、全員、知らないと言う。

「そうでしょうね。私は四十年位前に、深夜放送で随分聞きましたね。一月に癌の為、六十三歳で亡くなっています」

代表曲に(道)と(古都めぐり)等があるが、JOYサウンドでは前の曲が、DAMでは後の曲が配信されていた。フォーク調の良い歌ですと言うと、富美男さんが、聞きたいと言うので、それを歌う。傷心の京都旅行と言った趣の佳曲

だった。作曲家としても活動していて、平成二年の中森明菜の二十五枚目のシングル（水に挿した花）の作曲者だ。この曲が明菜のオリコンチャート最後の一位曲になっている。それは懐かしい曲ですね、と藤木君が言う。

「次、志賀勝ですけど、歌えますよねえ」

と私が富美男さんに言う。以前、彼の歌う志賀の何かの曲を聞いた事があった。

「志賀ちゃんかあ。何曲かは知っているけどさ、ド演歌でセリフあるしさ、しょうもない歌、多いよね。そもそもヒットしたの、この志賀ちゃんの歌」

自虐する様に言いつつ（女）を熱唱する。（女）の冒頭、ベーターベンの第九のイントロから、

「久し振りでんな、志賀勝や！」

とのセリフが入るので、オツ、生き返ったよ、と笹野さんが、引き気味に言う。その後（夫婦がたり）を信子さんが、（男）を笹野さんが、更に（道）を再び富美男さんが歌った。皆何故か知っていて可笑しいが、歌い易いのよねえ、これ、と信子さんが言う。元は富美男さんが歌い広めたいらしいが、結構浸透している。

志賀勝は、四月に七十八歳で亡くなっている。拡張心筋症だった。役者が本業で、後述するピラニア軍団で活躍し、七十年代から八十年代に演歌を出している。ヒットと呼べるものは無いようだが、カラオケでは結構配信されている。歌い

やすいド演歌なので、意外と歌われているのか、DAMには五曲程の本人映像の作品が配信されている。

ピラニア軍団は、東映所属の大部屋俳優を中心に一九七五年に結成され、映画・テレビドラマで斬られ役・殺られ役・悪役・敵役を演じた俳優たちの通称で、後に川谷拓三とか室田日出夫、小林稔侍等の売れっ子やこの志賀勝の様な中堅で活躍する者を輩出した。

「ピラニア軍団に、函館出身の俳優さんがいるんですけど、知っていますか」

「知っているよ。柏木町の、高月忠さんな」

私の問いに答えた富美男さんに、ネット記事で読んで知っていただけの私は、どうして知っているのか、と驚くと、

「中学生の時に、一寸、柏木町にある、その兄さんの学習塾に通っていたんだ」

と答えた。うーん、さすが地元かあ。

次に、ウイリー沖山の、（スイスの娘）、を入れる。この人は有名なヨーデル歌手で、昔、一九七〇年から六年頃に五木ひろしや八代亜紀を輩出したテレビ番組の（全日本歌謡選手権）で、チャンピオンになっていたのを見ていた。笹野夫妻は知っていたが、富美男さんは番組自体をあまり知らない、と言う。有名番組だったので、少し意外だ。

「うちの親って、歌謡曲に興味の無い人達だったからね」と、言った。ウイリー沖山は六月に、八十七歳、老衰で亡

くなっている。

七月には弘田三枝子が心不全の為に七十四歳で亡くなっているが、

「やっぱり、(人形の家 かね)」

富美男さんが、それを信子さんに勧めた。その後で(渚のうわさ)を入れたので、(砂に消えた涙)を私は入れた。イタリアの歌手ミーナの日本語版で、弘田は他にも洋楽の日本語吹き替え曲によるヒットを出している。その内の一曲である(ヴァケーション)を藤木君が歌う。歌い終わってから、

「まだ何人かいますが、また一旦休憩して、お好み曲をどうぞ」

と私が言い、続けて、

「あと案内だけですが、**宍戸錠**がいます。俳優としては有名ですが、歌の方はJOYサウンドに(ろくでなしの唄)と言うのが配信されているだけで、DAMにはないですね」と言うと、富美男さんが答えた。

「ああ、映画(ろくでなし稼業)の主題歌だったやつね」

「そうです。良く知っていますね」

「昔、ビデオで見たな。二谷英明と共演していた。内容は忘れたけれどね」

後で調べると、昭和三十六年の日活アクション映画だった。

「題名が印象に残っているのさ。うちも、ろくでなし稼業って、シャレにならないね」

富美男さんが笑う。

宍戸錠は、例えば小林旭の歌のカラオケ画面で使われる、昔の日活映画の映像に、わき役だが登場している。更に、ウルフルズの平成九年の曲(かわいいひと)のPVとそれを使ったカラオケ本人映像にもゲスト出演があり、姿を見る事ができる。

私は藤木君に、サザン・オールスターズの(チャコの海岸物語)をリクエストした。二番の歌詞に出て来る(ミーコ)は弘田三枝子の愛称で、一番の(チャコ)の飯田久彦に続いている。因みに三番が(ピーナッツ)で、この歌は、その三人の和製ポップススターに対する、サザン桑田のリスペクトで歌詞を構成させている。その部分では、

「甘くて、すっぱいひとだから♪」

と、歌われている。

「そうだったんですか」

感心しながら、藤木君が熱唱してくれた。

「では、あと三組程です。どなたかお願いいたします。ブル・コメッツ、デューク・エイセスそしてタイガースの歌です」

私が言うと、富美男さんが、

「えっ、タイガースって誰が死んだの」

と驚く。他の二つのグループの事は前もって知らせていた。二月にデューク・エイセスの吉田一彦が八十一歳、肺炎で、

四月にブルー・コメッツのジャッキー吉川が八十一歳で亡くなっていた。

「昨日十五日に発表があつて、先月十日に急性心不全で岸部四郎が亡くなったそうです。七十一歳でした」

「知らなかった。何か寂しいねえ」

ジュディママが言う。信子さんも、

「西遊記の沙悟浄、良かったよね」

と言う。岸部四郎も山、谷、色々ある。

デューク・エイセスの（女ひとり）を笹野夫妻がデュエットした。（おさななじみ）を富美男さんが、私が（大脱走のマーチ）を歌った。共に昭和三十八年の発売である。

「これって、マックイーンが主役の映画（大脱走）の日本語版ですよ。あつたですね、こんなカバー曲」

言いながら、次に藤木君が（ブルー・シャトウ）を歌う。これは昭和四十二年の曲で、同年のレコード大賞受賞曲だ。スタンダードとなつているので、知っているらしい。

（北国の二人）を笹野さんが歌う。昭和四十二年のヒット曲である、ブルー・コメッツは平成二十二年に自殺した井上大輔に次ぎ、亡くなったのは二人目になる。

「タイガースのヒット曲は、岸部四郎の加入前のが、ほとんどだから、再結成時の（色つきの女でいてくれよ）を歌うよ」

富美男さんが言うが、それは昭和五十七年の歌だ。先に、岸部四郎在籍前のタイガースの曲である（花の首飾り）を信

子さんが、ジュディママが（モナリザの微笑）を歌った。昭和四十二年と翌年の曲で、二人ともピンポイントの世代らしい。富美男さんの歌で、今年の追悼は終わったのだが、

「お盆追悼だから、去年のお盆以降に亡くなった人もいるのなら入れるべきだ」

富美男さんが力説するので、次の三人を追加し、それぞれを歌ってもらう事になった。

昨年十一月に松本ちえこが、動脈瘤破裂の為に六十一歳で亡くなっている。同じ月に韓流グループ、KARA（カラ）のク・ハラが二十八歳で自殺していた。

KARAは、韓国の女性アイドルグループで、日本におけるK・POPブームの火付け役として知られ、平成二十二年のヒット曲である（ミスター）は、そのヒップダンスと共に、まだ記憶に新しい。ク・ハラは、そのグループの人気メンバーだった。

松本ちえこは元アイドル、私や富美男さんは同世代で、バスのCMで人気だったので記憶がある。同世代の記憶は重要で、有栖川有栖の中編推理小説の中で、松本ちえことその持ち歌「ぼく」の思い出話が、主人公により語られ、推理の伏線として登場する作品がある。

更に、十二月には慢性腎不全の為、八十一歳で梅宮辰夫が亡くなっている。

「KARAの（ミスター）は、藤木君だな。前に歌った事あ

ったよね。松本ちえこは懐かしいけど、歌はそれほど売れたわけではないので一寸厳しいな。歌える曲ある？あと梅宮辰夫の歌って何があるの？難問だよね」

そう、富美男さんが言う。

「松本ちえこの（恋人試験）、歌いますよ」

私が答えた。昭和五十一年の曲だ。

笹野さんが、

「それでは、私が梅宮辰夫の（番長ブルース）を」

と言う。歌は昭和四十四年の映画主題歌で、（練監ブルース）つまり練馬監獄ブルースが元歌なのだが、更にその原曲は戦中の兵隊唄である（可愛い、スーちゃん）に行き着くアンダーグラウンドソングだった。梅宮辰夫は俳優で、こちらが本業だが、この他にも（シンボルロック）とか、アンダーブラックな、変な曲を歌っている。

*

以上で、追悼は終わった。ただしこの他にも、次の方が亡くなっている。レコード発売はあるが、カラオケ配信がないので省いたのだが。別にここに記します。

中山仁。俳優、昨年十月肺癌で死去、七十七歳。（サインはV）等で人気だった。カラオケ配信の（想い出の渚）で使われている松原智恵子の映画映像に、歌うワイルドワンズと共に登場している。

宮内淳。俳優、八月に直腸癌で死去、七十歳。（太陽にほえろ！）のボン刑事役で人気に、当時小学生だった妻が大ファンで、そのドラマの殉職シーンで、大号泣したらしい。

服部克久。作曲家、六月に腎不全で死去、八十三歳。代表曲として三好鉄生が歌う（すごい男の唄）がある。

こんなウンチクに興味を持つ人って、富美男さん以外にいるのだろうかとやはり私は思うのだが、ここに記載された歌に興味のある方はユーチューブに、歌の題名を入れてもらえば、簡単に聴く事ができます。最後に後書き、と言うか、この文を記します。

5

竹原ピストルが平成二十九年の紅白歌合戦で歌ったヒット曲（よー、その若いの）の歌詞の中で、

「芸能人やらスポーツ選手は生き様が目立つけど、世の中で、必死に生きていない大人なんていないんだよ」

と若者に向かいプロテストする、こんな内容の曲を歌うのだが、全くその通りで、私の身内にも知り合いでも、今季は少なくとも人が亡くなっている。無名の死も、有名の死も同じく重い。それでも、こうして目立つ歌い手の歌を繋ぐのは、その折々の時間を支え、共有してもらった感謝と共に、それに対し、冥福を祈る余裕がなければと思うからです。

*

枚数がまだあるので、本題からはずれたので、後に回したスタートの曲を記しておきます。(涙そうそう)の後で、笹野さんが、昭和三十六年のアイ・ジョージの名曲(硝子のジョニー)を朗々と歌い、信子さんが香西かおりの、平成五年のレコード大賞受賞曲(無言坂)を、藤木君が中島みゆきの(糸)を歌った。(糸)は平成十年の発売だが、長い年月をかけ、CMで使われたり、カラオケで歌われたりしてヒット、スタンダード化した。今年、曲を題材に映画化もされている。

私は、ハナレグミの(オリビアを聴きながら)を歌う。元歌は昭和五十三年の杏里の曲だが、伴奏がかなりアレンジされている。平成三十年に佐藤泰志の小説を函館に舞台を移し、映画化した(きみの鳥はうたえる)の劇中、主人公達のカラオケシーンで歌われた曲で、その場所に五稜郭のマネキネコが使われていた。

*

これを書いている時に、今は行き来途絶えた知人の父が、百四歳で亡くなった、と耳に入ってきました。奇しくも三浦春馬と同じ命日になった様です。そちらは無名の死ですが、百四年の生の歲月は重いと思います。十年以上会っていませんが、どのような歌で送るべきか考えています。(了)

ゲルニカ

菊地 政義

ゲルニカはスペインのバスク地方の小都市で、ドイツのコンコルド兵団によつて、無差別の空爆を受け、死者六五四名・負傷者八八九名と言う、痛ましい犠牲者を出したので、画家のピカソはこれに激しく憤り、この画を、二年かけて仕上げ、その暴挙を世に問ひかけた。

作家の三島由紀夫は、「ゲルニカ」について、こんなふう述べている。

「白と黒と灰色と鼠がかつた緑ぐらいが、ゲルニカ画中で私の記憶している色である。色彩はこれほど淡泊であり、画面の印象はむしろ古典的である。静的である。」と。そして最後にこう結論づけている。

「このゲルニカは現代の生んだ、傑出した宗教画のひとつである」と。

私は、三島由紀夫のゲルニカ評を読んで、ピカソのゲルニカについて、もっと詳しく、知りたいと思つた。

そこで滅多に^{ひん}織くことのない、集英社発行の現代世界美術全集十四巻、ピカソを持参した。重い、大きい本の見ひらき全面にゲルニカが躍っている。瞬^{またた}く凝視がつづく。私はこれ

の模写をして見ようと思つた。

私の作業は続く。画いては消し、消しては画く、二歩前進、一歩後退。こんな日が約二週間は続いた。本物には遠く及ばないがかなり似て来た。しかし、どうも可笑しい。前日まで、上手くいったと満足しても、翌日には欠点だらけなのだ。何度も、もう止めようと思つた。

少し間をおく。だがまてよ、これは自分が下手なのでなく、自分の鑑識眼も高まるからなのだ。そのように考えてまた作業を続ける。今回の「ゲルニカ」の模写で一番の収穫はこの事に気が付いた事であつた。

私のゲルニカの模写もだんだん本物に接近して行くのが解つた。そろそろ筆をおこうかなと思つた。だがまてよ！見れば見るほど、よく似ている。私は少し巫山戯心を興した。画面の中央下の暗い空間に少し余白を見た。そこに私の独創物、一人の病的な女性と、これまた独創的な、少し大きい石ころ

を画き込んだ。少なくともこれで、どんなに上手に描かれても忠実な模写と申されまい？両方ともよく絵にとけこんでいる。

さあ！出来た。筆を完全におこう。あとはお部屋のどこに飾るかだ。私は自分の居場所、いつもの使用している椅子から、何時でもよく見える場所を選んで決めた。今、花の絵を掛けている所。なかなか良い見栄えがする。

見事に壁におさまった。

さて、亦、難敵が現れた。今度は、家内である。

「そんな絵は、薄気味が悪いから、そんな場所には飾らないでくれ」と強行だ。

私は、そんな事はない。そのうちに馴れると言つて、こちらも強行、しばらくは不穏な空気が支配した。

今では、吾が愛するかの「ゲルニカ」は、吾家の一等地に座を占め、何時も輝いている。ゲルニカの登場者達も、皆所を占め、苦痛を訴える者、天に雄叫びをあげるもの、既に命の絶えた者、怒り狂う動物達、薄暮に点るランプの灯り、誰が握るのか鋭い短刀、これらの者達は、皆は画中に居場所を占め、何らかの意志を表示している。

この絵を、吾が部屋に展示している限り、私は「ゲルニカ」と一体だ。勿論、私の画き加えた例の、少し大きい石ころと、瀕死寸前の病的な女性も一緒だ。

今日は、朝から雨が降り続く、もうすぐ十月だ、街では、薄が売られていた。

私の目は、一日に何度も例の「ゲルニカ」に向けられる。

私はこの苦勞の産物、模写の「ゲルニカ」に問いかけ、一方、模写の「ゲルニカ」も、私に問い返す。これが何時までも続く。何回も続く。

もう、私の苦心の産物、「ゲルニカ」は、私の宝物になつてしまった。彼は一生、私の側をはなれる事はないだろう。勿論、私も彼を手ばなす事は無い。

終

「谷地学校」物語

小島 栄樹

谷地頭行きの電車に乗り青柳町の停留所を過ぎたころ、前方少し右寄りの山の中腹に赤茶けた屋根の建物が木立の奥にわずかに見えてくる。函館市青少年研修センター「ふるる函館」である。ここには大正十三年に函館市立谷地頭尋常高等小学校（以下「函館市立」を省略）として建てられ、平成四年に解体されるまでの六十八年間、我々が「谷地学校」と呼んでいた木造三階建ての校舎があった。

私は昭和十九年四月に「谷地学校」こと谷地頭国民学校に入学した。今で言う小学校である。一年一組は男子ばかり、一年二組は女子ばかりの一年生二学級の小規模な学校であった。函館山の山腹に建っていたので、学校のすぐ後ろは要塞地帯となっており道路との境界にはバラ線が張り巡らされていた。春になれば裏山のウグイスの囀りが聞こえてくるというのどかな環境でもあった。

翌二十年八月、日本は戦争に負けた。小なりと雖も軍国少年の端くれ、本当に悔しかった。鬼畜米英と教え込まれていたアメリカ兵に占領されたら自分たちはどうなるのだろうかなどと真面目に心配していた。しかし連日の空襲警報のサイ

レンに怯えることもなくなり、青空の下で自由に遊べるようになったのはうれしいことであった。

私が三年生になるとき、すなわち昭和二十一年には「谷地学校」に北海道第二師範学校女子部が設置されることになったため谷地頭国民学校は廃止となり、在校生は青柳小学校に転校することになった。この年に国民学校は小学校と改称された。学校生活が始まってからの二年間国民学校という名称に慣れ親しんでいたので小学校の名称には強い違和感があったことを覚えていいる。青柳小学校は昭和九年の函館大火のあとに建てられた鉄筋コンクリート造三階建ての立派な校舎であり、また三方を校舎と体育館に囲まれたグラウンドは非常に広かった。

私が青柳小学校を卒業し、中学校に進学する年、すなわち昭和二十五年、「谷地学校」にはまた新たな動きがあった。先の師範学校が別のところに移転することになったのである。

これより少し前の昭和二十三年に新制中学の一つとして青柳中学校が開校していたのだが、師範学校の移転と連動して青柳中学校が「谷地学校」に移転することになり、しかも校名

が谷地頭中学校に改称された。このため私は国民学校一年生として入学したときと同じ校舎に今度は中学一年生として入学することになったのである。

一年生は五学級、どの学級も生徒は五十五名以上で教室はどこも超満員であった。通学範囲も広く、遠くは恵比須町（現末広町、十字街電停から宝来町方向の地域）からも沢山の生徒が通っていた。

ホームルームの時間などには先生の引率で立待岬に出かけたり、北洋漁業が再開されたときには、生徒たちは学校の裏手の千畳敷に登って船団の出航を見送ったりするなど全体的におおらかな三年間であった。昭和二十八年三月に卒業となり、私と「谷地学校」との関わりはこの時点で終わりとなる。しかし話をもう少し進めよう。

昭和二十九年夏に函館市において北洋博覧会（正式には「北洋漁業北海道博覧会」）が開催され、展示会場の一つとして青柳町にあった市宮野球場跡に二階建ての建物が建てられた。博覧会終了後この建物は校舎として改装され、翌三十年、ここに谷地頭中学校が移転し、校名が潮見中学校と改称された。後日後輩に聞いたところではこのとき生徒たちは机や椅子を持って函館八幡宮の裏参道を新校舎まで歩いて運んだとのことである。

余談ではあるが、潮見中学校の校章は谷地頭中学校の校章がそのまま引き継がれ、「紫紺に煙る臥牛の杜より」で始まる

校歌はその一部、「おお谷地頭」が「おお潮見」に替えられた。他はそのまま歌い継がれた。ちなみにこの校歌の作詞は当時の谷地頭中学校教諭二ツ森藤雄先生によるものである。

谷地頭中学校が移転した後の「谷地学校」には谷地頭小学校が新たに開校し、平成二年に青柳小学校と統合されて閉校するまで小学校として使われた。

「谷地学校」は谷地頭尋常高等小学校に始まり、幾多の変遷を経て谷地頭小学校として終わった。老朽化のため平成四年に解体され六十八年の幕を閉じた。

新制中学校の一つとして戦後新たに開校した青柳中学校はその後校舎を「谷地学校」に移して谷地頭中学校となり、さらに潮見中学校を経た後、平成三十年に西中学校、潮見中学校、宇賀の浦中学校の三校が統合して再び青柳中学校を名乗ることになった。

一つの校舎にまつわるこのような歴史を顧みるとき世の流れの不思議を感じざるを得ない。

選 評

竹中 征機

入選

「いか釣り船団―山背泊という港町―」

齊藤 満

著者は檜山管内の沿岸に生きる漁民の子として育った。選者は逆の茅部海岸と共通する体験を持ち子供の頃を想起させられる一文だった。

今はいか売りの声も聞かれなくなつたが、かつては函館の街の隅々までその声が響き渡っていた。

今年はコロナ禍で恒例の港踊りもなくイカ踊りの賑わいもなく寂しい夏が過ぎた。

作者の強みは体験による確かな目線と弱者に対する労わりが普く行き渡っていることである。同時にいか漁の遭難の歴史をたどり、如何に危険な漁だったかを検証的に述べられている。

振り向けば沿岸漁民史は遭難の悲惨さと家族労働で辛うじて支えられてい

たことを改めて考えさせてくれました。尚、注意点として文章をまとめる際には主題を中心に後は出来るだけ削る事も大切になります。いずれにせよ秀逸で力のこもった作品でした。

「榎本武揚の言い分」

木村 裕俊

オランダに幕府が発注した新鋭艦船「開陽丸」引取りの洋上風景を作者は小説的手法で臨場感を出し演出している。

幕府は鳥羽伏見の戦いに敗れ將軍は大坂から江戸に帰つてしまい榎本は抗戦相談の機会を失う。義憤に駆られた榎本は官軍の圧力に抗して江戸品川沖から箱館戦争に至る。榎本の移動と思想がコンパクトにまとめられ且つ、分かり易い。特に廃藩の場合の武士の救済等々。榎本は人格、学術共に勝れ、敗戦後取監されたが敵将黒田清隆によって救われ、新政府の重責を担った。その辺りの情況が分かる。

この作品はあらゆる角度から考察し

変革期の攻防を生き生きとまとめられ好感が持てる。同時に何時、何処で、何を等が明確だった。

「連作短編集『フィティピール（50人の人々）』を読む」

菱井 亜紀

冒頭書出しに書評かと思つたが、自分がお読みなつた本の単なる感想でなく、さりげなく生きているように見えがちな人間の織りなす人間交差点を紹介し共感を呼ぶ。

特に地方都市の大病院を舞台にそこに蠢く群像を温かな眼差しで読み進む姿勢に好感が持てる。

中でも腕の良い女医と麻酔医の話、また耳に蜂が入り処置されその蜂をプラスチックの小箱にいれ贈ったエピソード等々話題が尽きない。また医療現場の独特のピリピリ感が今日の世相を映しているようにさえ思ふ。

佳作

「カラオケ・レクイエム・パーティー」

（今季亡くなった歌い手達へ）

高橋 剛治

歌謡曲は生活に密着した国民的曲である。特にポピュラーのリズムとあいまって昭和歌謡と総称される。作者はこの熱烈な愛好者で、その仲間たちと大いに歌謡曲を楽しんできた。しかしこのコロナ禍の最中、昼カラのクラスターも報ぜられ規制もまっていた。

特に「こんにちは赤ちゃん」梓みちよさんが逝去され一時代が去った感を拭えなかったようだ。また「ほうずき」や暁テル子等々。

互いの歌合戦に登場する歌や歌手はほぼ新旧網羅され恰も昭和歌謡全集の趣がある。このことがその時代に生き抜いた人間の逞しさをしみじみ感じさせてくれた。

「ゲルニカ」

菊地 政義

ピカソはスペインのゲルニカ空爆への義憤と抗議をもって名画「ゲルニカ」を描いたと言われる。

作者はこの名画を自らの手で複製しようとする。複製は色合わせが命であるに日本の色としての赤も単にレッドでなくバーミリオン・チントも赤系で特にグレイは色が難しい。

それに古典的味わいを加えるとは並大抵のことではない。

苦勞の末、やれやれ完成に漕ぎ着けたものの奥様が気味悪いと言つて飾らない。

こんな挑戦と戯れ絵の完成までの奮闘を短文のなかに凝縮した。挑戦する限り人が老いないことの証明とも言えます。

『谷地学校』物語

小島 栄樹

谷地学校の変遷が描かれて史料とし

てとても興味深く読ませてもらった。函館市の都市形成は西部地区の山腹から元町、弁天、十字街の繁栄、現在東部に移動したようである。

学校も中高あり学校の統廃合や移転等で寂しくなりました。

おそらく作者の周囲の方々は日本の勝利を信じて疑わない大人たちだったと思う。

また北洋博には先生引率で函館に出て見学したことが思いだされ懐かしく感じました。

いずれにせよ、時が過ぎてその真実も風化され、時には都合良く変更される。そのためにも次の時代子供たちが賢く選択するためにも大切なことでしょう。

末筆になり大変失礼ではありますが「冬ソナを視てみたら」については誠に力作で文章に瑕疵など全くありませんが、「ああ、そうだったのかー」と言つた軽さだけで読者に共感を与えるインパクトがないように思われました。

どうかこれを機会に息長く継続され

ますようお願いします。

最後に世界一貧しい国の大統領、ムヒ
カの言葉

—人生とは成功することではない
倒れてもまた立ち上がることである—

終わり

詩

入選

ほおずきと風鈴

武田友

市にひっそり

鉢植えのほおずきと風鈴

朱色に

覆われたほおずきは

通り過ぎる人たちの

心のどこかに

ふれている

かもしの風鈴は

ゆれて

だれかに

話しかけている

ひといろ

いちりん

雑踏の中で

あまりにも

静かにひびくから

わたしは動けずに

たちつくしてしまう

ああ

あなたに

つたえたいと

おもっていたこと

どれだけ

つたえられただろう

夕暮の風が

私をゆらす

ひといろ

いちりん

ひといろ

いちりん

詩

佳作

季節のボタンタッチ

玉掛 公恵

私の部屋に

廃品業者を 引き連れた

秋が

やって来て

扇風機

エアコン

除湿器兼空気清浄機さえも

回収して行く

今迄

部屋の一角を

堂々と占めて居た

それぞれ
各々の居場所

そこに

陽が差し

まっ白くなった空間が

部屋 丸ごと

空っぽにする

私は

秋の

足首に しがみつき

「もう ちよつとだけ

待って！」

と

食い下がる

夏の嫌いな

もう一人の自分が

その様子を

冷めた目で

眺めて居る

秋は

冷たく

云い放つ――

「今から準備を 始めないと

冬將軍様の統治が

遅れるっ！」

私は

子供の様に

コクンと頷き

項うなだ垂れる

秋は

夏の

廃品と共に

私を

振り返る事無く

砂埃を上げて

次の家へと

向った

詩

佳作

夕暮に

高橋 洋子

手をのばせば届きそうな

うす桃色の雲

一日の終りに近づき

夕暮がすぐそこまで

明日という日が見えなくて

ひざまづきそうな心を

やさしく やさしく包んでくれる

あかね色の夕焼けに

涙をそっとかくしてしまおう

このひととき

歩き出して 歩き出して

明日は少しだけ 顔を上げて

歩き出してみよう

選 評

鷺谷 峰雄

詩は散文ではありませんが、散文を正しく書けなければ詩は書けないのです。散文は相手に正しくつたえる伝達性を持っています。ですから散文の伝達を味方にして、詩をつくるのです。

詩はどれだけのポエジーがあるかで、詩の濃さがわかるのです。詩の源はポエジーです。

今回の応募は33作品でした。

入選 「ほおずきと風鈴」

武田友

晩夏のころ、ほおずきと風鈴の市が、夕暮の町に立った。

通り過ぎる人たちの心のどこかで、そつとふれ会う市でもある。かもしの風鈴も、ゆれてだれかに話しかけられている。雑踏のなかで静かにひびくから、わたしはつい立ちつくしてしまふ。でも、あなたにどれだけつけたえられたのだろう。

夕暮の風が強く私そのものをゆらしている風でもある。

ひといろ いちりん

と、このリフレインも効果的です。

ほおずきや風鈴の小さな命にも、つたえたい心がある。つたえたいとおもつても、つたえることができなかった心もあるはずだ。

武田さんの感受性の鋭さと豊かさ、そして感受したものを表現する力量の確かさが、この作品からうかがわれます。情感のある上質な抒情詩です。

佳作 「季節のバトンタッチ」

玉掛公恵

私の部屋にも秋がやってきて、扇風機やエアコン、空気清浄機などを業者が回収していった。

そのあとは、日のあたらないまっしろになった空間が部屋丸ごとを空っぽにする。秋は夏の廃品と共に私を振り返ることなくトラックのように次の家へと向った。

夏は短く秋は早くおとずれる。去る夏は一瞬で寂しいものです。だから、あの暑さがなつかしいのです。

まっ白くなった空間は詩的です。

エアコンを取った後の寂寥感などが深みを持たせて描写しています。

佳作 「夕暮に」

高橋洋子

夕暮は「明日は少しだけ顔を上げて」この文章は詩的です。「明日は少しだけ顔を上げて」とは、夕暮が明日になる間際を描写しているからです。

詩は削ることがまず最初で、最後まで、削ることで終ります。それで無駄な表現がなくなります。

高橋さんの作品も余計な言葉をつかっていない。それが詩の純度を高めているのです。

詩は散文の海から生れます。散文のなかに詩があります。散文詩という分野もあります。

詩の表現と散文の表現を見わける人

がいますので、高橋さんをふくめて詩をつくる練習をすることです。書いているうちに詩がわかります。

「ひざまつきそうな心を」という言葉は詩的表現ですので似た言葉をくりかえし書いてください。

ただし「涙」は感傷的な言葉ですので、あまり使わないほうがよいでしょう。

でも言葉をよく選択してつかっていきます。これを継続してください。

入
選

酔ひ止めの薬も飲まずに我が姉は小舟操る昆布の漁に
お洒落して化粧バッチリさあ行こう鏡のなかの吾は眉なし
寝返りのたびに足蹴り胴払い川の字なるは束の間のこと

竹田 光彦
柴田 泰子
水関 清

佳
作

帰り際また来ようねと呟いて名残惜しげに日焼けを摩る
カラフルな棚付きリヤカーに土野菜照れくさくとも意気揚揚と
階下では夕餉の支度終るらし茶碗二つを置く音のして
街明かり灯る道のり行くバスの遠心力の心地よきかな
原発の傷癒えぬのに核のゴミ金の威力で決めらるる恐怖

渡邊 陸王
森田 裕
菊地 利春
三本木 萌
大山 利子

選 評

山 縣 庸 美

入 選

酔ひ止めの薬も飲まずに我が姉は舟
を操る出面に行けり

原作のままだと、下の句の「舟を操る
出面に行けり」が解りにくい。応募作に
昆布の歌があるので添削してみた「小舟
操る昆布の漁に」では如何。

お洒落して化粧バツチりさあ行こう
鏡の中の吾は眉なし

この意気込みは女性ならではの小気
味よさ。下の句も何のその。リズムカル
なので声をあげて読んだ。

寝返りのたびに足蹴り胴払い川の字
なるは束の間のこと

お子さんか孫さんの成長過程の一齣
が詠まれていて微笑ましい。もはや過去
形かも知れないが、多少理を感じさせら
れる結句に作者の思いがある。

佳 作

帰り際また行こうねと呟いて名残惜
しげに目焼けを擦る

ドライブに行かれた時の作か。初句第
二句は「帰り際また来ようね」とした
い。帰り際と、別れ際には時間差がある
ので。若い作者と思われるので何とか採
りたい。

カラフルな棚付きリヤカーと野菜照
れくさそうに意気揚々と

野菜を作り販売されておられるのか。
いずれにしてもカラフルな棚付きリヤ
カーがユニーク。第二句は「リヤカーに」
とし、四句は「照れくさくとも」と言い
切りたい。

階下には夕餉の用意終るらし茶碗二
つを置く音のして

第二句の「夕餉の用意」は「夕餉の支
度」でも良いのでは。二世帯住宅ならで
はを、茶碗を置く音で捉えたのが何とも
言えない。

街明かり灯る道のりバスが行く遠心
力の心地よきかな

第三句の「バスが行く」は「行くバス
の」では如何。下の句はなかなか。

原発の傷癒ぬのに核のゴミ金の威力
で決める恐怖

原発事故の後始末も未だ終わらず、使
用済み燃料プールの満杯が迫るなか最
終処分場に応募して決まれば、最大二十
億円の交付金が支給されるとか。正に下
の句のとおり。結句は「決めらるる恐怖」
と字余りになっても。

今年度も二十一名、九十一首の応募が
あり、歌の内容も充実した作品が多く審
査に悩んだ。初めてと思われる方の作品
は採り上げたいのだが、常連の方の壁は
厚くうれしくもあるが、これまた複雑。
「歌になるだけの感動の見極め」を何と
か共に学んでゆきたい。来年度も諦めず
に多くの応募をお待ちいたします。

選 者 詠

山 縣 庸 美

支へ棒にあれほど止まりゐし赤とんぼ命絶えしかと菜園に立つ

朝明けに水色の雲は竜のごと雨水の空に流れて消える

甘えたき時も過ぎゆき共に老ゆ面会謝絶の義母なと思ふ

医療機器の高度管理に見守られ医師看護師の不在の個室

久し振りに夢の中なるヒーローだ目よ覚めるなもうすぐ終る

俳句

熊澤三太郎選

入選

運動会母が手まねくお昼どき

寄る波を追ふ子逃げる子いわし雲

大花野子は毬となり風となり

千葉誠一

斉藤ふじお

富樫進

佳作

敗戦忌レイテに眠る畏兄^{あに}を恋ふ

大夕焼「さよなら明日^{あした}」散り散りに

木洩れ日を拾ひ集めて白日傘

錆びつきし鉄路の上の赤とんぼ

夜想曲流れるままに月のいで

石岡繁雄

太田満喜子

住吉紀美子

見春妙子

小坂節子

選 評

熊澤 三太郎

入 選

運動会母が手まねくお昼どき

先ずは「運動会」、秋の季語ですね。

秋の爽やかな時候に行われます。家族でそのグラウンドの回りのひとところに席を取って子の応援をしています。「お昼どき」の御馳走をいっぱい作ってその子は、お母さんたちがどこに陣どっているのか判らない。「母」がグラウンドまで出向いて吾が子に、「こちらよ、と「手まねく」、そのような情景を句にしました。「運動会」の情況をとてよく捉えました。

寄る波を追ふ子逃げる子いわし雲

海岸に打ち寄せる波と遊ぶ子供たちの景を詠みました。押し寄せる波に「逃げる子」、引く波を「追う子」などの光景をよく見かけます。それを「いわし雲」の景と取り合わせたのがよかったと思

います。

秋の青空に高々と白い斑を置いたような「いわし雲」が、浜に遊ぶ子供たちと共通しているようにも感じられました。

大花野子は毬となり風となり

「大花野」に遊ぶ子も自然の一部になっている。「毬となり風となり」の思い切った表現がよかったのです。

佳 作

敗戦忌レイテに眠る畏兄を恋ふ

昭和二十年八月十五日が「敗戦忌」。「レイテ」はフィリピンのレイテ島のことで、一九四四年十月、このレイテの争奪で日米が大海戦になり、日本の艦隊が大きな打撃を受けました。作者の兄がこの海戦で戦死なされたのを詠みました。ただ下五が気になります。「兄を思ふ」の表現の方が読者の胸を打つと思います。

大夕焼「さよなら明日」散り散りに

「夕焼」は夏の季語。それを背景にした子供たちの情景ですね。でも五七五が切れ切れです。「夕焼けやまた明日ねと散り散りに」と流れをよくしましょう。

木漏れ日を拾ひ集めて白日傘

季語が「日傘」、「白」にしましたね。「木漏れ日を拾ひ集めて」はとても面白い表現ですね。街路樹の歩道の人の日傘ですか。それともご自分の日傘？

錆びつきし鉄路の上の赤とんぼ

もう使われなくなった「錆びつきし鉄路」と「赤とんぼ」の取り合わせがいいですね。ただ「上の」が難。「鉄路に沿うて」としたらどうでしょう。

夜想曲流れるままに月のいで

「月」は秋の季語。「夜想曲」との取り合わせがいい。きつとショパンのピアノ曲を聞きつつ月が上るのを見ていたのでしょうか。

選者吟

熊澤 三太郎

つつがなく今ここにゐて春の雪

草矢打ち打たれて八十路夫婦かな

散骨がいいとも思ふ星月夜

新涼の旅路の津軽三味線碑

標^{かんじき}の雪野を里の郵便夫

入
選

補聴器が僕の全てをばらしそう
ギシギシと老いの背丸く米を研ぐ
全世界無病息災祈願年

白井靖孝
水島悦子
伊藤静子

佳
作

コロナでも未来へ叫ぶ呱呱の声
黄昏へ添うて歩幅の思いやり
老いひとり明日は我身か救急車
人間の罪証あきされた温暖化
背伸びしてブラックコーヒー飲んだ朝

本間総子
岩本真穂
鍋倉英諒
大山利子
加藤由美子

選 評

中村 宵星

入 選

補聴器が僕の全てをばらしそう

何故か尾崎行雄翁を思い出す。

出廷時、補聴器を片手に杖を突いた姿が痛々しく、脳裏にある。

現代であれば、小型で他人の目に気付かないのになど、勝手に思う。

罌堂翁の功績は、二十五回もの衆議員の外、ワシントン D. C. に櫻の苗木三千本を贈呈など数えきれないほどの足跡を残された。

句中の「全てをばらしそう」の内にあるものは、補聴器に寄り、脳内のニューロンを繋ぐシナプスが活発に働き出し、頬破りしていた過去を洗いざらい脱ぎ捨てて、邁進する意欲が満ちあふれて、活力のある希望がうかがえる。

ギシギシと老いの背丸く米を研ぐ

今時の米は、臼で磨砂を入れて搗いた昔と違い、ギシギシと力を入れて研がなくとも良い様に精米されているので、さつと軽く洗い流してよい迄になっている。

作者は、昔ながらのへつつい（竈）で鑊釜に重い蓋へ、「おねば」が逃げないように八巻をし、火吹竹で永年飯炊をして来た勘で、旨い飯を家族に満足させて来たと思う。三百六十五日、毎日の炊き上がりを氣にして若い頃は焦したり、めつこまんまにしたりした、過去の想い出。これからも毎日米を研ぐ。見習わなくてはなるまい。

全世界無病息災祈願年

漢詩の境地、二四不動、二六対など、面倒なことは捨て置き、川柳の世界に此の様な作法はあまり見られないが、先人は結構発表している。和歌が原点と思われる。

庚子歳民族祭典不以無念

宵星

など、沢山有ります。

漢字だけの作法は、偶然に出来る時が佳句を生み出す切っ掛けと成る。

泉のごとく良い句を望む。

佳 作

コロナでも未来へ叫ぶ呶々の声

今更改めて申し述べる事もなからうが、ウイルスコロナの突起は、日食時の姿が王冠に似ている光体で太陽のコロナと親しまれていたが、突如、中国の武漢三鎮から発病し、全世界に蔓延するに至り、折角の親しい太陽のコロナの愛称が、悪のコロナとなる。

早く科学万能の力で「ワクチン」が完成すれば良いのだが、今の処ウイルスには、苦戦中である。

それでも、新しい命が呶々の声を上げ、全世界が頑張らなくてはなるまい。

黄昏へ添って歩幅の思いやり

人生も黄昏、お互いによく生きて来た

ものだ。人生五十年とは昔の事、今は年金にすぎり何とか生きて行ける。

有難いことです。

若い時は汗水流し一生懸命働いた、ご褒美にあやかり、お互いに歩幅を合わせて行こう。

老いひとり明日は我身か救急車

老人ばかりに成り、老老介護の世、若い者には年寄りの気持ちは読めない。五体満足であれば、施設にはご厄介にはなりたくない。

しかし、何時体調が崩れるか知れたものではない。そんな時に救急車が通れば他人事ではない。己もご厄介になるかも知れん。

明日は我が身と、心細さが切実に身に沁みる昨今である。作者だけではあるまい。

人間の罪証された温暖化

ヒートアイランド現象。東京では百年前に比べ、三度上昇。両極の水はどんど

ん解けて行く。小さな島は消えてしまう。国際で温暖化防止を決議しても、大国の勝手気儘な「エゴ」で防止が進まない。こんなことで良いのか、人類の大きな課題である。

背伸びしてブラックコーヒー飲んだ

朝

カフェノワール 大人の気分。

本当のコーヒーはブラックでなければと粹がつているが、産地に寄って味・風味など豆の煎り方等でガラリ変る。

朝のコーヒープラックで大人の気分は只苦い、此の苦みが世間の味で、苦い内に色々な味が包含されている。それが分かれば一人前と成る

選 者 吟

中村 宵星

マイホーム世代が代わり粗大ゴミ

生きている証カードにガードされ

躓いて六方となる氷結路

貧乏の底を這いずり子等育ち

尻馬に乗って何時の間御者にされ

審査員紹介（＊本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師

対馬 俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東 璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師

文芸誌『海光』代表

竹中 征機

詩

日本現代詩人会会員

北海道詩人協会理事

鷺谷 峰雄

短歌

新アララギ会員

道南歌人協会顧問

山縣 庸美

俳句

函館俳句協会会長

『ホトトギス』同人

熊澤 三太郎

川柳

函館川柳同好会顧問

中村 宵星

あとがき

『市民文芸』第六十集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆十七編、小説十二編、文芸評論二編、ノンフィクション七編、詩二十三編、短歌九十一首、俳句二二〇句、川柳九十四句、計三百七十五点となりました。

多くの皆さまに支えられて「函館市民文芸」は長く発行を続けられて、今回第六十集を刊行できました。昨年は表彰式が、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となり、残念な思いをいたしました。現在も感染者は日々出ており、毎日の生活に不安を覚える中、作品作りにご尽力いただきましたこと、感謝申し上げます。これからも市民文芸を、どうぞよろしく願います。私共も、皆様方に広く浸透するべく取り組んでいきたいと思えます。

最後になりますが、各審査員の先生方にはご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 ―第六十集―

発行日 令和3年3月20日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・

マルエイヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26―1）

TEL（〇一三八）三五―五五〇〇

題字 木下 順一

表紙 函館市中央図書館前庭の桜（撮影・丹羽 秀人）

印刷所 有限会社 日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）
2. 原稿は未発表のものであること。
3. 原稿には ①応募部門
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号 を明記してください。
4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。
5. 応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承ください。
6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。

